

14-230



1200701592602

14

230

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



二上T96

14
230

哲學館第五學年度
國文學
系學科講義錄

關根正道

國文學目次

はしがき

古今集序

土佐日記

首途の條

船中に若菜を得たる條

舟子の唱歌を聞く條

住吉の濱にて風波にあふ條

枕草子

大進生昌に門の狭きをせむる條

木の花は

草の菴を誰か尋ねんと答へし條

このきみと秀句せし條



九

一
二
六〇
六一
六六
六九
七二
七七
七九
八九
九五
一〇八

名おそろしきもの……………一四

竹取物語……………一六

發端の文……………一八

石上中納言子安貝を索むる條……………三一

伊勢物語……………四四

東下りの條……………四七

生駒山を見たる條……………五四

惟喬親王を訪ひ奉る條……………五六

右大將の奉れる石に歌そへたる條……………六二

源氏物語……………六六

桐壺の更衣のなきあどの條……………七〇

國文學目次畢

國文學

講師 關根正直講義

國文とは古文の別稱にあらず。太古以來今日迄本邦に行はれ來し文章を、總べて國文とは云ふべきなり。されば茲に講ずるも、あながち古文に限るにあらねど、先づ中古の文より始むるは、抑、故あり。予先年、日本文學史といふ標題の下に、太古以來近世に至る迄、歌文の沿革學事の盛衰等、よろづ文學に關する歴史をいさゝか講述せしとありしが、それには時間の都合ありて、唯一涉り文學の變遷と、特殊の事件のみとを掲げたる迄にて、各時代毎の、諸種の文、歌の形式の如きは、總べて釋義を略せりき。今度、又更に講義録を發行するにあたり、館主の求めにより、前年講せし文學史の補遺ともなり、且は一般の學者、前年の文學史を讀まぬ人のための、資益ともならしめんとて、古來の文章中より、精を取り粹を抜き、その義を講ずる事と定めつ。

折こそよけれ、現今本館生には予が先年編述せし歷代文學といふ書に就き

て、諸種諸牀の文章を講ずるを以て、それを移してこゝに載する事とはなし
つ。されど奈良朝以前の文は、高古に過ぐれば姑く措き平安朝時代の文より
始めんとす。但し文辭の難易よりいはゞ鎌倉時代以後の文こそ、用語格法、概
して平易にはあれども、文學史の順序に據り、文牀の連絡、古今の變遷を示さ
んには、かく次第する方よからんと思へばなり。讀者これを諒せよ。

古今集序

古今集序は、今より九百九十餘年前の人、紀貫之の勅を奉じて撰みたる所なり
貫之はもと和漢の學に通じ、殊に和歌に於ては、人麿以來の神仙とも云はれた
る人なり。當時かゝる文は漢文にかく例なりしに、貫之は、さすが一家の意見あ
りて、かく勅撰の集に和文の序を加へ、空前の例を創めつ。是れ實に本邦序文
の嚆矢なり。扱、此の古今集には別に紀淑望のかけりと云ふ漢文の序ありて、貫
之は、それを和譯せしものなりとの説あれど、おのれは反對の鄙考あり、折を得て
論述せむ。

やまと歌は、人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける。

此の一句の大意は、和歌といふものは、人の心がもとにて、其の心のうつるまに
まに、幾千萬の詞にもなりたるものなりといふなり。

さて、其の文字につきて大要を略解せん、やまと歌は、から歌に對へたる名に
てやまととはもと、大和國の事なるが、歴代の天皇此の地に都を定め給ひて、
久しく、其の國が日本の首府の如くなりしを以て、古より今に至るまで、日本全
國をもやまとといふなり。

人の心といふ文字は、先輩も往々疑ひし所にて、或人は、顯昭の古今抄に、ひとつ
心とあるを是とし、ひとつ心とは謂ゆる一心にて、萬の言の葉に對して、文章上
の趣味ありといふ。

萬の言の葉とは、澤山の詞といふに等し、必しも万個の言葉にあらず。万葉集と
いひたりとて、和歌万首あるにあらず。

世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を見る物、聞く物につけて、
いひ出せるなり。

此の大意は、世の中に生れて居る人は、種々の事に出遇ひ、或は樂み、或は悲み、怒

ることあり、笑ふことあり。これ皆心のしわざにて、其の心に在りて、千萬の感情を、花鳥風月等に附托して、うたひ出せるもの、即、歌なりといふに在り。

前の「よろづの言の葉こゝのしげき」見る「聞く」等は、ちのづから文をなして面白し、讀む人味ふべし。

花に鳴く鶯、水に棲む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、何れか歌をよまざりける。

大意は、試に花間に囀る鶯、水邊に鳴く蛙の聲を聞け、其の聲音に、長短曲折のあるところ、皆、是れ歌にあらずや。然れば、歌は、鳥獸、虫の類に至るまで、皆うたふものなるに況して、人たるものをや、といふなり。

花に鳴く鶯とは春の意を含みたる言葉なり。

水に棲む蛙とは、田に鳴くかへるをさしたるにあらず。彼の河鹿をさしたるなり。万葉集にかはづとあるも、亦、皆、かむかをさしたり、これは、前の春の意に對して秋のこゝろを含めり。

生きとし生けるものとは、此の世に生活するもの、意にて、動物一般をさした

るものなり。或は、山川植物の類までも、此の中に入れんとするものあれど、よろしからず。貫之の意は、かくまで廣くさしたるにあらざるべし。又、風聲、水音は、自然の美にて、此の世に生活するもの、とりて以て、歌ひいださん、料にこそ供す。れ、風聲、水音、そのものが、自、其の心をうたひ、いだしたること、千古、いまだこれあらず。

何れかは俗に何物かといふに同じ、何物か歌をよまざりける、歌よまぬ者はなしとの意、何れかあるかの字は反語なり。

力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも、和らげ、猛き武士の心をも慰むるは、歌なり。

大意 歌となりて、萬物を感じしむる効驗をいへば、腕力を用ひず、たゞ、やさしき言葉の上にて、天地の神靈に感動を與へ、又、吾等の眼力の及ばぬ魑魅の類に嘆息の聲を發せしめ、男女間の交際を睦くし、なほ、狐豹も三舍を避けん、武士の心をも慰むるは、これに外ならずといふ意なり。

此の句は、毛詩の序なる、動天地、感鬼神、莫近於詩といふを本として、却りて、其の

上に出づ。何となれば、力をもいれず、云々の句は腕力を以てするも到底動かし得ざる天地をも、一首の歌にて動搖すべしと詞の上は只動かすと聞かせて實は感動せしむることなればなり。以下の句も皆それ、趣味の唯ならぬを思へ。

天地を動かしといふは、科學的觀念よりいへば元よりあらぬ事ながら、文學上より云はれ、かゝる言葉を用ふる事常なり。諸者、理屈に拘泥して、此の趣味を忘るゝことなかれ。

鬼神のまには和名抄に於爾とあり。文字と詞とは、鬼神、於爾などいへど、吾人の目に見ゆることなし。歌はそのものに、感動を與ふといふ。其の功德の大なるをたとへたるに過ぎず。

男女の中の例は、伊勢物語に、風吹けばあきつ白波たつ田山云々とあり。

猛き武士の心の柔和になる例も、昔より少からず。雄略天皇の故事、日本紀に見ゆ。

此の歌、天地の開け始まりける時より、出来にけり。

大意 さて此の歌といふものは、決して、かりそめのものにあらず。そも、開闢の始めより、出来たりとなり。

是より、歌の始めをいふ前には、其の原由と功德とを述べたるまでなり。

志かあれども、世に傳はる事はひさかたの天にしては、下照姫に始まり。

大意 これ、歌として、今の世まで傳はるものは、天に在りては、下照姫の歌を始めとす。

志かあれどもは、前に天地の始まりける代といひたれば、更に此の文字を加へたるなり。

世に傳はるは、後世に残り傳はるの意なり。

久方は、天といふ詞の枕詞にして別段の意味なし。或人は此の久方といふは借字にて、「日刺方」の意。日の光の刺す方の天とつゞくなり云へり。

下照姫の事は本註に詳なり。曰く、下照姫とはあめわかみこの妻なり。兄人の神のかたちをか谷に映りて、輝くをよめる夷歌なるべし。これらは、文字の數も定らず。歌のやうにもあらぬ事どもなり。といへり。さて、其の歌は、あめなるや、をど

たなばたのうながせる玉のみすまるみすまるの、あなたまはやみたに、ふたわ
たらす、味相高彦根の神ぞやとあるものは是れなり。古事記には、此の國土にての
事のよしあれど、此の序は、日本書紀を正しきものとして、かくは記ししものな
らん。

あらがねの地にしては、須佐之男、命よりぞ起りける。

大意 此の國土に於ては、實に須佐之男、命が歌をよみ給ふを以て始めとなす。
あらがねは、地の枕詞なり。在家根に書きて、御殿をミアラカといふも、在家の意
之土は殿を建つる根本なる故なりといふ説あり。

須佐之男、命の御事は、本註にまかしくあれど、茲に掲げず。其の御歌は下文に
あり。

千早振神代には、歌の文字も定まらず。すなほにして、ここの心わきがたかりけらし。
大意 神代の時分は、心に感ずる事を、人が聞きよし聞きあしとに拘はらず。口
より言ひ出でたるものなれば、其の文字も定まらず。しかどは其の心のほど、辨
へがたし。今見て、しかるのみならず、當時も、しかりしならん。と推察したるなり。

千早振は、神といふ枕詞なり。此の詞は、イチハヤナルの約にて荒ぶど同意。實は、強神
をいふ事なりしが、今はすべての神の枕詞となれり。

歌の文字も定まらず。の文字は、必しも筆して書くをいふにあらず。古は何の詞に
も、軽く用ひしものにて、文字の定まらずとは、詞の數の、五文字、七文字ときまり
たることなしといふ意。

すなほは、質朴率直のことなり。必竟、ありのまゝといふに等し。

ここの心 は、其の歌の意味をいふ。

けらしは、俗語に、アツタラシイなどいふ言葉なり。

人の世となりて、須佐之男、命よりぞ三十文字あまり一もむはよみける。

大意 さて、人皇の代になりてよりぞ、當時の如く、心得やすき、三十一文字によ
む事になりたるなり。

人の代りとなりて、の下に須佐之男の命より、の八字あれど、此の、八字は、前に
もあり。蓋、後の世の人誤りて寫し、より、かくは、なりたるならん故に、これを省
きぬ。みそひどもむ、の歌は、須佐之男命のよみ給ひし外にも、尙、一つ、二つあり。

よりて、命の歌と共に左に掲げん。

「八雲たつ、いづも八重垣つまごめに、八重垣つくるその八重垣を」 須佐之男命作

「あか玉は、あさへ光れど、白玉の君がよそひしたふどくありけり」 玉鬘賣の作

「あきつ鳥、かもどくしまに、わがぬし、妹は忘れじよのことごとくに」 魂々手見命の作

さて、須佐之男命の、此の歌をよみ給ひしは、命天上より此の國土に降り來給ひし折出雲の國なる肥河上の鳥髪の地に、行き給ひしに、翁と姫とが、一人の小女を抱きて、打泣きあたれば、命あやしみ給ひて、其の故を問へば、此の地に、八俣遠呂智といふものありて、此の小女を食はんとするを悲しみて泣くなりといへば、乃、命は、此のものを退治して其の小女を娶り給ひ、同國の須賀といふ處に宮造し給ひたるに雲の立騰りけるを、御覽遊ばされて、よみ給ひしなり。御歌の意は己が宮を造るにつけて、無心の雲まで八重垣をつくりてくれる事の、嗚呼、八重垣よ、といひ給ひたるなり。八雲たつは彌祖立の意にて、雲の多く重なり立てるをいふ。八個八色の雲の事にはあらず、八重も然り。歌の末字のをは、よといふ詞に等し、即、感歎の意を含む。

かくてぞ花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ心詞多くさまざまになりける。

大意 しかる後、或は花を賞翫し、或は鳥の音色を羨み、或は霞を見て、世事を歎き、或は、白露の玉に似て愛らしきをよろこぶ事などの意と詞とが多く、さまざまになりたるなり、といふことゝなり。

かくてぞ は、上を受けて、下を起こす言葉なり。

めで は、愛の字にあたり、うらやむは、羨慕の意なり。あはれみは、憐の意として、苦しからず。

かなしぶ は、今日の詞にては、悲歎の義なれど、昔は、可愛、可憐の意にて彼の、あまの小舟のつなでかなしもとあるは綱手をひく様の面白きをいひしなり、心詞は、心と詞との二つをいひ、物に感ずる心と、口より發する詞とをさし、而して、文の初めに「人の心」萬の言の葉とあるに遙に應じたるなり。

遠き處も、出たつ足もとより始まりて、年月をわたりて、高き山も麓の塵土よりなりて、天雲たなびくまで、あひのぼれる如くに、この歌もかくの如くなるべし。

大意 支那の詞に千里の行も足下に始むむといふより出で、遠方に行くも、其のものは一足ふみだすよりあこりて、遂には幾月も何年もかゝる程の處に到着し、又、いかに高山も麓の塵土が積り重り、漸天雲と肩を比ぶる程のもとなれるなり、而して此の歌も、亦、かくの如きものならんといふ、何事も僅少なるもの、其の源となり、漸を逐ひて、廣大なるものとなる理を述べて、此の歌の、漸々、盛りになりゆくべきに譬へたるなり、かくの如くなるべしとは、其の前句は、過去を指しながら、一轉して、未來をいひたるものにて、作者の意を用ひし所、見ゆ、前に「この心、わきがたかりけらしは、現在を以て、過去をも、はかりたるなり、文筆の自在なるにあらずんばいかで、かくの如きを得む、

難波津の歌は、帝の御始めなり。

大意 難波津に咲くやこの花、冬ごもり、今を春べと、さくやこの花といふ歌は大御代の初めを祝ひ奉りし歌なりとの意か。

此の文は、言辭簡畧に過ぎて、甚、解し難し、本居宣長翁は、曰く、さて、難波津の歌は

天子の御事をよんだ歌のはじめぢやといへり、なほ考ふべし、又、此の句の下に、あほさゝぎの帝の難波津にてみことときこえける時、東宮を互にゆづりて、位につき給はで、三年になりければ、王仁といふ人のいぶかり思ひて、よみてたてまつれる歌なり、この花は、梅をいふなるべしとあるも、亦、例の杜撰なり、第一に王仁の歌とする、いと覺束なし、第二に此の歌は、御即位後の歌なれば、王仁の詠る筈なし、第三に、この花は、諸木の花をさし、唯梅花のみと限らず、さて歌のこゝろは、難波津におはします、天皇は、今は、既に、春に遇ひ給ひたりとて、いやさかえに、さかえ給ふと、いふこゝろにて、木の花とあるは、かしこくも、天皇に譬へ奉りたるなり、冬ごもりは、春の祝詞なり。

淺香山の言の葉は、采女の戯れよりよみて、

大意 彼の、安積山かけさへ見ゆる山の井の、あさき心をわが思はなくに、といふ歌は、采女の戯れより、よみたるものにて、この意にて、これも前句と同じく詞足らざる心地す。

又、此の歌は、妾が心、君に淺からんや、いともなつかしく思ひまゐらするものを、

といふ意にて、其の由來の大略は、本註に明かなり。曰く、かつらぎのおほきみ、をみちのおくへ遣したりける時に、國の司ことおろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女のかはらけとりてよめるなり。これにぞおほきみの心解けけにける。

一本に、此の歌の下の句を淺くは人を思ふものかはどしたるはいか。

このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の始めにもしける。

大意 此の二首の歌は初めのは、大御代の木の花と共に榮え終のは、大君の怒の山の井の影と流れしほどの芽出たきものなれば、小供の手習の初めを祝ひて、難波津は、男歌、安積山は、女歌なるが故に、小供にとりて、父母のやうにといへるなり。

或書に、此の文の心を誤りて、二首の歌を、世にありとある歌の親どしたるは、用ふべからず。

中古は、學齡兒童に、教ふるに、必、この二首の歌を以てしたりしとは、源氏物語の若紫の卷に、紫の上の幼き時、祖母尼君が、まだ難波津をたにはかしくつくつ

け侍らぬといはれしに、あさか山淺くも人を思はぬに、など山の井のかけ離るらんと源氏、君が歌よみ給へるを見ても、知るべし。然るに後世、いろはの爲に壓倒せられて、今日は、そを手本として手を習ふ人絶へてなし。歌の心よりいふ時は、難波津の歌は、今のいろはより勝れるに相違なきも、便利の上よりいへば、後者の方遙に上なり。世の中は不便のもの捨てられて、便利のもの残るは此れを見ても、その理を察せらる。

そもく、歌のさま六つなり。からの歌にも、かくぞあるべき。

大意 さて、其の歌といふものには、元來、六つある事なるが彼の外國の詩にも、定めて此のやうなるべしといへるなり。

そもくは、其も其もにて、前にいへる詞をうけて後文を起す文字なり。後の人、此法を悟らず、發端の辭と思へるは、誤謬の甚しきものなり。

歌のさま六つなり。とは、歌に六躰あり、といふ事にて、これは、貫之が唐詩に六義あるを知りながら、殊更に我れを主とし彼れを客としてかけるにて、當時、朝野の學者才子、大抵、唐詩に耽りて、太古より我が國に固有の歌、文ありしを忘れ

んとするを歎き、わざとかく我れを貴くし、彼れを卑しめたるものならし。かくぞあるへきといへるも、實は、貫之の如き、漢學にも通ぜし人は、かくありと確乎と定めても苦しからざるに、そを知らぬさまに、此の工合であらうとしたるものにて、紀氏、當時の心中、豈、想像の及ぶべき處ならんや。後世の歌人、先、指を貫之に屈するもの、其の因なきにあらず。

其の六種の一つにはそへ歌

大意 今、六種ありといひたる、其の第一をいへば、そへうた是れなりといへるなり。

六種とは、風、賦、比、興、雅、頌の六義をさしたり。

そへうたは、即、風にあたる。されど、古より、今に至るまで、實は、此區別なし。但、そへは、よ、そへ、と、同言にて、諷の義なるべし。

此句の下に『おほさゝきのみかどをそへたてまつれるうた難波津にさくやこの花云々といへるなるべし』とあるは、後人の註にて、紀氏の眞筆にはあらず。殊に、なるべしと疑ふは、この文勢に於て、決してあるまじきことなれば、讀者、よ

ふたつにはかぞへうた

く、其の意を味ひて、後人の加筆なる事を知るべし。されば『ひとつにはそへうた、ふたつにはかぞへうた』と讀むべきことなり。

句の意のづから、明白なり。然れども、かぞへうたは必しも、賦の義にも當らず。又此の句の次に『咲く花に思ひつくみのあぢきなき身にいたつきのいるも知らずて、といへるなるべし。これは、たゞごとくにいひて、物にたとへなどもせぬものなり。此の歌、いかにいへるにかあらむ。其の心得難し。いつくにたゞごとくたといへるなむこれにはかなふべき』とあるも、文の幹、紀氏の筆と見へず。歌は大友黒主のよみしものなれば、大意をいはんに、つくみは、鳥のつくみと、咲く花に思ひつくみとを取りまぜていひ、一首の意は、咲きてある花の面白きに、恍惚として、思ひきる事能はず。つひに我が身に所勞いたづらの發するも知らずとは、あゝと嘆きたるなり。

尙、註者が此の歌のかぞへうたにあたらず、却りて第五のたゞごとくうたなる『いづはりのなき世なりせばいかにばかり、人の言の葉うれしからまし』といふが此

の第二にはあたるべし、といひたれど、前にもいひし如く、我が國には、古より、歌の道に、かゝる區別なきことなれば、註者の辯は、夢中美人を評せるに等し、何の益かあらん。

みつには、なずらへうた

これは、第三の比に當れり。此の下に「君がけさあしたの霜のおきていなば、戀しきごとと消えやわらむといへるなるべし。これは、物になずらへて、それがやうになむある、どやうにいふなり。この歌、よくかなへりとも見えぬ。たらちねの親のかふこのまゆごもり、いぶせくもあるか妹にあはずて、かやうなるや、これにかなふべからむ」とあり。始の歌は、男の歸る時に、女のみしものにて、謂はゆる戀歌なり。其の大意は、君が今朝、起きて行き給は、君をこひしと思ひつゝ、月日を渡ることならむとなり。おきては起と置と兩訓相等しきをいひかけ、消えは、こゝろのきえと、露のきえとをいひかけたり。此の比は、一物に比ぶる事にて、此の歌、よく、其の意をつくしたりとも見えぬ。さて、終りの歌をいだしたり。此の終りの歌の意は、蠶の繭にこもり居て、鬱々たるにも比ぶべく、われは、我が

意中の女にあはずして、物憂し、となり。上の句はすべて序なりと知るべし。たらちねは足乳根の義といふ。母の枕詞なり。思ふに此の歌が、果して、第三のなずらへ歌に適合するか疑はし。

よつにはたどへうた

これは、第四の興にあたり、万葉集の譬喩歌に近きものと思はる。されど萬葉の作者は、これがたどへうたなりとあもひて、よみしものにあらざるべし。此の句の下に「わが戀はよむともつきむありそ海の濱の眞砂はよみつくすとも。といへるなるべし。これは、よろづの草木鳥獸につけて、心を見するなり。この歌は、かくれたる所なむなき。されど始めのそへ歌と同むやうなれば、少し、さまをかへたるなるべし。すまの海士の沙やく煙風をいたみ、思はぬ方にたなびきにけり。此の歌などや、かなぶべからむ」とあり。又これも、後人の註せしものにて、本文にあらざれど、ひとわたり、茲に講すべし。前の歌のこゝろは、我が戀の物思ひの繁きことば、其の數かぎりなくして、とても數へつくす事はかたからん。彼の濱邊の小石は、數限りなきためしなれど、そを一々計算しなば、終には、其の數の幾何

なるかを知る事もあらんが、といひ上の句へかへりて、我が物思ひの數多きは
瀆の小石の比にあらざとなげきたるなり。

ありそは荒磯にて、實は海のありそといふべく、ありそ海とは、いひ難きことな
るが、そのかみより、誤謬のまゝ使用する事となれり。

此の歌はかくれたる所なむなきとは、此の我が戀はの歌は、眞にたとへうたと
すれば、其の本義を明白に表出せず、隠れたるやうあるべきに、さにあらずして、
此の歌の如く、あらはに、其の本躰を見はすは、たとへ歌としては、惜むらくは、適
當せずといふ意なり。

さまをかへたるなるべしは、此の歌は、たとへ歌としては、適當せざれど、かくて
は第一のそへ歌と同じやうになれば、少しよみさまをかへたるならん、その心
なるべけれど、其の詞の確然せざる所、いよゝゝ我が國に六義のなかりしを知
り得べし。

さて、後の歌のころは、我が意中の人の、わが方へ通はずして却りて、案外なる
他人へ靡き居るを、啣ちたる詞にて、須磨の浦の海士か沙をやく煙が、風の強さ

いつしにはたゞこと歌。

に、よそへなびきたり、といへる心にて、我が戀の事は、少しも詞にあらはさずし
て、偏に煙に附托してよめるなり。故に曰く、此の歌などやかなふべからむと。

たゞこととは、下の注によれば、こととのほりたゞしきをいふ由に聞ゆれ
ど、土佐日記にある「たゞこと」といふ意は、ありのまゝ、といへるものなれば、予は
註者の言を探らず、蓋紀氏の意にては、ありのまゝの歌といはれしなるべし六
義の雅にあたるなり。

註に「いつしはりのなき世なりせばいかばかり、人の言の葉うれしからまし、とい
へるなるべし。これは、こととのほりたゞしきを云ふなり。此の歌の心、さら
にかなはず、山ざくらあくまでいろを見つるかな、花散るべくも風吹かぬよに、
此の歌とやいふべからむ」といふり。

前の歌の意は、此の世に、虚言をいふものなき事ならば、いか程、人の詞が、うれし
く聞ゆるならん、さるを、虚言のある世ゆゑ、うそも、まことも、親切も、不親切も、一
様に聞えて、何をばなされても、うれしく感じたる事なしとなり。

ど、のほりは、漢字の整にあたる。ど、のふといふを、ど、のほりと延ばしたるなり。

此の歌のこゝろ、さらにかなはずとは、前の歌のこゝろは、たゞこと歌にあらず、といひたるなり。多くの書に、此の下に『とめうたどやいふべからむ』の十二字あれど、そは、後の世の誤寫にて、前に記したる如くなりしを、ことど、のどめ、何れも字形の同じきより、かくうつし誤りたるならむ。

後の歌は續古今集の春部にある、平兼盛の詠なり。太平なる大御代にあひ、花の散りさうなる風もなければ散易き山櫻すら、充分に賞翫するを得たり。といふこゝろにて、いと目出度歌なり。此の歌が、當時をありのまゝにいひたりや否やは讀者の判断に委ねん。

むつには、いはひうた

第六の頌にあたり。頌の意は、詩序に美盛徳之形容以其成功告神明者也といひ。此のいはひとは、齋といふ字の訓にて、音は、神を齋くに用ひしが、後世は、世を祝し、人を賀する時にも、用ふることをなれり。

註に『この殿はうべもどみけりさき草の、みつはよつはに殿づくりせり。といふるなるべし。これは、世をほめて、神につぐるなり。此の歌とは見えすなむある。かすが野に若菜摘みつゝ萬代をいはふ心は神ぞしるらむ。これらや、すこしかなふべからむ。ちほよそ、むくさにあかれむことは、えあるまじきことになむ』と見ゆ。

前なる歌は、催馬樂の呂歌にて殿舎の壯大なるをほめたるなり。意は、ちのづから、明けし。うべは、俗にげにもといふ詞に同じ。漢字にては宣の義にあたる。さき草は幸草の義にて今の百合なりといふ。此の草三葉にあかれて花咲く故に三葉の枕詞となるぞ。殿舎の三棟四棟と相並ひ相對したる躰を花に准へて形容せしなり。

みつはよつはのはの字に、つきては二説あり。一説は、はは、軒端のはなりといひ、他の一説は、一間二間のまの音便なりといふ。何れにしても此の歌の心を損することなし。つまり壯大なることをいひたるに過ぎず。

これは、世をほめて神に告るなりとあるは、甚心得ぬ事なり。願ならば或は神明

にも告げん。然れども、昔より、我が歌にては、其の功德をうたふが、即、神に告げたるに等しきなり。三十一文字の中にて、徳をほめ、且、神に告げんは中々に容易ならず。よし、容易なりとて、あからさまに神に告げんとて歌よまば、必、其の語調の拙なるに至らむ。

此の歌、いはひうたとは見えざといへるも、註者の偏見なり。前の歌の心、や、いはひうたにかなへるやうおもはる。

後なる歌は、此の集の賀部にありて、『内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十の賀したる時に、四季の繪かけるうしろの屏風にかきたりける歌』と見えたり。其のころは、初春、春日野に出で、若菜を摘みながら、我が君の壽、萬代もながく經給へとて、いはふころは春日の神こそ、しろしめし給はめとよみたるなり。但、春日の神は、藤家の遠祖を祭れる社なればなり。

これらやすこしかなふべからむとあるは、此の春日野の歌は、いはひうたとして、先、よろしき方ならんの意なれど神ぞしるらむとありたりとて、必しも、神に告ぐるころなりとはいひ難し。

かくて註者は、六義の事を結論して、和歌を六昧にすることは、到底むつかしきことゝしたり。固より、いはずもがなの論にこそ、香川景樹翁が此の文句を痛評して、『畢竟、五十歩の論にて、いづれとるに足らず』といひたるは、さすが一見讀ありといふべし。

今の世の中、いろにつき、人の心、花になりけるより、あだなる歌は、かなきことのみいでくれば、色好みの家に、うもれ木の人知れぬことゝなりて、まめなるところは、花すゝきはに出すべきことにもあらずなりたり。

大意 近來は、兎角、世道人心が虚飾に流れ、浮華を喜び、古の率直質朴なる氣風を失ひしにより、浮華なる歌、輕々しき詞のみ、人の口にのぼることゝなりたれば、斯道は、好色家の玩弄物の如く思はれて、嚴然たる人の前、正しき場所には、出すべからざるやうなりたりとなり。

これば、貫之が斯道の衰頹せるを慨嘆したる詞にて、當時の國史、國文を讀まば、如何に、唐詩が盛んにして、如何ばかり、歌道が衰へしかを知り得べし。尙、貫之が當時、此の勅撰集の爲に、非常に心勞したる有様見ゆ。而して、其の結果は、吾等が

歌集といへば、必、この集を推し、古の作者といへば、又、貫之を數ふることゝなれり。予は此の序文を讀む毎に、貫之、其の人の功と、當時の趨勢とを想像せざることをなし。嘗に昔時を追想するのみならず、今日、果して、貫之ありや、斯道の盛衰は、如何ぞやとの觀念が、我が腦中に浮び來らざるはなし。

いろにつきとは浮華といはんが如し、花になりも同じところにて虚飾になることなり。

あだは輕薄の意なり。復讐の詞と、まがふべからず。はかなきは、輕々しき意なり。色このみの家とは、謂はゆる好色家のことなり。

埋木は人しれぬといふ詞の冠辭。此の處の意は、好色家の手に埋れ了りぬ、といはんが如し、まめは、實直のことなり。

花すゝきは、ほに出の冠辭。ほに出は、あらはすといはんが如し。此の處の文章の結構をいへば、世の中と、人の心と相對し、いろにつきと、花になりと、又、相對し、あだ、はかなき、色このみの家、まめなる所、埋木、花すゝき、何れも、並ひて、詞のあやをなせり。

「そのはじめを思へば、かゝるべくなむあらぬ。いにしへの世々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごととに、さぶらふ人々を召して、事につけつゝ、歌を奉らしめ給ふ。

大意 さて、溯りて、歌の起原を尋ぬるに、決して、好色家の手に埋れぬべきものにはあらず、上代の諸々の 天皇は、必、これを翫ひ給ひて、春の花の朝、若くは、秋の夜の月などを御覽せられし時は、その左右に待ふ臣下にも、仰言あらせられて、歌をよめ、どの御詞もありし程なり。

此の句の前には、近世歌道の衰頹、此の如しといひ、大に嘆息する意を含め、こゝに至りて、更に、上代を致ふれば、畏くも、 天皇陛下すら、其の臣下に仰事ありて、歌を奉らしめ給ひしなり、といひ、現在、又は、未來の人に、奮激して、斯道の爲に、力を盡すべき事を述べたり。

春の花のあしたといふ詞は、いかにも、面白き詞に聞えて、後世の人、常に用ふる事なるが、これにつきて、景樹翁の論は、稍、参考に供すべきことゝ思はるれば、こゝに記さん。景樹翁の曰く、「花のあしたとあるは、聊、足はぬ心地して、打まかせたる詞にあらず。こは、月の夜といふに對へたるなれど、月の夜は、答なきなり。され

ど、これよりふるく、萬葉中にも、時雨の秋、紅葉の山などの類多ければ、猶、さてありなん。委しくは別に論あり。さて、此の類の詞、漢文の詞より、流れ來たる弊にて、紀氏も、時の勢にかゝりて、たま／＼、是ればかりの事は、あるなるべし。』といへるは、洵に尤の説と聞ゆ。予が前に對句の文字をあげたるも、皆、漢文的趣味より、かくなりしものなりとは古くよりの説なり。固より、漢文にても、よきところは、取りて、少しも差支なき事なれど、是れらの對句を以て、六朝の四六併儷體に倣ひたりとするは、酷評なるに似たり。試に、古き祝説、宣命、風土記の逸文などを見よ、何れも對句、疊句を構へ、詞を並べ、相照應せしめて、文に章あきをなしたる類少からず。紀氏の此の序文も、莊嚴に、且、うるはしくかゝんとて、斯く對句など構へしならん。凡そ、對句は六朝文の専有にあらず、我が國の古文に、甚、多かるに、唯、この序文をとらへて、直ちに六朝文體に則れりとするは、一むきなる説ならずや。按ふに、此の文は、全く古き祝説、宣命文の體格を一變したるものとも云はまほしき也。

さぶらふ人々は宮中に伺候せる人をいふ事につけつゝは、なにかの事につけ

てなり。下の文句、即、是れなり。

あるは、花をもてあそぶとて、たよりなき所にまどひ、あるは、月を思ふとて、しるべきやみにたどれる、心々を見給ひて、さかし、おろかなり、どしろしめしけん。

大意 或は花を賞翫せんとて、山深く、人氣なき所にも惑ひ込み、或は、月を愛慕して、雨夜の空、木隠の道をも厭はず、迷ひ入る風雅の情を、天皇が御覽あそばされて、さて、其の歌の心々によりて、其の人々の賢愚を見分け給ひし事にやありけんとなり。

たよりなきところは、山深く、人氣なきところの事にて、花を尋ぬる心の甚しくして、何處へ行くも、心にかげぬ心なり。

しるべきやみやみは、雨夜の空、木隠の道などいはんが如し、これも、心は前句におなじ。

心々を見給ひは、天皇が、其の臣下の作れる歌を御覽せられて、其の作者の心底を見計らひ給ふといふ事なり。さかしは、漢字の賢にあたる。

さて、君は君、臣は臣として行儀正しく、座せる時は、其の人々の心の底の曉られ

にくきもの故賢愚の程さすがに顯れぬものなれども、歌は人の情を、其のまゝ寫すものなれば、其の歌によりて、人の良否を分ち給ひしは、まことに歌の徳の至大なるを知るべし。貫之が此の句を書きし筆勢、今、眼前に見えて躍然たり。花をもてあそぶ、月を思ふ、たよりなき所、しるべなきやみ。これ亦、對なり。

しかのみにあらず、さゝれ石にたどへ、つくば山にかけて君をねがひ、

大意 公に於て、月花の爲に心をくだくのみにあらず、私の思を述べんとて、或は、さゝれ石にたどへ、或は、筑波山にいひかけて、我が君を思ひ奉るとなり。

しかのみにあらずは、しか大やけの上のみにあらずといはんが如し。

さゝれ石の文字は、彼の名高き『わが君は千世に八千世にさゝれ石の巖となりて苦のむすまで』とある歌より、取りたるなり。

つくば山は『つくばねのこのもかのもにかげあれど、君か御蔭にますかかげはなし。』とある歌より取れるなり。二首共、本集中の名歌を出します。歌の功をいひは、やしたるものと知るべし。

よろこび身にすぎ、たのしみ心にあまり。

國

文

學

句の意、おのづから明らけし、身によろこびのすぎ、心にたのしみのあまれる歌を本集中よりとれば、先『うれし、さを何につまむから衣、たもとゆたかにたてといはましを』とある歌なるべし。

富士の煙によそへて、人をこひ、松蟲の音に友をしのび、

これも、意は講ずるに及ばず、讀者の心にて曉り得べし。

されど、其の本歌を記さんに、これは、本集の戀の部に『人知れぬ思ひを常にするがなる、ふじの山こそ我が身なりけれ』とあると、秋の部の『君しのお草にやつるゝ故郷は、まつ虫の音ぞかなしかりける』との二つなるべし。

富士と、松蟲と、煙と、音と、人を戀ひと、友をしのびと、皆對なり。

高砂住の江の松も、あひちひのやうに覺え、

大意 高砂の松や、住の江の松も、自分と相生のやうに思ひて、我が身の空しく老いたる嘆くことあるを云ふなり。

高砂は、後世は播磨の國の名所となりたれども、と高きいさごの義にて山の事なり。高砂の松は古く久しきものをいひならへる例にて、本集中に、其の例を求

むれば雜の部に『かくしつゝ世をやつくさむ高砂の尾上にたてる松ならなくに。』又『たれをかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに。』とあるがごとし。住の江は攝津の國の住吉なり。住の江の松も同じく古く久しきものなり。又『住の江の岸の姫松人ならば幾世か經しと問はましものを。』のごとし。あひおひのやうに覺えは、元來あひおひには、相逐相生相老の三説ありて何も一理なきにあらざれど、予は暫く相生の説に従ひぬ。即こは自分の餘程老いたる心より高砂住の江の古き松をもあひおひの昔の友のやうに思ふとわりなき感哀をいへるなり。

男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくねるにも歌をいひてぞなぐさめける。

大意、年若い男ざかりの昔を思ひ、少女すがたのしはらくなるをくよくと思ふにも、歌をよみて思をやり、更にこれを歌うて慰むとなり。

男山の昔を思ひいで、本集中雜部の『今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありてしものを。』とある歌の意にて、男は空しく年老いたるを嘆き、男ざかりの昔を思ひ出づるを云へるなり。

女郎花の一時は、『秋の野になまめきたてる女郎花、あなかしかまし花も一時。』とある歌の意にて、女は少女すがたのしはらくなることを思ひ出で種々に嘆息するを云へるなり。

くねるは、女心に、くよく物思ふ體を云ふなり。

歌をいひてぞなぐさめけるは、上、さしれ石にたどへ、つくは山にかけてといふより以下のことを、ひろく受けてかく喜怒哀樂さまざまなる人生にありて、歌はよく其の鬱を散じ、思ひをやるものなりとて、其の徳を稱へたるものなり。

又春のあしたに、花のちるを見、秋の夕暮に、木の葉の落つるをき。

大意、上の句をうけて、尙ほ其の外にも、春秋の朝夕、見るもの、聞くものにつけて、各感ずるところを表はすとて、歌の功德を述べたるなり。

春花のちる歌を本集中に求むれば、春の部に『うつせみの世にも似たるか花櫻さくと見し間にかつ散りにけり』又、『いと櫻、われも散りなむ一さかり、ありなば人にうき目見えなむ』などの類てなべし。

秋、木の葉の散る歌は、秋の部の『奥山の岩垣もみぢ散りぬべし、照る日のひかり

見るときなくて『又、秋風にあへず散りぬるもみぢ葉の、ゆくへ定めぬわれぞ
かなしき』のたぐひなるべし。

春のあした、秋の夕ぐれ、花の散るを見、木の葉の落つるを聞きは例の對句にて
本文のあやなり。景樹翁の、秋の夕暮を、『春のあしたに對はば秋のゆふべとぞ
あるべき、さてそ調も詞もどしのふべく覺ゆ』といひたるは、さる言なり。

あるは、年毎に、鏡の影に見ゆる、雪と波とを歎き、草の露、水の泡を見て、我が身をおどろき、
大意、鏡の影にうつる、頭の白髪や面の皺の年毎に多くなるを見て、吾か身の
老いたるを歎き、草の露や、水の泡の消えやすきを見て、人生のはかなきことに
驚くをいへるなり、

頭の白髪を雪にたとへたる例を求むれば、本集春の部に、『春の日のひかりにあ
たる我なれど、頭の雪となるぞわびしき』又物名に『ぬば玉の我黒髪やかはるら
む鏡のかけにふれ白雪』とあり。

面の皺を波にたとへたるは、忠峯の長歌に、『ながらへて難波の浦にたつ波の、な
みの皺にやあぼゝれむ』云々とあり。

人生のはかなきを草の露にたとへたる例は、哀傷歌に『露をなごあがなるもの
に思ひけむ、我が身も草にあかぬばかりを』とあり。
水の泡にたとへたる例は戀の歌に、『うきながら消えぬる泡ともなりぬらむ、流
れてとだにたのまれぬ身は』とあり。

あるは、昨日までは榮えおどりて、時を失ひ、世にわび、親しかりしも疎くなり。

大意、昨日までは、榮華極めたりし身も、今日は縁欠けて貧賤のものとなり、又
親密の間柄も、疎遠になることありといへるなり。

昨日は榮えおどりてとは昨日までは世に用ひられ人に尊ばれて、さも時めき
たるをいふ。

時を失ひ、此の上に、今日はの三字なくては文をなさず、景樹翁も『きのふは榮え
おこりての下に、けふはの一句脱けたり難波本に今日は時を失ひとあるぞ正
しき、必ずなくては文をなさず』と云へり。即、昨日までは時めきたる人も、今日は
世に捨てられて不仕合になりたるをいふ。

世にわび親しかりしも、とは、この社會にわび住居するに就て親密なる朋友親

族の中も、縁欠けて疎くなりゆくといふこゝろなり。
 これらの例は、本集雜の部に『世の中は、何か常なるあすか川、きのふの淵ぞけふは瀬になる』又、『光りなき谷には春もよそなれば、咲きてとく散る物おもひもなし』とある類なるべし。

あるは、松山の波をかけ、野中の水を汲み、秋萩の下葉をながめ、曉の鳴のはねがきをかぞへ、

大意 松山の波や野中の清水を喩へとなし、又萩の下葉をながめ、鳴の羽根がきを數ふとなり。是亦前後につゞきて、歌の功德を稱ふるなり。

松山の波は其の例、本集中に『君をおきてあだし心をわがもたば、末の松山波もこえなむ』とあり。

野中の水の例は、同、雜の部に『古の野中の清水ぬるけど、もとの心をしる人ぞ汲む』とあり。

秋萩の下葉の例は、同、秋の部に『秋萩の下葉色づく今よりや、獨ある人のいねがてにする』とあり。

曉の鳴のはねがきの例は、同、戀の部に、あかつきの鳴のはねがきも、かかき、君が來ぬ夜はわれぞかぞかく』とある類なるべし。

波にはかけといひ、水には汲みといひ、萩にはながめといひ、鳴にはかぞへといへるは、皆物によせて意を述ぶるより、わざと縁語を用ひていへるなり。文章の法かくありてこゝそめでたけれ。

あるは、吳竹のふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨みきつるに、
 大意 身の憂き事を世に語り、吉野川を比喻にとりて世の中を恨みたるにといふこゝろなり。

吳竹はふしの枕詞なり。吳竹のふしの例は、本集中、雜の部に『世にふれば言の葉しげき吳竹の、うきふしごとに驚ぞなく』とあり。

吉野川の例は、同、戀の部に『流れては妹背の山の中にもつる吉野の川のよしや世の中』とあり。

人にいひ、ひきては、歌をよみて人に語り、喩をひきて世を恨むといふまでの意にて別に意味あることにあらず。

きつるには、來りたるに同意にて上の文を抑へて、下の文を起す語勢なり。されば是より下の文意の反對なるべきはいふまでもなし。さるに、下の文意も尙ほ同むければ先哲此の句を疑ひ、たるに、景樹翁は此の次の文は今はうきふしなき世に遇ひてとやうの意にて上を受け下を起すなれば、かくありて、さばりなし、強て理を以ていふべからずやとやうにいへり。或はしからん。さて、以上、古人が歌をよむは種々の事情ありての事なる理由を、古雅なる詞どもをひき來りて、紀氏のおもしろくいひ續けて春のあしたより以下にあらゆる歌のさまをいひつしたるなり。

今はふじの山も煙たゝずなり、長柄の橋も造るなりと聞く人は、歌にのみぞ心をなぐさめける。

大意 後世、富士山も煙立たずなり、長柄の橋も建築されたりと聞く人は、其の世の歌をよみて樂むの外なしとの意なり。

今はふじの山も煙たゝずなり、とは、其の以前富士山に煙たつ時は、皆人々、それによそへて、人を戀ひたりしが、今は其の煙も立たずなりとなり、富士の山

は此の延喜の比は暫く、止みたりと見ゆれど、桓武天皇、延暦十九年に大に燃え、清和天皇、貞觀年中にも焼けたることあり。此の句の例は、本集中俳諧歌に、『富士のねのならぬ思ひにもえばえも神だにけさぬむなし煙を』又戀歌に、『君といへば見まれ見ずまれふじのねのめづらしげなくもゆる我戀』となり。長柄の橋も造るなりとは其の以前長柄の橋のなき時は、それにたとへて我が身を歎きたりしが、今は、其の橋も造られたりとなり。長柄の橋は攝津國にあり、久しく破損のまゝにて修繕もなかりしが、宇多天皇の御代に更に新造されたり。本句の例は、本集中、雜の部に、『世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋ど我れとなりけり。』又、俳諧歌に、『難波なる長柄の橋も造るなり、今は我身を何にたとへむ。』とあり。歌にのみぞ心はなぐさめけるとある歌は、當時、人のよむ歌のやうに聞ゆれど、これは、古くより世にある歌をさしたるなり。即、景樹翁の、『さて、今はよそへて人をこひし富士の煙も立たずなり、たとへて、身をなげきし長柄の橋も造られたりと聞くらん後は、只ありし其の世の歌にのみ心をなぐさむるの外なしと也』と

いへるがごとし。

古より、かくつたはる中にも、ならの御時よりぞひろまりにける。か御世や歌のこゝろを、しろしめしたりけん。

大意、古來、此の如く歌の傳はり來し中にも、ならの御時代より盛に弘まり、彼の御代には、天皇陛下にも、よく歌の本意に通じさせ給ひたらんといへるなり。

ならの御時とは、舊說單に平城天皇の御時代をさして、申すといふものあれど、然らず。ならの御時とは、大和國なる奈良の都に、天下知ろしめし、天皇の御時代の意ならむ。さて、奈良の都に座しつるは、元明帝、元正帝、聖武帝、孝謙帝、廢帝、稱徳帝、光仁帝の御七代にて、奈良の御時いづれと定めさし、ひろく申したることなるべし。

かの御世は、即、上句に云へる、奈良の後世なり、此の御世には、天皇陛下にも、よく歌の本意を心得させ給へるものありきと聞え侍り。

かの御時に、おほきみつのくらゐ、柿、本の人麻呂なん、歌のひじりなりける。

國

文

學

大意、其の御時代に大參位柿、本人麻呂は、歌道の聖人なりしといへるなり。かの御時とは、上文にいへるかの御世と同じく奈良の御時代をさせるなり。おほきみつのくらゐは、天武天皇の位階制なる大參の位にて、後世の正三位にあたれば、こゝに舊慣のまゝに正三位といはずして、おほきみつくらゐといひたるなり、されば柿、本人麻呂は奈良の朝にありて、正三位なりしが如くなれど、いかゞあらむ姑く疑を闕く。

これは、君も身を合せたりといふなるべし。

大意、君と臣との合躰といふものなるべしとなり。

こは、上に天皇の歌に通じたまひたると人麿の歌に巧みなりしとをかくはいひたるなり。

秋の夕、龍田川に流るゝ紅葉をば、みかどの御目に錦と見給ひ、春の朝、吉野山の櫻は、人麿が心には、雲かどのみなん覺えける。

大意、自ら明かなるべし。上を受けて、天皇の御歌と、人麿の歌とを、春秋の對句して文を飾れるなり。龍田川の御歌は、本集中秋の部に、『龍田川紅葉みだれて流

るめり、わたらば錦中や絶なん』とあり。これを御製なりと傳ふる説あり。人麿の吉野山の歌としては、別に見えもせざれど、そは句を設けて爰には文をなせるま

でなり。

又、山部の赤人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり。

大意、山部の赤人といふ人ありて、歌道に餘程妙を得たりとなり。

あやしくたへなるは、神妙といはんが如し。上に人麿を歌のひじりといひたる

故、少し詞をかへたるまでなり。

人麿は、赤人の上に立たん事かたく、赤人は、人麿が下に立たん事かたくなありけ

る。

大意、人麿と、赤人とは、何れも歌の名人にて、兄たりがたく弟たりがたしとな

り。

こゝに、人麿の歌と、赤人の歌とを列挙すべし。

梅の花それとも見えず久方の、あまぎる雪のなべてふれれば 人麿

ほのくくと明石の浦の朝霧に鳴かくれゆくふねをしぞ思ふ 人麿

春の野にすみれ摘みにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける 赤人

わかの浦に志ほみちくればかたを波蘆邊をさして田鶴鳴渡る 赤人

此の人々をおきて、又すぐれたる人も、吳竹のよゝに聞え、片糸のよりよりに絶えず

ぞありける。

大意、人麿赤人の二人の外にも、尙、代々、時々歌の名人は絶えずありしとなり

吳竹は、よに係る枕詞なり。竹の節をよといへばよゝといはんためなり。

片糸は、よるに係る枕詞なり。糸は二筋を合せて用ふべきものなれば、其の合せ

ざる一篇の糸を片糸とはいへるなり。

よりくは、時々といはんがごとし。

これよりさきの歌を集めてなむ、萬葉集となづけられたりける。

大意、是の時より以前の歌を集めて、萬葉集と名けられたりとなり。

これよりさきの歌とは、上に、奈良の御時といひ、又、人麿赤人のことをいひたれ

ば、其れより以前の歌といふ意なり。

萬葉集は我が國歌集といふものゝ始にて二十卷あり。即、奈良朝以前の歌を集

めたるものなり。古書に、右大臣橘諸兄公の編せるものと見ゆれど、公が薨後の歌をも載せ、且前後重載せるものもあるより見れば、全部公の編輯なりとはいひ難し。其の始めの部は諸兄公の編輯にして、後の部は大伴家持の増補ならんといふが、後世の説なり。或は然らん。

かの御時よりこのかた、年は百年あまり、世は十つぎになむなりにける。

大意、其の御代よりこのかた、年は百年餘、御代は十代になるとなり。

此の數句、普通本には、なけれど、さては、文意續かず、後の文句中に錯亂して入りたるならむとて、かく改めたる書あり。今これに従ひつ。

こゝに、いにしへの事をも、歌の心をもしれる人、わづかに、ひとりふたりなりき。

こゝにとは、上にいへる百年餘、十代の間を指して云へる意にて、其の間にどはんがごとし。

歌の心をもしれる人とは、歌道の本意に通ぜる人といへるなり。

しかはあれど、これかれ、得たる所、得ぬ所、たがひになむある。

大意、歌道の本意に通ぜるもの、ひとりふたりはありきといふも、それも完全

にはあらずとの意なり。

得たる所、得ぬ所、たがひになむある、とは、互に、得手の所、不得手の所ありといふことにて、十分具備したるものはなかりきとの意なり。

かの御時よりこのかた、年は百年あまり、世は十つぎになむなりける。いにしへのことをも、歌をもしれる人、よむ人多からず。

こは、上文の錯亂して、こゝに入りたるものならむか、別に重ねて講すべき要はなけれど、本文は掲げ置きぬ。

今、此のことを云ふに、つかさ、くらゐ高き人をば、たやすき様なればいれず。

大意、上文に云ふ、人々の事をいはんに、官位高き人のことは、憚りあれば云はずとなり。

此のことを云ふに、とは、上に云ふ得手、不得手のあることを論評せんにとのこところなり。

つかさくらゐ、たかきとは、官位貴きといふことなり。

たやすき様なればいれずとは、官位貴き人の得失をいふは、あまり輕々しき様

なれば論評の内へはいれずとなり。

そのほか抄かき世に、その名聞えたる人は、

大意、官位貴き人の外にて歌に評判高き人はとなり。

すなはち、僧正遍昭は、歌のさまは得たれども、まことすくなし。たとへば、畫にかける女を見て、徒に心を動かすがごとし。

大意、僧正遍昭は、歌の躰裁は、巧なりしも、歌に真意少く、さながら畫像に向て、心を動かすがごとしとなり。蓋し畫像は美麗なりとも、死物にて真意なきにたとへたるなり。

僧正遍昭は、仁明天皇に仕へ奉り、寵遇を得たる人にて、天皇崩御の後、出家して花山の元慶寺の座主となり。寛平二年に歿せし人なり。此の人の歌の如何は、下の例を見て知るべし。本集中、春の部に「あさみどり糸よりかけて白露を、玉にもぬける春の柳か」又「そそに見て歸らん人に藤の花は、ひまつはれよ枝はあるとも」又、夏の部に「はちす葉のにこりにしまぬ心もて、何かは露を玉とあざむく」又、秋の部に、名にめでしおれるばかりぞ女郎花、われおちにきと人にかたるな」

國 文 學

こはさが野にて馬よりおちてよめる歌なり。

在原業平は、その心あまりありて、言葉足らずしほめる花の色なくて、句ひのこれるが如し。

大意、業平の歌は、限りなく餘情あれど、言葉足らざる所ありとて、しほめる花の色なくて、句のこれるにたとへたるなり。

在原業平は、平城天皇の皇孫にて阿保親王の五男なり。官位は、從四位上左近、中将までに至る。元慶四年五十六歳を以て卒す。和歌に最も巧なる人なりき。その心あまりありて、言葉足らずとは、深く歌を案ずる故、其の情三十一字の外に餘りて言葉足のらざるところありとなり。その心あまりありと、寝め、言葉足らずと、貶したる評論の躰實にめでたし。

しほめる花の色なくて、句ひのこれるがごとしとは、盛り過ぎたる花の色つやなくて、香の猶残れるがごとしとて、句ひのこれるは、その心の餘れるにたとへ色なくは、言葉の足らざるにたとへたるなり。さて業平の歌は、本集中、春の部に、『世の中に絶えて櫻のなかりせば、春のこゝろはのどけからまし』又、戀の部に、

國 文 學

『月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つは本の身にして』又、雜の部に『大かたは月をもめでしこれぞこの積れば人の老となるもの』等あり。

文屋の康秀は、詞たくみにてそのさま身におはず、いはゞあき人のよききぬ着たらんがごとし。

大意 文屋、康秀の歌は、詞、巧妙なれども、躰、鄙野にして相應せず、恰も商人の身に不相應なる絹布を纏ひたるがごとしと也。蓋、在原業平の、反對の評定なり。詞たくみにてとは、歌のいひ回はしに、妙を得たりとて、上はべのよく聞ゆるをいへるなり。

そのさま身におはずとは、歌の躰、鄙しくして詞に適はずといへるなり。

文屋の康秀は、履歴詳ならずと也。清和 陽成の兩朝に仕へし人なり。古今集目錄に、『貞觀二年三月廿日任刑部中判事年月任三河掾元慶元年正月十五日任山城大掾三年五月廿八日任縫殿助とあり。

康秀の歌は、本集中、秋の部に、『ふくからに野への草木もしほるれば、うへ山風をあらしといふらむ』又、哀傷歌に、『草深き霞の谷にかけかくし照る日のく

れしけふにやはあらぬ』となり。

宇治山の僧喜撰は、詞かすかにして、はじめをはりたしかならず、いはゞ秋の月を見るに、曉の雲にあへるがごとし。

大意 喜撰の歌は、詞は微妙なれども、少し漠然として聞えかたき所あり、譬へば秋の名月が曉方に至りて雲に覆はれたるが如しとて首尾澄快ならざるをいへるなり。

喜撰は、系傳詳ならず、種々説はあれど何れも悉しく且確かならず、只其の世を宇治山に通れたる一僧なることは疑を入れざるがごとし。

秋の月を見るに、曉の雲にあへるがごとし、は眞名の序に、『如望秋月遇曉雲』とありて、秋の月は殊にすみてめでたければ詞のかすかなるにたとへ、曉の雲にあへるは、首尾通ぜざるを、はじめをはりたしかならぬにたとへたり。喜撰の歌は、本集中、雜の部に、『我庵は都のたつみまかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり』とあり、百人一首にあるのと同じ歌なり。

よめる歌、おほく聞えねば、かれこれをかよはしてよくまらず。

喜撰の歌は、多く世に傳はらざれば、彼れ此れ引き合はせ通考する事叶はぬはよくは知らずとなり。然り、喜撰の歌は、右の外に、樹下集と云ふ書に、『けがれたるたぶさはふれむ極樂の、西の風ふく秋の初花』とあり、又玉葉集といふ書に『木の間より見ゆるは谷の登かも、いざりの海士の沖にゆくかも』との二首もあれど、此等は果して喜撰の作なりや否やも定かならず。

小野小町は、いにしへのそとほり姫の流なり。あはれなるやうにて、つよからず、いはよき女のなやめるところあるに似たり。

大意 小町の歌は衣通姫の流にて、艶なれども氣力なく、恰も美人の病苦あるがごとしとなり。

小野小町は、その履歴詳ならず。或は、仁明承和の頃の人なりきといふ。歌の世に名あることは人みな知るどころなり。

そとほりひめは、允恭天皇の皇妃にて一名を弟姫と申せり。その容姿絶美にして皮膚の艶色、衣を徹して光れば時人かくは號けたりといふ。衣通姫の歌は、ある夕 天皇戀ひ忍びてよめるに、『我がせこが來べき宵なりさゝがにの、蜘蛛

のあこなひこよひまるしも』の歌あり。こゝに、そとほりひめの流 といへるは、衣通姫の歌の風なりとのこゝろなり。されど、衣通姫は歌の上手といふにもあらず、又小町のに似たるにもあざれば、その流などとはいひがたく、こはよしなき詞なること先哲も既に論じたり。

あはれなるやうにてつよからずは、眞名の序に、『艶而無氣力』とあり。あはれなるは例の褒詞にて、つよからずは貶語なり。

つよからぬは、女の歌なればなるべし。

是は上の句に、つよからずといひたりしを更に説明して、そは女の歌なるが故ならんと云ひ反へしたるまでなり。女の性はつよからぬこそ却て眞面目なればなり。さて小町の歌は、本集中戀の部に、『思ひつゝぬればや人の見えつらむ、夢としりせばさめざらましを』又、『色見えでうづろふ物は世の中の、人の心の花にぞありける』又、『うたゝぬに戀しき人を見てしより、夢てふ物はたのみそめてき』又、雜の部に、『わびぬれば身をうき草の根を絶えて、さそふ水あらばいなむとぞ思ふ』等あれど、いづれもこの評のごとし。

大友の黒主は……そのさまいやし。いはし薪負へる山人の、花の蔭にやすめるがごとし。

此文大友の黒主の下に脱文あること先輩も既に論ぜり。真名の序は、『大友黒主之歌古猿丸大夫之姿也頗有逸興而體甚鄙如田夫之息花前也』とあり。參考すべし。『古猿丸大夫之姿也頗有逸興』と同じき詞なくては上の文と體を同じうせざるのみならず。又評論の體をなさず。幾多の脱文字あること疑ふべくもあらず。

大友黒主は、都堵牟麻呂の子にて、大友天皇の曾孫に當る。近江國滋賀郡大領從八位上たりしなり。

薪を負へる山人花の蔭にやすめるがごとしとは、田夫野人も、麗はしき花の蔭にいこへるは心あるに似たりとの意にて、薪を負へる山人は、躰の野鄙なるにたとへ花の蔭にやすめるは、風雅にたとへたるなり。黒主の歌は、本集中、春の部に、『春雨のふるは涙か櫻花、ちるを惜まぬ人しなければ』又戀の部に、『思ひ出て戀しき時は初雁のなきてわたると人はしらずや』又雜の部に、『かゝみ山

いざ立ちよりて見てゆかむ、年へぬる身は老やしぬると』等皆あなむ體の歌と覺ゆ。

此の外の人々、其の名聞ゆる、野邊にあふるかづらの、はひ廣より林に繁ひかき木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひて、其の様しらぬなるべし。

大意、上來述べ來たれる六人の歌人より外に歌人として聞こえたる人は野草の如く林葉の如く多かれど、そは、大抵、自ら歌と思ふばかりにて、其の實、歌の躰を心得ぬとなり。

さて、上の章に、『古の事をも、歌の心をもまれる人、わづかにひとりふたりなりき。』といへるは、上に述べたる僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰、小野小町、大友黒主の六人をさしていへるなり。其の批評の當否に至りては、紀氏が一己の好惡に出で、天下の公論には、あらずと、先哲の論もあり。されど、紀氏が當時漢學の盛にして國學の衰へたるを慨したるのあまり、真歌の價值を尊大に期したれば、痛論こゝに至れるも、さることなり。

かゝるに、今すべらぎの、天の下まろしめす事、四の時、九かへりになむ成りぬる。

大意、然るに、今上天皇陛下御即位以來、九年になるとなり。かゝるには、上の句をうけて下の文を起す接續の詞なり。さて、是より、古今集勅撰のことになつていへるなり。

今すべらぎは、今上天皇といはんがごとし。即、醍醐天皇をさし奉れるなり。すべらぎとは統君スベラギの約言にて天皇の御事を申す稱なり。

天の下志ろしめすは、天皇の位に座しまして天下を治め給ふをいふ。

四の時とは、春夏秋冬の四時にて、即、一年のことをいへるなり。醍醐天皇御即位以來九年になれるをいひたるなり。

あまねき御うつくしみの波、入島の外まで流れ、廣き御めぐみの蔭、筑波山麓よりもまげく、おはしまして、

大意、天皇の德澤は四海の外にまで及び、山の麓よりもまげしとて聖徳を稱し奉りたる詞なり。

あまねき御うつくしみの波とは、行わたりたる御惠といふ意なり。入島の外まで流れとは、恩澤、四海の外までも及べるを云ふ。

廣き御めぐみの蔭、筑波山の麓よりもまげくは、上の句を詞を換へていへるまでにて、同じく御徳を稱したる詞なり。

萬のまつりごとをきこしめす暇、もろくの事をすて給はぬあまりに、古の事をも忘れじ。ふりにし事をも、おこし給ふとて、今も見そなはし、後の世にも傳はれとて、

大意、萬機の御政治を行はざる餘暇、文學技藝のことも打捨て給はぬまゝに古の物をも保存し、すたれたる事をも興こさんとの御思召にて、今も御覽遊ばされ、後世へも傳へんと御思召してとなり。

延喜五年四月十八日に、大内記紀、友則、御書所、預紀、貫之、前、甲斐、目凡河内、躬恒、右衛門、府壬生、忠峯等に仰せられて、萬葉集に入らぬ歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなん。

大意、此の日吾等四人に勅命ありて、萬葉集に漏れたる古歌及び自分等の歌をも奉らしめさせ給ひていへるなり。

紀、友則は、紀、有友の子にして、寛平九年土佐掾となり、同十年少内記となり、延喜四年大内記に任じ、延喜五年二月、六十一歳を以て卒したる人なり、大内記は、中

務省中の官にて、詔勅の類を掌る官なり。

紀貫之は、中納言紀長谷雄の孫にて、望行の子なり。越前權少掾より進みて土佐守に任じ、玄蕃頭となり、木工權頭となり、位、從五位上に上りて、天慶九年に卒す。御書所預は、宮中の秘書類を藏むるところの官にて、御歌所の類なり。凡河内、躬恒は、天津彦根命の後裔にて、甲斐少目より御書所御厨子所等に至り、遂に和泉大掾となりて、延喜七年四十九歳にて卒せり。前甲斐目は、寛平年中甲斐少目たりしも、今は非職なりし故かく云ふ。

壬生忠峯は、壬生安綱の子にて、右衛門府生より、御厨子預となり、後攝津大目となり、九十八歳を以て、康保二年に卒せり。

それが中にも、梅をかざすよりは、はじめて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るに至るまで、

大意、春の梅より始めて、夏の郭公、秋の紅葉、冬の雪に至るまでといへるにて、

こは、四季の歌をとりいで、いへるなり。

又、鶴龜につけて、君を思ひ、人をもいはひ、秋萩、夏草を見て、妻をこひ、逢坂山に到りて、

たむけを祈り、あるは、春夏秋冬にもいらぬくさくさの歌をなん撰はせ給ひける。

大意、上の四季に續きて、此の賀の部、戀の部、離別の部、旅路の部、或は四季の部、

にもいらぬ雜の歌をも撰集仰せ付けられたりしなり。

すべて千歌二十卷、名づけて古今和歌集といふ。

この意自ら明らかかなり。本集の歌はすべて千百十二首ばかりあるを、單に千歌といへるは、その大數をいへるものなり。

かく、このたび集め撰ばれて、山下水のたえず、濱のまさごの、數多くつもりぬれば、今日あすか川の、瀬になるうらみも聞えず、さいれ石の巖となるよろこびのみぞあるべき。

大意、此の如く此の集成て撰集の跡も絶えず、且多くの歌もあつまりたれば、後世歌風の變遷する憂もなく、漸くに榮ゆること多からんとなり。

の枕詞の如くして用ひられたり。

(五八)

あすか川の瀬になるは、本集中、雜の部に、『世の中は何か常あるあすか川、きのふの淵ぞけふは瀬になる』といふ類の意に世の變遷無常なるをいへるなり。されれ石の巖となるは、本集中、賀の歌に、『わが君は千世に八千世にされ石の巖となりて苔のむすまで』とある意にて末長く榮ゆるをいへるなり。それ、まぐら言葉は、春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ、秋の夜の、長きをかこてれば、かつは、人の耳におそり、かつは歌の心にもはぢ思へど、

大意、自分等は、みだりに歌人の虚名を傳へられ、且、世人の聞くところもいかが、且、歌の心も漸しく思ふとなり。

それまぐら言葉といふ事は、こゝに解し難く、古來の説も多かり、眞名の序には『臣等』とあり、紀氏が自筆の古今集には、『貫之ら』とありといへり、いづれにしても此の意味ならざれば解せず、遠鏡に、まぐらは『われら』の寫し誤りか、又はそれまぐらは『それがしら』の寫し誤りか、此のふたつの中なるべしとやらにいらるは、げにさることなるべし。

春の花は、にほひの枕詞として用ひ、秋の夜は、長きの枕詞として用ひたるなり。たなびく雲のたちみ、啼く鹿の起きふしは、貫之等が此の世に同じく生れて、この事の時にあへるをなむよろこびぬる。

大意、起居動靜に付けても、此の聖代に生れ、此の集を撰ぶ仰を蒙りたるを悦べるとなり。

たなびく雲は、たちみの枕詞として、啼く鹿は、起きふしの枕詞として用ひられたるなり。

この事の時にあへるは、この撰集ある時期に遭遇せるをいふ。人麿なくなりたれど、歌のととままれるかな、たとひ時うつり、ことさり、樂しび悲しびゆきかふとも、此の歌、もし青柳の糸絶えず、松の葉の散り失せずして、まさきのかつら、長く傳はり、鳥の跡、久しくとまらば、歌のさまをもしり、ことこの心を得たらん人は、大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて、今をこひざらめかも。

大意、歌仙人麿は死せるも歌道は残れり、以後假令如何なる變遷あるも、此の集の世にあらむ限りは、後世に至り、歌道も心得、事物の理をも知れる人は、此集

(五九)

を仰ぎ尊びて、御代を敬慕せぬものはなかるまじとなり。
 青柳の糸は、絶えずの序、松の葉は散り失せずの序、まさきのかづらは、長くの序、
 鳥の跡は、久しくとゞまるの序なり。その他の字句は、自ら明らかなり。

(六〇)

土佐日記

土佐日記も、紀貫之朝臣の物したるものなり。即、さきの古今集序を物したる時より、やゝ三十年の後、朝臣が、醍醐天皇の延長八年に土佐の國守となり、朱雀天皇の承平四年に、任滿ちて歸京せし時、船路、四十日間の紀行なり。文體は、古今集序の如く、正格謹嚴ならざるも、輕快洒落にして、天真爛漫なるところ、なかくにめでたく、且、高妙なれば、後の國文學者にして、紀行文を書くあれば、多くは範を之にとれり。實に以ある事ぞかし。さきに、古今集序を講ずる時述べたるが如く、當時は、序跋も、日記も、皆漢文もて記し、例にて、我が國固有の國文は徒に、女流の專有の如くなりしを、朝臣は、ひとり、國語を盛にし、國文を興さんの奮心をもて、序文も、日記も、かく國文に物して、時流の漢詩、漢文の外に、固有の國歌、

國文のあることを知らしめたり。後世、漸、此の種の國文の盛なりしは、全く朝臣の啓導によらずんば、あらず。其の功いかで、雲煙に附すべけんや。
 本日記は、承平四年十二月二十一日舟出して、翌年正月三十日和泉の灘に入り家に歸るまでの紀行なれど、こゝに講ずるところは、例の歴代文學によりて、首途の條、船中に若菜を得たる條、舟子の唱歌を聞く條、住吉の濱にて風波にあふ條だけを講すべし。諸子豫、其の心してよ。

首途の條

二十七日、大津より、浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに、京にて生れたりし女子、こゝにして、俄に失せにしかば、此の比の出で立いそぎを見れど、何事もえいはず。京へかへるに、女子のなきのみぞ、悲しみこふる。ある人々もえたへず、

大意、此の日、大津より浦戸をさして漕ぎ出でんとするに、昔、京にて生れたりし女子の出立前、此の國に於て、俄に死に失せしかば、旅立は何くれと忙はしけれども、取る物も手につかず、言ふことも得言はず、たゞ伴ひかへる愛女のなきことばかり悲しく、且戀しく、傍にある人々も亦同感に堪へずとなり。

(六一)

大津浦戸は何れも土佐の國の地名にて、浦戸は大津より西の方二里ばかりにあり。此の間の舟路は當日航海の豫定なりしと思はる。

京にて生れたりし女子の年齢は、いくつなりしか確かに知らんよしなけれど、彼此考へ合はするに、七つ八つばかりにやあらん。紀氏ぞか幼き時携へ來りて、今、伴ひかへることなきより、無限の哀情を起しゝなり。蓋し、此の哀情こそ此の日記の骨子とはなりたれ。見ん人、その心すべし。

此の間に、ある人のかきていだせる歌。

みやこへど、思ふも物の、かなしきは、

かへらぬ人の、あればなりけり。

大意、久しぶりに故郷なる都へ歸らんと思ふは、此の上なき嬉しき事なるに、かくばかり悲しきは、初つれて來し女子の、今、伴ひかへることの出來ぬ故なりとなり。

またある時には

あるものと、忘れつゝなほ、なき人を、

いづらとどふぞ、かなしかりける。

大意、愛子のあまり戀しきまゝに、ともすれば、其の死に失せしことをすら忘れて、なほ世にあるものゝやうに覺えて、どれ何處にをるかど現に問ふことさへあり。實に悲しきことなりとなり。其の情の切なること察すべし。

いづらは、どこいづこといふがごとし、

といひける間に、鹿兒の崎といふ所に、守のはらから、またこと人、これかれ酒などもておひ來て、磯におりゐて別れがたきことをいふ。守のたちの人々の中に、このくる人々ぞ、心あるやうには、いはれほのめく。

大意、上にいへる如く、悲歎しける間に、大津の續きなる鹿兒の崎といふ所にいたるに、新任土佐守の弟、又其他の人々酒肴を携へて追ひ來り磯に下りて、名殘の詞を述べ、實に國司の多き屬官の中にも、今、追ひ來りたる人々は殊に厚情の人やうに、同船の人々へ小聲にいはれ得るとなり。

守のたちの人々は、國の守に附屬する豫目等の官員のことなり。

いはれほのめくは、ほのかにいはるゝことなり。若し、ほのめかすといふ時は、ほ

のめくの他動詞にて、多く、それとなくして知らせることに用ふるなり。
かく別れがたくいひて、かの人々の、くちあみも、もろもちにて、このうみべにて、荷な
ひいだせるうた、

大意、かく別れがたくいひて彼の人々、口重もげに此の海邊にて心を盡して
讀み出だせる歌との意なり。

くちあみは、口網にて、此の海邊に用ひる網なり。それを沖遠く敷きて、漁人の引き
上ぐる時は、諸人持にていと重げなれば、今、歌讀まんとする人々の、彼の大勢が
口網引き上ぐる時の如く、苦しみ苦しみて、やう／＼に一首の歌を作り出だせ
るを時にとりて、滑聲的に形容せるなり。

荷なひ出たせるは、網を引き上ぐる時荷ひ出せる故、それに縁をとりてかくは
いひたり。

をしと思ふ人やとまると、あしがもの

うちむれてこそ、われは來にけれ。

歌意、名殘惜しと思ふ人々が、若しや留るかと思ひて、葦鴨の如く、吾々は、打群

れて來れりとなり。

といひてありければ、といたくめで、ゆく人のよめりける。

棹させど、そこひしられぬわだつみの、

深きこゝろを、君に見るかな。

歌意、棹させども、底の知られぬ、此の海の如く、深き義心を、君等に見るかなと
いひて、その厚意を謝せるなり。

いといたくめで、は、甚た愛らしめてどの心併し、其の實かの歌は、さほどよき
歌にはあらねど、辛苦して讀みたるなれば、わざと斯くいへるなり。ゆく人は、貫
之、自身をさしたるもの。そこひは底、わたつみは、海のことなり。

といふあひだに、かちどり、ものゝあはれも、しらで、ちのれし酒をくらひつれば、はや
くいなんどしほみちぬ、風もふきぬべしとさわけば、舟にのりなんとす、

大意、かく、別情濃かなる間に、梶取らは人情をも知らず、自分が酒を飲みたれ
ば、疾く行かんとて、はや、潮もみちたりいま、風も吹くべし、などいひて急げども、
殘念ながら愛を割きて、今は、船に乗らんとするなり。

あつれしのしは強めの助辭、いななんはゆかんことなり。

此の折に、ある人々、折節につけて、から歌ども、時に似つかはしきをいふ。又、ある人、西の國なれど、甲斐歌なれど、うたふ。かくうたふに、ふなやかたのちりもちり、そらゆく雲も、たゞよひぬ。とぞいふなる。こよひ浦戸にとゞまる。

大意、此の折の人々、時に似つかはしき、即別れに相應する詩など歌ひ、又或る人は、此處は西國なるに東國節の甲斐歌など歌ふ。されば、其の聲の響によりて船やかたの塵も漂ひそらゆく雲も漂よふばかりなりしとなり。

甲斐歌は、古今集にのせたる、『甲斐が嶺をさやにもみしがけしれなく、よこほりふせるさやの中山』などいへるものにて、數多ありしなるべし。

船やかたの塵もちりとは、支那の故事に、漢の虞公、善く歌ひ、梁上の塵をして起たしむ、とあるを思ひよせてぞ書ける。

そらくゆ雲もたゞよひぬとは、同じく支那の故事に、秦青が聲、林木を振はし、響き、行雲を遏むといふを轉じていへるなり。

船中に若菜を得たる條

七日になりぬ、同じ湊にあり、けふは、青馬を思へどかひなし。たゞ波の上の白きぞ見ゆる。

大意、正月七日には、朝廷にて青馬の節會とて、天皇、馬を見給ふ例なれば、七日に遇ひて、そを思ひ出でたれど、旅路なれば、その甲斐なく、たゞ海上の波の白きをのみ見るといひて思ひやりとはなせり。

かゝるあひだに、人の家の、池と名ある所より、鯉はなく、ふなよりはじめて、川のも海のものをも、長櫃に荷ひつゝけておこせたり。若菜、こにいれて、雉子など花につけたり。若菜ぞけふをまらせたる歌あり。そのうた、

あさぢふの野べにしあれば、水もなき、

いけにつみつる、若菜なりけり。

いとをかしかし。

大意、池といふ所のある家より、川の魚も海のものも、其の外のものも、澤山に贈り、且、若菜も籠に入れて贈りたれば、それによりて、けふの七日なることを知りたりとなり。

歌意、所にもあらぬ池に生じたる若菜なれば、よくはあらねど、今日のしるしに進らするとなり。

鯉はなくては、池といへば鯉のあるべきに、そはなくてこのことなり。

こどものをもどは、川魚、海魚より異なる物をもといふなり

若菜ぞけふをしらせたるとは、持ち來りし若菜こそ今日を知らせられたりなり。

七日には、七草とて、若菜摘むべきならひなればかくはいひたるなり。

雉子など花につけたりは、風流なる贈り物のならひにかくすることあり。

あさぢふは、淺茅生にて、茅の淺く生へる意、即つばな杯の生ずるところなり。

いとをかしかしは、よほどをもしろき事なりといふに同じ。

この池といふは、處の名なり。よき人の男につきて下りて、住みけるなりけり。この長

櫃の物は、昔人わらはまでにくれたれば、あきみちて、舟子どもは、げらつゝみをうち

て、海をさへおどろかして、波もたてつべし。

大意、都にて身柄、よき女人の、さるべき故ありて、夫に従ひ、此の池といふ所に

住みければ、此の澤山の贈り物も、流石に、都風なり。さて此の贈り物は、昔にくれ

たるなれば、皆滿腹してはては舟子ども腹鼓を打ち、爲めに海までも鳴りどど

ろかし却て波をも立てん程なりと。此のあたり例の滑稽的筆法なり。讀者其の

面白みを味ふべし。

舟子の唱歌を聞く條

宇多の松原をゆきすぐ、其の松のかす、幾そはく、幾千年へたりとしらす。もどごとに、

浪うちよせ、枝ごとに、鶴とびかふ。あもしろしと見るに堪へずして、舟人のよめるう

た。

見わたせば、松のうれごとくすむ鶴は、

千とせとちとぞ思ふべらなる。

とや、此の歌は所を見るにえまさらず。

大意、其の松原の松は、幾十許あり、又幾千年を経たる老松なるかを知らず。根

毎に浪打寄せ、枝毎鶴飛ひ違ふ。その面白さ見きられずとなり。

歌意、其の松の末毎にとまれる鶴は、己が千とせの友進の如く思へる有様なり

と、老松に鶴のとまれる風雅を形容したるなり。

うれとは、うれとも云ひて末のこと、どちとは、友達のことなり。

所を見るにえまさらずは、此の歌、實地の形容を得寫さずとの評語なり。

かくあるを見つゝ、こぎゆくまに、山も海も、みなくれ、夜ふけて、西東も見えずして天けのこと、かぢどりの心にまかせつ。そのこもならはぬは、いとも心ぼそし。まして女は、ふなぞこにかしらをつきあて、音をのみぞなく、かく思へど、舟子かぢどりは、船歌うたひて、何ともおもへらず。

大意、かく松原の景色など、眺めつゝ行くまに、山も海もかくれ夜ふけて東西も見えず、いと淋びしくなりぬ。天氣のことは、たゞ梶取の心に任せたり。かゝれば男子さへ船路なれぬは、いと心細きに、况して女子は、船の底に打臥して泣きてのみ居り、されど梶取はなれたる事とて、何とも思はず、平氣に歌など歌へりとなり。

音をのみぞなくとは、泣きにのみ泣くといふことにて、泣くより外他のことなきの意なり。

そのうたふ歌、

春の野にてぞ、ねをばなく、我がすゝきにて、手をきるく、つんだつ菜を、親やまほらん、しうどめや食ふらん。かへらや。

よんべのうなゐもがな、錢こはん、夜べの菜を、そらごとをして、あぎのりわざをして、錢も持て來ず、已れだにこず。

大意、春の野にて、自分が薄にて手を切りながら、泣くく、摘み採りたる若菜を、思ふ人は食はず、親や姑が食ふらん。甲斐なき事よ。

昨夜の童子が來ればよい、さすれば錢を乞ひとらんものを、彼は、虚言して、除りながらももてこず、又、自らも來らずとなり。

思ふに此の歌は、當時舟子どもの間に行はれし俗歌ならん。

まほらんは、もさぼるらんの約語なり。かへらやは、拍子の詞なれば意味なし、よんべは、ゆふべ、即、昨夜のことなり。

うなゐは、漢字にて髻髪とかき、垂髪を分けたるをいふ、即、童子のことなり。がなは、願ひの詞なり。うなゐもがなどは童子來よかしの意。

あぎのりは、除にて、價の錢を借りて買ふことなり。

これならず多加れど、かゝず、これらを人の笑ふを聞き、海はあるれど、心はすこしなきぬ。

これのみならず、彼等の歌へるものは數多あれど、此の日記にはかゝらずとなり。此れ等の歌をきして人の笑へるを聞けば、それにまぎれて海はなほあるれど、さわぎし心も少しなきぬとなり。此の筆例の滑稽諧謔にぞある、讀者、そのころして見よ。

住吉の濱にて風波にあふ條

五日、けふからくして、和泉の灘より、小津の泊をおふ。松原めもはるくなり。かれこれ苦しければ、よめる歌、

ゆけどなほ、ゆきやられは、妹がうむ

小津の浦なる、きしの松ばら

大意、和泉の灘より、小津の泊に至る、其の間の松原、見わたす限り長ければ、ゆけども、小津の松原は遠しとなり。

妹がうむは、緒の枕詞にて、緒は小津の小を緒にかけたるなり。

かくいつし來るほどに、船とくこげ、日のよきにと、催せば、梶取、ふなごどもに云はく、みふねより、仰せたぶなり、朝きたの、出で來ぬさきに、つなではやひけといふ。此の詞の、歌の様なるは、楫取の自つからの詞なり。楫取は、うつたへに、我れ歌の様なる事、いふどもあらず、聞く人の、あやしく歌めきて、もいへる哉とて、かき出せば、げに三十文字あまりなり。

大意、天氣もよければ、船疾く漕げと促せば、楫取、船子どもに命じて、みふねより、仰せたぶなり、朝北の、出で來ぬさきに、つなではやひけといふ。此の詞は楫取の、おのづからの詞なれども、聞きつけたる人、恠しく歌のやうなりとて書き出すを見れば、いかに三十一文字なりきとなり。

朝きたは、朝の北風なり

うつたへにとは、ひとへにといふに同じ、おのづからの詞なりとは、構へて歌やうにいひたるにあらず、普通の詞なり、といふ意なり。

今日浪な立ちそと、人々ひねもすに祈るしありて、風浪たし、いまし、かもめむれあて、遊ぶ所あり、京の近づくよるこびのあまりに、あるわらはのよめる。

祈りくる、かさまと思ふを、あやなくに、

かもめさへだに、浪とみゆらむ。

大意、今日は浪たゝぬやうにど、いのりたる甲斐ありて、風浪たゝず、かもめ群集して遊ぶところありしとなり。歌の意は、祈り来る甲斐ありて風吹かずと思ふに徒らに鷗の白きまで波のやうに見ゆる事かなど、浪を嫌ふ心を鷗にうつしていへるなり。

いましは、今なりし、は強めの助辭、あやなく、は無益、徒事等をいふ。

といひて、ゆく間に、石津といふ所の、松原おもしろくて、濱邊遠し。又住吉のわたりをこぎゆく、あるひとのよめる、

今見てぞ、身をはしりぬる、住の江の、

松よりさきに、我はへにけり。

歌意、住吉の松は、古來、久しきためしにいへど、今、現に見て、初めて、我が身のそれよりもさきに年老いたるを知りけりとなり。紀氏さまで老年にはあらざれど船中、風波なかれと心配したるに年も老ゆるはかりなりしを歎きたるなり。

こゝにむかしつ人の母、ひと日かた時も忘れねはよめる、

住の江に、舟さしよせてわすれ草、

志るしありやと、つみゆくべく、

どなん、うつたへに、わすれなんどにはあらで、戀しきこゝち、まばしやすめて又もこふる力にせんとなるべし。

大意、昔、死に失せし女子の母、それを戀ひ慕ひて一日片時も忘れねは、暫く忘れん爲めに、住の江に舟さしよせて、そこにありといふ、忘れ草を摘みて行かん、しかし、それを以て一向に忘却し去らんとにはあらず。しばらく心やすめて、後、更に思ひ出つる時の力にせん、の心なるべしとなり。其の情の切なること察すべし、むかしつのは、強めの助辭、むかしつ人は、昔の人といふにあなむ。

かくいひてながめつゝ、來るあひだに、ゆくりなく風ふきて、たげどもく、しりへしぞきにしぞきて、ほどくしく、うちはめつべし、楫取のいはく、此の住吉の明神は、れいの神ぞかし。ほしき物ぞあはすらん、そは今めくものか、さてぬさたてまつりたまふといふ。いふにしたがひて、ぬさたてまつる、かくたてまつれども、もはら風やまで、

いや吹きにいや立ちに、風浪の危ふければ、楫取又いはく、ぬさには御心のゆかねば、御舟もゆかねなり。猶うれしと思ひ給ふべきもの、たてまつりたまへ、といふ。又いふに、したがひて、いかかはせんとて、まなこもこそ二つあれ。只一つある鏡をたてまつるとて、海にうちはめつれば、口惜し。されば、うちつけに、海は鏡のごとなりぬれば、あゝ人のよめる歌、

大意、不意に風吹きて漕けども、船は後へ退きて、殆んど覆没せんやうなれば、楫取は此の住吉の明神は、例の荒神にて、しかも今の人情によく似て物欲しがる神なれば、幣奉り給へといふ。その言に従ひて幣奉れども風静まらず、益吹きたてゝ危し。故に楫取又いふ、幣にては猶神の心の満足せぬ様なれば、猶外に神の嬉しく思はるゝものを奉り給へと、又それに従ひて、このたひは、鏡を奉るとて海に投げ入れたれば口惜し。されば直に海は鏡のごとく静まりたりとなり。

ゆくりは不意、たけどもは漕けどもといふが如く、しどきは退きにてうちつけは、直にといふがごとし。

ちばやふる神の心を、あるゝ海に、

かゝみを入れて、かつ見つるかな。

いたく住の江のわすれ草、きしの姫松などいふ、神にはあらずかし、めもうつらゝ、かゝみに、神の心をこそは見つれ、楫取のこゝろは、神の御心なりけり。

大意、あるゝ海に鏡を入れたるに、波静かになりければ、既に神の心を見たり。かくまでも、物貪る神ならば、世にやかましくもてはやす住吉の神にはあらず。岸の姫松などいふやさしき神にもあらず、げに龍口神の卑劣なる心は見たるとなり。

うつらゝはつらゝといふに同じ、楫取の心とは、其の伺に従ひて神の心を見たる故、この楫取の心こそ神の心なれ、とはいひたるなり。

枕草子

枕草子は今を距ること殆ど九百年前の作なり。作者は誰も知る清少納言といへる女子にて、當代の歌人清原深養父の曾孫なり。父は肥後、守清原元輔といひ

て村上天皇の天曆五年勅を奉じて後撰和歌集を撰びたる一人なり。少納言は一條院天皇の皇后宮定子に宮仕へせしが才學ありて紫式部と名を齊くせり。皇后宮いたく其の才學を愛でさせ給ひ帝に奏して内侍といふ高官にまで昇さんの御心なりしかども、障るとありて果さざりき、皇后宮にも落飾ありて後、やがてかくれ給ひしかば、少納言も世をあぢきなく思ひて諸國に流浪し、さも落ぶれて終りたる由なれど詳しき事は傳はらず。

さて、此の草子は少納言がいまだ宮仕して徒然なる里居のほどに書きし隨筆なれど、その皇后宮の御威勢ありし事、又我が身の世にほめはやされし事などを慕へるも詞あれば晩年に近づきて書き加へたることも多きを知るべし。本書の性質は、おもに作者の經歷、及び見聞せし事實をありのままに記したるものなれば、讀者おのづから、當時の政治風俗のやうく移りて、王朝の次第に衰へんとする有様さへ見られなむかし。その文體は謂はゆる一氣呵成の筆づかひにて、巧に簡潔なる上に又妙に優美なり。これ我が文學の花とも稱せられ名高き源氏物語とも並べ稱せらるゝ所以なり。少納言はたゞ其の才學だての

すぎで、紫式部の徳行に及ばざりしこと、間々文中にあらはれて見ゆるは口をしきことにこそ。本書を枕草子と名づけたるは、初よりしか名付けて書きしにあらで、たゞ何となく書き記したる隨筆なるを後人のかくは名づけしものなり。そも古きことにて其の由は舊説に卷末なる作者の詞に、枕にこそは、し侍ちめとありしによりてかくは名づけしものぞ。草子は草稿草案の義なり。此の書註釋の書は清少納言枕草紙といふ十五卷、枕草子春曙抄といふ十二卷、清少納言傍註といふ五清とあり。今はそれらを參考して例の歴代文學なる、大進生昌に門の狭きをせむる條、木の花は草の庵を誰れが尋ねんと答へし條、このきみと秀句せし條、むづかしげなる物の五節だけを講ずべし。

大進生昌に門の狭きをせむる條

大進生昌が家に、宮の出でさせ給ふに、東のかどはよつあしになして、それより御輿は入らせ給ふ。

大意、大進の役なる生昌の家に宮の行啓し給ふに東門四足になして其の門より宮の御輿は入らせ給ふとなり。

生昌は文章生より中宮職の大進といふ官にまで昇りし人なり。中宮に近く仕へたりし故、こきに行啓もありしものならむ。

宮は一條天皇の皇后定子の御事にして、即、清少納言が仕へ奉りし君なり。

北の門より女房の車ども、陳屋のゐねばいりなんやとおもひて、かしらつきわろき人も、いたくもつくろはず、よせてあるべきものと思ひあなづりたるに、びらうげの車などは、門ちひさければ、さはりてえいらねば、例の筵道志きてあるに、いとにくははらだししけれどいかゞはせん。殿上人地下なるも陳に立ちそひ見るもねたし。

大意、北の門口より供奉の女房の車どもは番人の居らざれば、車ながら入らんと思ひて頭髮の亂れたるも繕はず、大進の家なれば家の中まで車をよせて下るべく思ひ侮りたるに、びらうげの車は門狭くして其のまゝには入り得ざれば、止むことを得ず例の筵をしきたるに下りたるが餘程口をして残念なれどいかにせん方なし。殿上人、地下等の、人々も陳所に立ちそひてその筵道を歩行するを見るも残念なりとなり。

びらうげの車は、檳榔樹ビナゴの葉を以て飾りたる車のことにて、太上天皇若くは四

位以上のものならでは乗ることならぬ制なれど、爰はに姫君などの召し給ひたるに清少納言も添乗したるものなるべし。

殿上人は四位五位の人にて昇殿をゆるさるゝ身分のもの、地下は、其の以下のものにて昇殿をゆるされぬ人なり。

御前に参りてありつるやう啓すれば、こゝにも人は見るまじくやは、なかはさしもうちとけつる。と笑はせ給ふ。

大意、清少納言、中宮の御前に出で、女房等車ながら門内に入りて、人にも見られまじと思ひしに、却て人々に見られて残念なることを申しあげれば、中宮は此の家にも他人の見るべきに、などてそのやうに慎みなく身の飾りをも忽かにしたるぞと笑ひ給ふとなり。

されどそれは皆目なれて侍れば、能くしたてゝ侍らんにしこそ、おどろく人も侍らめ。

大意、こゝにて見るほどの殿上人等は、皆、日ごろ見馴れて、さまで女房などには目もつけず、とどさらに髪など能く繕ひてこそ却て彼の人々は驚きもせめ

となり、これは中宮の御詞に對して少納言のいへる詞なり。さてもかばかりなる家に車入らぬ門やはあらん。見えば笑はんなどいふほどにしも、これ參らせんとて御視などさしいる。

大意 さてもくかく大進をも務むる人の家に僅か車の入るべき門なきは不都合なり。大進を見れば笑ひくれんなどいふ折しも、大進出で來て宮の御視などもちて、これ參らせんとてさし入るゝなり。

いでいとわろくこそおはしけれ。などてか、其の門せばく作りて、住み給ひけるぞといへば、笑ひて、家のほど身のほどにあはせて侍るなりといらふ。

大意、大進來るを待ち構へて折あしく來給ひしものかな。いかで門をあのやうに狭く作りて住み給ふぞと少納言のいへば、大進打笑ひて、それは己が身分に應じて作りたればなると答ふ。

いでは、發語、即俗に云ふさあとも見るべし。いらふは、應答のことなり。されど門のかぎりを高くつくりける人もきこゆるはといへば、あなおそろしとどろきて、それは于定國がことにこそ侍るなれ、ふるき進士などに侍らざばうけ給

はりしるべくも侍らざりけり。たま／＼此の道にまかりいりにければ、かうだに辨へられ侍りといふ。

大意、上をうけて清少納言か君は左様にいはるれどされど家不相應に門ばかりを高く作りたる人も聞こゆるにといへば、大進あゝおそろしきことよと驚きて、それは支那の于定國がことなり。かゝる故事は年來修業を重ねたる進士ならでは承知すべくもあらず。おのれたま／＼此の道に入りければかうも辨へられきといへるなり。

于定國がことは前漢書に見えて、榮求にも出でたるが、于定國の父于公といふ人、其のすむ里の門破れたれば、里人集りて之れを作る時に、于公のいはく、門を高く大にたてよ、我れ民ををさむるに陰徳あれば、我が子孫に必諸侯ありて、四馬高蓋の車をいれんと。果して、其の子于定國以下世に榮えたりと、清少納言己が知れるまゝに此の故事をひきて博學のさまを顯したるなり。

進士は我が國にも行はれたりしが、支那がもどにて、國々の學問よき人々を京師にめして試験の上及第したるものをいふ。こゝにふるき進士といへるは多

年研究を重ねて漢書などにも通じたる進士のことなり。さて、大進生昌は大學に入りて文章生を経たるものなれば、みづからたま／＼此の道にまかりいりにければかうだに辨へられ侍りといへるなり。此の道とは文章道をさす。

その御道もかしこからさめり。越道敷きたれば、皆あちいりてさわざつるはといへば、雨のふり侍ればげにさも侍らん。よし／＼又仰せかくべき事もぞ侍るまかりたち侍りなどといぬ。

大意、少納言戯れて筵道しきたる道を大學の文章道にかけて筵道の道もよからざれば、其の學びの道もかしこくあらじ。筵道しきたれば皆あちいりてといへば、大進生昌、此の頃雨降り頻りたれば、道もあしかりし事ならん。又、此の上いかなる難義を仰せかけられんもはかりかたしとてこゝを出で、行きしありさまなり。

いぬとは往ぬにて退出したることなり。

何事ぞ、生昌がいみじうあちつるはと問はせ給ふ。あらず、車のいらざりつること、さひ侍ると申してありぬ。

大意、中宮何事ぞ、生昌が甚恐れたるはと問はせ給へば、少納言いや別の事にも侍らず、車の門に入らざりしことをいひ侍りし也と申して、宮御前を下り退きしなり。

あらずは否なり。ありは、下りにて宮の前を退出することなり。

同じつばねにすむ若き人々などして、よろづの事も知らず、ねぶたければ皆ねぬ。

大意、少納言と同じ局に住む若き人々など、ともによどりて、萬事打忘れて、眠ければ皆寝ねぬとなり。

東の對の西のひさしかけてある北のさうじには、かけがねもなかりけるを、それもたづねず、家ぬしなればあないをよく知りてあけてけり。

大意、東の對といふ御殿にて西の方の廂ヒツをかけて立て廻はしたる北面の障子カガシもなかりけるを、ねぶたければ、それも尋ねず寝たるに家主なれば座席の案内をもよく知りて忍ひ來しとなり。

さうじは障子にて、今、いふからかみのことにて、今、いふ障子は、其ころにはあかり障子といへり。

家ぬしは清少納言等の宿れる家の主人にて、即、大進生昌のことなり。

あやしう、かればみたるもの、聲にて、さぶらはんにはいかゞ、とあまた、び云ふ聲に、おどろきて見れば、几帳のうしろにたてたる燈臺の光りもあらはなり。障子を五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。更にかやうのすきく、しきわざ夢にせぬもの、家におはしましたりどて、むげに心にまかするなめり。とおもふもいとをかし。

大意、變な枯れ聲にて、それへ參らんにはいかゞとたびく、いふ聲に、少納言目がさめて見れば、几帳のうしろにたてたる燈臺の光りも顯らかなり。障子を五寸ばかりあけて、それよりいへるなり。甚をかし。とんと斯様な好色めきたる所爲はゆめく、せぬもの、我が家に宮の行啓ましく、たりどて遠慮もなく何事も心任かせにするかと思ふもいとをかしきことなりとなり。

几帳は當時専ら用ひたるものにて、帳を垂れたる今の衝立の如きものなり。すきく、しきわざは好きく、にて好色の事なり。大進生昌は、謹直なる人にてかく好色がましきことは日ごろにもせざりしなり。

むげは、俗に謂はゆる一向に遠慮なしにといはむほどの義なり。

我がかたはらなる人をおこして、かれ見給へ。かゝる見えぬものあめるをといへば、かしらをもたげて見やりて、いみじう笑ふ。あれはたぞ、けせうにといへば、あらず家あるじ、局あるじと、定め申すべきことの侍るなりといへば、門の事をこそ申しつれ。障子あけ給へとやはいふ。猶其の事申し侍らむ。そこにさぶらはんはいかにく、といへば、いと見苦しき事、更にえおはせじとて笑ふめれば、若き人々おはしけりどて、引きたて、いぬる後に笑ふこといみじ。

大意、清少納言が自身の傍に相宿りせる若き女房等を起してあれ見給へあのやうに見知りもせぬもの、來れるよといへば一同頭をあげ見て大に笑ひ、あれは誰ぞ、婦人の寐たる所をも憚からずあらはなりといへば、生昌否とよ、あらはに寐所を見んとにあらず、家の主人が此の部屋の主人と論すべきことありて來れるなりといへば、少納言、門を廣くし給へとこそいひつれ、障子明け給へとはいはざりしものをといへば、生昌猶其の門のことを申さん、そこに參らんはいかにといへば、此の女中のみの家に入給ふは甚見苦しき事なり、何ぞ

て來給ふべきとて笑へば、成る程若き人々も居らるゝわいとて障子引たて、
出で行きし後にて、一同笑ふこと甚しかりしとなり。

もたげてはもちあげての約言、あれはたぞはあれは誰れぞなり。

けせうは字音にて、即、顯昭なり。此の頃の熟字にて物の暴露なるをいふ詞なり。

家あるじは、大進生昌のこと、局あるじは、清小納言のことなり。さだめは論定な

り。

あけぬとならばたゞまづ入りぬかし。消息をするに、よかなりとは、誰れかはいはん
どげにをかしきにつとめて御前に参りて啓すれば、さる事もきこえざりつるを、よ
べのことにめで、入りたりけるなめり。あはれ、あれをはしたなくいひけんこそ、
いとほしけれと笑はせたまふ。

大意、障子あくる程ならば直に入り來れかし。忍び入らんはいかにと案内し
問ふに、よろしと誰かいふものあらん、さもをかしきことよ。さて翌朝宮の御前
に出で、前夜のこと申せば、日ごろは生昌が少納言に心ありとも聞かざるに、
昨夜の門のことにつき其才學を愛で、入りしならん。あゝ生昌を情なくいひ

たるは氣の毒なりと笑はせ給ふとなり。
消息は案内の意、つとめては早朝のこと、こゝにては其の翌朝をいふなり。
よべは、昨夜にて今いふゆふべのこと、はしたなくは、無情の意、今俗に不都合と
いふ語なり。

いとほしは不憫のこと、俗に謂ふ氣の毒の義なり。

木の花は

梅の濃くも薄くも、紅梅、

大意、およそ此の一章には木の花の面白き限りをあげていへるにて、此の一
節には梅のことをいへり。梅の花は、其の色、濃くもあれ、薄くもあれ、紅梅こそ最
もよけれどこのこゝろなり。

櫻の花びら多きに、葉色こきが、枝細くて咲きたる、

大意、この一節には櫻の花のめでたきをかけり。櫻の中にては、花びら大きく
て、葉の色つき、枝細きに咲きみちたるがよきとなり。

藤の花まなひ長く、色よく咲きたるいとめでたし。

大意、此の一節には藤の花のめでたきことをいへり。藤の花は、たけ長くして色よく咲きたるが最もよろしとなり。志なひは志なやかにびきたるもの、こゝにては藤の花のたけのことをいへるなり。

卯の花は、品劣りて何となければ、咲く比のをかしう、ほとゝぎすの、陰に隠るらんとをかし。祭の歸さに、紫野のたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の上に白きひとへがさねかづきたる、青くち葉などにかよひていとをかし。

大意、こゝには卯の花のことをいへり。卯の花は、上の梅櫻、藤などに比べては品位劣りて別段見るところもなければ、その咲く時節よく、郭公のその花陰に隠れやせんと思へは殊にをもしろく、又、賀茂の祭りの歸途、紫野の邊に、賤が家ども、荆棘もていへる垣根などに、卯の花白く咲きみちたるをもしろし。其さま、垣は青く卯の花は白くして、さながら青色の上に白き單、重ね着たる青朽葉といふ衣服に似て、最もをもしろしとなり。

祭は、賀茂の祭、紫野は地名、あやしき家は、いやしき家、即賤が家なり。おどろなる垣根は、荆棘をもて結ひたる賤が家の垣根のさまなり。青くち葉は、あをばみたる朽葉、こゝにては、かさねのいろめの名、即衣服の名稱なり。

四月のつごもり、五月のついでたちなどの頃、ほひ、橘の葉のいと濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨のふりたるつとめてなどは、よになく心あるさまにをかし。花の中より、みのこがねの玉かど見えて、いみじくきは、やかに見えたるなど、朝露にぬれたる櫻にも劣らず、郭公のよすがとさへ思へば、や、猶更にいふべきにもあらず。

大意、この一節には、橘のめでたきことをいへり。橘の葉の最も濃く青きに、花の最も白く咲きたるに、雨の降りたる早朝などは、世に此の上なく心ありげにをもしろし。又、花の中より、實の黄金の玉の如く、明らかに見えたる状などは、なかく、朝露にぬれたる櫻の見事さにも劣らず、まして、郭公のたよるところと思ふからにや、猶更ことあたらしくほむべきにもあらずとなり。こがねの玉は、黄金の玉にて、橘の實の黄色なるをたふとくいひたるものなり。

梨の花よにすさまじくあやしきものにして、目に近くはかなき文つけだにせず、あ
いぎやうおくれたる人の顔など見ては、たとへに云ふも、げに其色よりして、あいな
く見ゆるを、もろこしに、限りなき物にして、文にも作るなるを、さりともあるやうあ
らんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき句ひこそ心もどなくつきためれ。
楊貴妃みかどの御使に逢ひて、泣きける顔に似せて、梨花一枝春の雨をおびたり。な
どいひたるは、おぼろげならじと思ふに、猶いみしうめでたき事は、類ひあらじとあ
げたり。

大意 この一節には梨の花のことをいへり。梨の花は、世に捨てられて、誰れも
てはやすものもなく、従て梅櫻の如く詩文をつくることもせず、却て、愛敬なき
殺風景の人を見て、梨の花のやうなりとたどふるほどなるを、唐にありてはこ
を限りなく愛で、詩文につくることも多ければ、仔細のあることならむと心
をとめて見れば、さてこそ、花びらのはしに、美事なる少し赤き色のあるかなき
かの如くつきたるあり。されは唐の楊貴妃死して玄宗皇帝、歎き堪へられず、使
を遣はして其の靈魂を求められしに、果して貴妃に逢ひて帝のことを傳へた

るに、妃、涙を流して歎きたるさまを、梨花によせて作りたる詩などあるは大か
たの事にはあらじと思ふに、猶甚めでたき事は、他に比類もなきやうに思はる
ゝどなるなり、
すさまじくは、冷じくにて不用らしく殺風景の意、あやしくはよからぬものと
いふが如し。

目に近くは目近く玩ぶ意、あいぎやうおくれたる人は、愛敬の顔付人に劣りた
るものをいへるなり。あいなくは愛なくのこと、ろなり。
楊貴妃は唐玄宗皇帝の寵妃、みかどは玄宗皇帝のことなり。
梨花一枝春の雨をおびたりは、詩の句、即、玉容寂寞淚欄干、梨花一枝帶春雨の下
の方の句なり。

おぼろげならじとは、大かたのことにはあらじといはんがことし。
桐の花、紫に咲きたるは、猶をかしきを葉のひろがりさまうたてあれども、又こと木
どもと、ひとしういふべきにあらず、もろこしにことごとくしき名つきたる鳥の、これ
にしも住むらん、心こそなり。まして琴につくりりて、さま／＼なるねの出でくるな

どをかしとは、世の常にいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。

大意 ことには桐の花をいへるなり。桐の花の紫に咲きたるは猶よけれど、葉のあまり廣がりたるは、何となくよからぬやうなれど、さりどて、外々の木とはまだ同じうは言ふべからず。支那に仰山に言ひはやす風風のこの木に住むといへるを思ふにも、特別の思ひあり、それのみならず、琴に作りて種々の音出づるなど思へば、世の常の如くにいふべくもあらず、いとめでたきものなりとなり。

こと木は、異なる木といふこと、ことくしきは仰山といはむがごとし、ことどしき鳥とは鳳凰のことなり。支那にては鳳凰は太平の世に出づる瑞鳥、梧桐に栖むものなりとせり。

木のさまぞにくげなれど、あふちの花いとをかし。かれ花にさまことにかきて、かならず、五月五日にあふもをかし。

大意 ことにはあふちのことをいへり。木の形状は見苦しけれど、その花はいとをもしろし。離れくしに細かに他の花と異様に咲きて、必、五月五日即端午の節

句にあふもをもしろしとなり。

あふちは楞フタにて梅檀といふ木なり。かれはなは離れくしに細かなる花。さまこととは様異、他のものと趣きを異にせるをいふ。

かならず五月五日にあふとは、此の楞の木は五月五日の端午の節句に菖蒲をふくが如く、軒に楞をふくならひありし故かくはいひつるなり。

草の菘を離れが尋ねんと答へし條

頭、中將の、そいろなるそらごどを聞きて、いみじういひおとし、なにしに人と思ひけんなど、殿上にてもしくなんの給ふときくに耻かしけれど、まことならばこそあらめ。おのづから聞きなほし給ひてんなど笑ひてあるに、黒戸のかたへなどわたるにも、聲などする折は袖をふたぎて露見おこせず。いみじうにくみ給ふを、どかくもいはず、見もいれで過ぐす。

大意 頭、中將が清少納言の事に關する漫然たる虚説を聞きて、甚、言ひ下げ、人間どだに思はずなど殿上にてもしはるしといふを聞くに耻けれど、必竟、隣人の詭言にて、眞説ならねば、おのづから聞き正し給ふべしと、取りも構はざるに、

くろどのかたへなど行く時にも、清少納言の聲色などする時は、頭、中將はやがて顔に袖をおひひて少納言をつゆ見給はず、頗る悪み給ふを、清少納言は、みづから其の言ひわけもせず、見いれもせず打ち過すとたり。

頭、中將は、恒徳公の三男正暦五年八月廿八日藏人頭たりといふ。

黒戸のかたは清涼殿の北の瀧口の戸の西なる由。

そいろなるは漫りに、又は心得なく、何となくいふべき意なり。

二月のつごもりがた、雨いみじうふりて、つれづれなるに、御物忌にこもりて、さすがにさうづしくこそあれ、物やいひにやらまし、どなんの給ふ、ど人々、睡れど、よにあらじなどいらへてあるに、一日しにも暮らして参りたれば、夜のおとまに入らせ給ひにけり。

大意 二月晦日雨甚しく降りて徒然なれば頭、中將禁中の御物忌に籠りて、清少納言を悪みは悪みたるもの、随分物淋ければ、物いひやらんとの給ふと、或る人々より清少納言に告げ、れど、清少納言は頭、中將の、あれほどにまで我を疎んじ給へば、よも物いひおこせ給ふ等の事はあるまじと返辭してあるに、其

の一日清少納言は、局に居暮し、夜に入て皇后の御坐所に参りたれば、宮は御寝ありきとなり。

つごもりは、月籠りの略言、つれづれは徒然、若くは無聊といはんが如し。

さうづしくしは漢字の寂寥にあたり、物さびしきことをいふ。

夜のおとまは御寝所のことなり。

なげしの下に火近くとりよせて、さし集ひて、へんをぞつく。

大意 次の間の長押の下に、燈火近くとり寄せて、女房等集合してへんつきの遊びをなせり。

へんをぞつくは、文字の旁、と篇とを分け、其の旁を隠くし、篇ばかりを見せておのづか其の恰好なる旁をいひあつる遊びごとなり。

あな嬉しや、どくおはせなど見つけていへど、すさまじき心地して、何しにのぼりつらんどおぼえて、すびつのもとに居たれば、又そこにあつまりて、物などいふに。

大意 女房等の篇突の遊びをなせるどころへ、清少納言出でたれば、皆喜びて早くこれへ來給へなどいへど、清少納言は、宮の居給はぬより、きょうのさめた

る心地して、如何にしてそれに上らんと思ひ、炭櫃のあるあたりに居たれば、女房等又そこに集まりて種々物などいふとなり。

すさまじきは荒涼の意、即きようのさめたること、又はあもしろくなきをいふ。何がしさぶらふど、いとはなやかに云ふ、あやしくいつの間、何事のあるぞと問はすれば殿守づかさなり。たゞこゝに入つてならで申すべきことなどいへば、さし出でしとふに、これ頭、中將殿のたてまつらせ給ふ、御かへりとくと云ふに、いみじくにくみ給ふを、いかなる御文ならんと思へど、たゞ今いそぎ見るべきにあらねば、いね、いま聞こえんとて、ふどころにひき入れていりぬ。

大意 折しも外より何某にて侍り御使に参りぬときはやかに問ひ來るものあれば、少納言は、只今こそ参りたるに、其の間に何事のあるぞとあやしく思つて問はすれば、其の使は殿守司にて人傳ならず清少納言に直接に申すべきことありといふ。即ち立ち出で、問へば、使、文を取り出で、これは頭、中將の参らせ給ふものなり。御返事早速にといふ。少納言、日ごろわれほどにまで惡み給ふに、如何なる御手紙ならんと思へど、直に披見すべきにもあらねば、使は先づ歸

れ、返事はやがて此方よりすべしといひ、其の文は懷中して、もとの坐に入るとなり。

何某さぶらふどは何の誰と申者にて候ふと名のりて使者に來りし由を云ひ入れしなり。

殿守づかさは殿上人等の使なる故に此の用にあたりしものなり。

入つてならで申す、間に人を経ず申す、即ち間接ならで直接に申すといはむがごとし。

いねは往ねにて、歸れといふことなり。

猶人の物いふを聞きなどするに、すなはち立ちかへりて、さらば其のありつる文を給はりて、どなんおほせられつる。とくくといふに、あやしく伊勢物語なるやと見れば。

大意 清少納言はもとの坐に入りて引續き女房等の話しを聞けるに、さきの使、又たち歸り來て、只今の御文、直に見給はぬならば貰ひ來れど中將殿仰せらる、疾く返し給へといふ故、少納言はあやしく何事なるやと披見すればの意な

り。

伊勢物語なるやとは、舊説伊勢物語に至急の手紙のことをいへり、即長岡の母より業平へとみの事として御文ありしといへり、とみは頼にて急にあなじ、清少納言の伊勢物語なるやといへるは至急の事なるやといふ意なり。

青き薄やうにいとよきに書き給へるを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり。蘭省、花、時錦帳、の下と書き、末はいかにくどあるを、いかにはすべからん、御前のおはしまさば、御覽ぜさすべきを、これが未知りがほにたどくしき、まんなに書きたらんも見ぐるし、など思ひ廻はすほどもなく、せめまどはせば、唯其あくに、すびつの消えたる炭のあるして、草のいほりを誰れかたづねん、どかきつけてとらせつれど、返事もいはず、暫ねて、

大意 青き薄様に端正に書き認められたれど、最初何事なるやと心ときめきしたる程の事にもあらず、只白氏文集なる蘭省、花、時錦帳、下、廬山、雨夜草菴、中といふ句の上の句だけを書きて、其の末はいかにくどあるを、清少納言はいかにすべき、皇后、宮のおはしまさば、此れを御覽に入るべきを、又、これが未知貌に平

生女子の書きなれもせぬおぼつかなき楷書に書きたらむも見苦しなど思ひ廻はすに、返事を疾くくど催せば、中將の文の奥に、炭櫃の消えたるすみのあるして、廬山雨夜草菴、中を書き崩して、草の菴を誰か尋ねんと書きて與へたるに、中將の返事もなく、清少納言等もみなねたりとなり。

心ときめきしつるさまにもあらずは、頭、中將最初、物淋びしければ物いひにやらましといひ、又、至急の手紙などを送らるゝは日ごろにくみ給へるに引かへて、何事のやさしき心もやと、心ときめきしほどにもあらず、思ひの外の事なりとなり。

蘭省、花、時錦帳、下は白氏文集中に詠みし句にて、頭、中將がこれを認めし意は、自ら此の雨夜御物忌に籠て徒然なるに、清少納言は夜の御殿の錦帳、の下に在るを思ひてかくは認めたるなり。

草の菴を誰れか尋ねんとは、右、下の句の廬山雨夜草菴中のことにて、清少納言是ればかりの事を誰れか尋ねんの心にて、自ら頭、の中將に悪くまればなぞて問ひ給はんと意を含ませるなり。

たどくしきはしかとせぬおぼつかなきことをいふ。
つとめていとくつぼねにありたれば、源、中將のこゑして、草の庵やあるくど、お
どろくしう問へば、なとてか、さ人げなきものはあらん。玉の臺もどめたまはまし
かば、出できこえてましといふ。

大意 清少納言、翌朝いと早く局に下りたれば、源、中將〇〇の聲にて草庵あり
やくと驚けるさまにて問へば、清少納言、争で左様の下品なるものあらん。玉
の臺とて尋ね給はん、にこそ出で、も逢はめといふとなり。
おどろくしは驚ろかしにおなじ。

あなうれししにもありけるよ。上まで尋ねんとしつる物をとて、よべありしやう、頭、
の中將のどのゐ所にて、すこし人々しきかぎり、六位まであつまりて、萬の人のうへ、
今昔と語りていひしついでに、猶此の者むげに絶えはて、後こそ、さすがにえあら
ぬ、もしいひ出づることとやと待てど、いさゝか何とも思ひたらず、つれなきがいと
ねたきを、こよひあしともよしとも、定めきりてやみなんかしとて、皆云ひ合はせ
りし事を、

大意 源中將清少納言の御前へ出でずありしを喜びて、前夜の事を委はしく
物語りせらる。即ち、中將がどのゐの所にて、やゝ物心をも知れる人々打集ひて、
世の人評、又は、今昔の物語りなどせる折しも、猶清少納言と一向に中絶えて後
悪みながらも、さすがに堪へ兼ね、若し彼の讒人のいひわけを清少納言の云ひ
出す事もあらんと待てど、少しも其のいひわけせず、つれなくねたく思ひしを、
今宵こそ清少納言の善悪をも論定して止まばやと云ひ合せて、試に、彼の文を
遣はし、事をとたり。

どのゐの所とは殿上の番所のこと、むげは無下に一向といはむがごとし。
もしいひ出づる事もやどは、讒人のいひわけをなすこともがなとなり、即さき
に、いみじうにくみ給ふを、どかくもいはず見もいれで過ぐすとありし結びな
り。

只今は見るまじきとて、入り給ひぬとて、殿守づかさ來りしを、又あひかへして、唯、袖
をとらへて、どうざいをさせず、こひとりもて來ずば、文をかへしとれといましめて、
さばかりふる雨のさかりにやりたるに、いとく歸り來り、これとてさし出たるが、

ありつる文なれば、返してけるか、どうち見るに、あはせて、あめければ、あやしいかなる事ぞとて、皆よりて見るに、いみじきぬす人かな、猶えこそ捨つまじけれと見さわぎて、これをもどつけてやらん源中將つけよなど云ふ、夜ふくるまで、つけわづらひてなんやみにし、此の事、必語り傳ふべき事なりとなん、定めしと、いみじくかたはらいたきまで、いひきかせて、御名は今草の庵となんつけたるどていそぎたち給ひぬれば、

大意 折角云ひ合はせて遣はしたる文を、今は見ずとて入り給ひぬとて殿守司、歸り來りし故、清少納言をして東西に身ゆるぎもさせず、直に返事取りて來るべし、さなくばもとの文取り返へして來れと命じて、雨のふるさかりに遣はしたるが、やがて歸り來りてさし出すを見れば、青き薄やうに認めたるもとの文なれば、さればそのまゝ返したるかど打見ると同時に曾感じてあめければ、何事ぞと打寄りて見るに、『草の庵を誰か尋ねん』の返事なれば、清少納言こそ只ならぬ人なれと打さわぎて、其の上の句つけてやらん源中將つけよなどいひて人々夜更るまで考へて止みし此の事、世に傳へてほめ草にすべし、などいひき、

國 文 學

國

文

學

どにくきまで云ひきかせて、少納言の名は此の後草の庵と名づけたりとて急き立ち出で給ひしとなり。

いみじきぬす人かなとは普通の人にくれたりとほめんとて洒落^{レヤレ}ていへる詞なり、惡むべき盜賊のことにはあらず。

いとわろき名の、末まであらんこそ口をしかるべけれ、といふほどに、修理、亮、則光、いみじきよろこび申しに上にやとて参りたりつるどいへば、なぞ、つかさめしありともきこえぬに何になり給へるぞと云へば、いで、まことに嬉しき事の、よべ侍りしを、心もどなく思ひあかしてなん。

大意 清少納言、源中將より前夜の事を聞きていとわろき名の傳へらるゝは口をしなど、ひとりこつ折しも、修理亮、則光、賀詞申さんどて是まで來りしといへば、司召のありとも聞かぬに、何になり給へるぞと清少納言のいふに、則光、實に喜ばしき事の昨夜ありつるを、早く云ひ聞かせたく思つて夜の明くるを待ちかねたりとなり。

つかさめしは秋季の京官の除目をいふ、除目に官を得し人はよろこびとて方

々へ拜賀することあり、こゝにては、則光よろこびに参りたりといふについて、清少納言、わざとかくいへるなり。
かばかりめんぼくあることなかりきとて、はじめ、ありけることいも、中將のかたりつるおなじこといもを云ひて、此の返りごとをまたがひて、さるものありとだにおもはじと、頭、中將の給ひしに、たゞにきたりしは、中々よかりき。

大意 則光、斯程面目ある事はなかりきとて、さきに源中將のかたりたることゝ同じこといもをいひて、此の返事のごときことあらんとも思はじと中將のいひたりしに、最初返事もなしに歸りしは、却てよかりきとなり。

もて來たりしたひは、いかならんとむねつぶれて、賊にわるからんは、せうとの爲もわるかるべしと思ひしに、なのためだにあらず、そこらの人譽め感じてせうとこそきけとの給ひしかば、また心には、いどうれしけれど、さやうのかたには、更にえさぶらふまじき身になん侍ると申し、かば、ことくはへ聞き知れどには、あらず、たゞ人にかたれとてきかするぞ、どの給ひしなん、すこし口をしきせうどのおぼえに侍りしかど、これがもどつけ試みるに、いふべきやうなし、ことに又これがかへしをやす

べきなどいひあはせ、わろきこといひては、中々ねたかるべしとて夜中までなんあはせし。

大意 殿守司が返事もて來りし時は、實に心配して悪しき時は、則光の爲にも悪しからむと思ひしに、豈圖らんや草の菴の返事の目出たかりしは、皆打感じて、則光聞かれよと頭中將の戯れて云はれし、實に心には嬉しけれど、則光は歌道の心なしと申せば、又人々別に詞を加はへよどには、あらず、只人に傳へ語れどいふぞと云はれしは、少し我が身の待遇残念なりしが、其の上の句を試みるに、いふべきやうなく、又殊に之れが返歌すべきなど云ひあはせ、其の返歌わるとき時は、却てせぬこそよけれとて、夜中までおはしたりとなり。

せうとは兄のこと、即則光をいふ、則光は清少納言と交際親密なりし故人稱して、兄妹のやうなりといへり、實の兄妹にはあらず、なのためは、あほよそに、又はあほかたに、など解すれど、爰になのためだにあらずといへるは、草の菴の返事のすぐれたるを、世の常ならずと賞めたるなり、これは身の爲にも、人の爲にも、さていみじきよろこびには、侍らずや、司召にせうせ

うのつかさ得て侍らんは何とも思ふまじくなんといへばげにあまたして、さる事あらんとおぼらでねたくもありけるかな。これになんむねつぶれておぼゆる。

大意 則光が前夜の話をなし上の間に應じて是れこそ我が身の爲にも其許の爲にも喜ふべき事なれ。司召に少々の司得たりとて、さまでには思ふまじといへば、清少納言に左様に人々集ひていひ合はせし事もおぼらで返事せし事のねたさよ、之れを聞けば胸もつぶれて覺ゆとなり。

このきみと秀句せし條

五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、女房やさぶらひ給ふ。とこえくゝまて云へば、
「出で、見よ、例ならずいふは誰ぞ」と仰せらるれば、

大意 五月のころ或る暗夜のことなりき。女房はみ給ふかどてくちくゝに呼べる故、皇后宮何事ぞと思して、常ならずこえくゝにていふは誰れぞ、出で、見よ、と清少納言に仰せらるればとなり。

出で、こは誰ぞ、おどろくゝまう、きはやかなるは、といふに、物もいはで、みずをもた

げて、そよろとさし入るゝは、吳竹の枝なりけり。

大意 清少納言、皇后宮の仰に従ひ、出で、人の驚かるゝばかりきはたてゝ人を呼ぶは誰れぞと咎むるに、その人々何の答へもせず籠を掲げ、そよくゝと物音させて指し入れたるを見れば、竹の枝なりしとなり。

おどろくゝまうとは、おどろかるゝばかりといふを、なだらかにいひなしたる音便なり。

きはやかにとは、きはたてゝといふを、副詞に云ひなしたる詞なり。

そよろとは、そよくゝとといふに同じく、もの音のするに用ふる詞なり。多くすゝきなどのうむく音に用ひたる例あり。

「あ、此の君にこそ」といひたるを聞き、いざや、これ殿上にゆきて語らんとて、中將、新中將、六位どもなどありけるは往ぬ。

大意 清少納言そのさし入れたる竹を見て、あゝ此の君こそはといひつるを聞き、其の竹を入れたる人、即、最初にこえくゝして呼びし人々いざ殿上に行きて、此の由語らんとて、中將、新中將、六位どもなど、ゐたる人々は皆歸り去りぬ

となり。蓋し、この殿上人達は、もと此の吳竹の歌よまんとて來たりしものを、先づ清少納言に、この君といふ秀句云はれたればそのこと人に語らんとて歸り去りたるなり。

この君とは竹のことをいひしものなり。竹を此君といひし古きためし和漢に多し。今にも風流の人々は竹を、君子などいひて松梅蘭などならべ稱ふるなり。

頭辨はどまり給ひて、あやしく往ぬる者どもかな。あまへの竹を折りて歌よまんと志つるを、職にまゐりて同じくは女房などいひ出でしをといひて來つるを、吳竹の名をいと疾くいはれて、いぬこそをかしけれ。誰がをしへを知りて人のなべてあるべくもあらぬ事をばいふぞなどのたまへば。

大意 頭辨ひとり残りて、御殿の前の竹を折りて、その歌よまむとして來たるものは、皇后宮の御側に參りて、同じことならむには、女房ども呼び出でしものに歌よまむといひて來つる甲斐もなく、清少納言に竹の別稱を先づいはれたりとて、歸るぞあかしき。又清少納言は、誰れが之れを放へて、普通の人の知るべ

しども思はれぬことをいふぞなどいふとなり。
あまへは仁壽殿の前のことなりといふ。吳竹の名とは、さきに清少納言のこのきみといひしこといはずもしらむ。

竹の名とも知らぬものを、なまねたしとやあぼしつらんといへば、まことぞ。えしらむなどの給ふ。まめことなどいひあはせて給へるに。

大意 清少納言はこの君とは、しか竹の名とも知らず。只その人の殿上人等なればこの君といひしものを、殿上人等はみやびごとのやう思ひつらんといへば、行成、さも清少納言は此等の故事は知らざるべしといひ、なほまめなることいもいひあはせる給へるにとなり。知らざるべしとは行成の賊に清女が知らむと思へるに非ず。常より博識の清女は此事を知るまいぞよとわざと裏うへに云ひたるなり。

此の君と稱すといふ詩を誦じて、又集り來たれば、殿上にて言ひ期しつるほいもなくて、などかへり給ひぬるぞ。いとあやしくこそありつれとの給へば、さる事には何のいらへをかせん。いとなか／＼ならん。殿上にてもいひのしりつれば、上もき

こしめして興せさせ給ひつると語る。

大意 折しも曩に歸り去りたる中將新中將六位など殿上人が竹の詩など吟じて又來りければ行成それらに向ひ、最初殿上にて皇后宮の女房などと歌よまむとて約束してきたる本意もどげずして何とて歸り給ひしぞ、その意得難しと云へば殿上人は、此の君などいふみやびごとにはなまむひにめでたからぬ返事はせぬこそよからめ、とてなり、殿上にて此のことをいひはやせば一條院もきこしめして興せさせ給ひつるとかたる。

この君と稱すとは、春曙抄に「朗詠、藤篤茂、晋騎兵三軍王子猷種而稱此君、これ本朝文粹十一に修竹冬青といふ事を賦したる詩序の詞也」とあり。

辨もろどもにかへす、同じことをずんじて、いとをかしがれば、人々いで見る、とりく、に物どもいひかはしてかへるとて、猶同じことを、もろごゑにずんじて、左衛門の陣に入るまで聞こゆ。

大意 行成もどもにくりかへしこの君と稱する句を誦していとをかしがる故人々いで見る、おのく物どもいひかはして歸るとて猶同じことをもろ

どもに稱して左衛門の陣屋へ入るまで聞こえたりと。

とりくは、おのくさまく、にといはむがごとし。

もろごゑは、もろく、聲の略音にて、もろどもによぶこゑなり。

つとめていとく、少納言の命婦といふが、御文參らせたるに、此のことを啓したれば、しもなるめして、さる事やありしと問はせ給へば、知らず、何とも思はでいひ出で侍りしを、行成の朝臣のとりなしたるにや侍らん、と申せば、とりなすとても、と打ちゑませ給へり、誰れがことをも殿上人はめけりと聞かせ給ふをば、さいはる、人をよろこばせ給ふもをかし。

大意 翌朝最疾く、禁中の女房少納言の命婦といふもの、帝の御文を皇后宮へ届け參らするに、前夜のことを皇后宮に申し侍りぬれば、皇后宮其の職にもあらぬ清少納言を召して、昨夜さることのありしかと問はせ給ふ、其の時清少納言は答へて、存じ侍らず、何心なく云ひ出でたるを、行成朝臣のとりなしたるこそならむと申せば、皇后宮は、たどひ取り成すといふとも跡方もなきことならむには、かばかりいひはやす事もあるまじとて、打えみ給へり、誰れがことをも

殿上人はめたりときかせ給ふをば、しかいはるゝ女房をよろこばせ給ふ皇后宮の御心こそありがたけれとなり。

名おそろしきもの

あをぶち、谷のほら、はたいた、くろがね、つちくれ、いかづちは名のみならず、いみじうおそろし、はやち、ふさうぐも、ひこぼし、おほかみ、うしはさめ、らう、ろうのをさ、いにし、それも名のみならず、見るもおそろし、なはむしろ、強盜、又よろづに恐ろし、ひぢかさ雨、くちなはいちご、いぎす魂、おにどころ、おにわらび、うばら、からたち、いりずみ、ばうたん、うしおに、

大意 此の一項は清少納言がみづから其の名を耳に聞きて恐ろしく感ぜたるものを列擧したるものなり。他人より之れを見れば或は恐ろしく感ぜざるのみならず、却てをかくしく感ずるものもあるべし。中にも清少納言は、いかづちは名のみならず、いみじう恐ろしといひ、強盜また、よろづにつけて恐ろしといふ。

あをぶちは青淵にて、水層深く碧色なる水溜りをいふ。谷のほらは山谷なる洞

穴なり。往々猛獸毒蛇怪鳥などの棲息所となることあり。はたいたは春曙抄に鱗板家の具とあり。門の左右の板塀やうのもの也。くろがねは鐵なり。

つちくれは、土塊にて、これらは、人によりては恐ろしからぬのみか、却て擊攘泰平の民も連想すべし。いかづちは雷、これは名はともかく其の原因の激烈なるものなれば、その鳴震するや實に凄まじく、今の世にも恐るゝもの多し。たゞし古は多く鬼神として恐れたるなり。

はやちは、普通はやてといひて、暴風のことなり。ふさうぐも詳ならず、一説によれば不祥雲にて、瑞雲、景雲と相反むけるもの。理學、未だ普ねからざる時は此の水氣の凝結したるものを以て、吉凶の兆、世のさとしなどとしたり。其の種々なる色あるは、距離の遠近、層積の厚薄、日光の影響等に關することも知らざりき。ひこぼしは牽牛なり。おほかみは狼にて人を噛むことあり。うしはさめは、牛の類にては、さめ牛の名恐はしどの意なるべし。

らうは蠟か、ろうのをさは、半長か。半は今の監獄の類にて、半長といへば今の監

視、又は獄長ともいふべきものか、いにすしは土佐日記なる蝙蝠鮎にやと春曙抄に見ゆ蝙蝠は貝の類にて、鮎、鮎に似て大なるものなりといふ、さればにや、清少納言は名のみならず、見るもおそろしといへり、
 なはむしろは細莖にて、今の人は別に恐ろしき名とも覺えまじ、強盜は今の世にもあり、よろづに恐ろしといへるも宜ならむ、ひぢかさ雨は、にはか雨、くちなはいちごは、地楊梅、いぎす魂は、生魂、おにどころは、鬼蘇にて、おにわらびは、鬼蘇うばらは、茨、からたちは、枳殼、いりずみは、煎炭にて、濕氣を取りし炭なりといふ、ぼうたんは、牡丹、うしおには、牛頭の鬼といふ類か、以上名おそろしきものどもを列舉畧解したるものなり、

竹取物語

竹取物語は、我が邦小説のうちにて最も古きものとは知れど、其の何人の作なるかは知るによしなし、舊く源順朝臣の作なりといふ説はあれども定かならず、その出来し時についても種々説ありて一定せず、されど仁明天皇の大同よ

りは後醍醐天皇の延喜よりは四五十年も前のものならんといふ説漠然たりと雖も、やゝ確かなるものなるべし、其の年頃の習慣として、假字文は女流社會のものにして、男子の文は、必ず漢文に物すること、既にもいへる通りなれば、たまたま假名文書ける男子あるも、あるは其の名を隠くし、あるはことさらに女子の物したるやうつくろへるあれど、こは全く男子の手に成りしものなることは、讀者おのづから知り得べし、

さて此の書の性質は、既に先輩もいへりし如く、寶樓閣經、漢書西南夷傳、其の外何くれの漢籍佛典の説により、邦人の口碑に傳はる昔語りなどをとりあはして作れる構想的小説なり、現今我が邦に盛に行はるゝ小説と其の趣の同じならぬは、昔と今と社會の事情異り、從て人の思想の同じからざればなり、さはいへ小説といふ上に於ては、此の小説の其の祖たることを忘るべからず、祖たることを忘れずば、從ひて通讀するは厭はざるべし、讀みて味は、おのづから我が古文學の價值を知るべし、

ことに竹取物語は文法極めて正しく、つゆ批難すべき所なく、且、文章簡潔にし

て筆力遺強なれば、文章を成す参考にも亦文法を習ふたすけにもなるべし。此の書竹取物語と名づけしは、本書の成り立ち、もと竹取の翁といふものゝ家（一八）にありし事柄を書きたるが故なり。物語は談話と同じく、他に深き意味をもたず。

こゝには歴代文學に載せたる發端の文と、石上中納言子安貝を索むる條との二章を講述することゝすべし。

發端の文

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、たけをとりつゝ、萬のことにつかひけり。名をば、さぬきの、みやつこまろ、となんいひける。

大意 昔、竹取の翁、本名讚岐造磨といふものあり、彼の野、此の山に入りて竹をとり、種々の竹細工などしてけりとなり。

竹取の翁とは、其の平常の職柄よりあだなしていひたるなり。

まじりてとは、分け入りてといふがごとし。萬のことは、種々の細工物のこと、抄には「カキミツ簞ツツなどに作るなるべし」とあり。

其の竹の中に、もとひかる竹、一寸ぢありけり、あやしがりて寄りて見るに、筒の中ひかりたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

大意 野山なる竹の中に、其の根の光るもの一本ありし故、怪みて立ち寄り見れば、其の中に、身の丈け三寸ばかりなる愛らしき人居たりとなり。

うつくしうは、今の語にありては、美麗の意なること、いふも更なるが、古語にありては、多く愛らしき意に用ひたり。蓋し慈しきのこゝろなるか。

翁云ふやう、われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにてしりぬ。子になり給ふべき人なめりどて、手にうち入れて、家に持て來ぬ。妻のオカサ爐にあづけて養はす。美しき事限りなし。いとをさなければ、こにいれて養ふ。

大意 竹取の翁、我れ毎朝夕取る竹の中におはするを見れば、深く因縁ありて我が子たるべき人と見ゆどて、掌に入れて持ち歸り、妻の爐に托して之を養育せしむ。幼稚なれば籠に入れて育てしとなり。

なめりはなるめりの略音、めりは現在の推量をあらはす詞にて、かく見ゆるといふ俗言のことし。

これに入れてのこは籠のことなり。昔はたゞここのみいへり、手に入れて持ち歸り、籠に入れて養ふ、ちいさきこと思ふべし。さて籠に入るゝは此翁か細工の籠なるべし。

竹取の翁、この子を見つけて後に、竹を取るに、節をへだて、よごどにこがねある竹を見つくることかさなりぬ。かくて、翁やうやうゆたかになりゆく。

大意 翁はその後竹を取るに節と節との間毎に金の入りたるを見つくること度々にて、漸く豊富になれりとなり。

よごどとは兩節毎といはむがごとし、よは節と同じ。

此のちご、養ふ程に、すぐ／＼とおほきに成りまさる。三月ばかりになるほどによき程なる人になりぬれば、髪あげなどさだして髪あげさせ、もきす。

大意 此の乳兒、頗る發達よく三ヶ月がほどに、常並の人となりし故、是れまでの子供ぶりを廢し、髪あげもさせ、袴も着せて、成人のならひに従ひたりとなり。すぐ／＼は健全に發達すると、髪あげとは、昔女子は幼き程はふりわけ髪とて肩の邊まで垂れたるを、成人すれば髪をあげ根を結びて、更に背後へ下ぐる例

なればかく髪あげはしたるなり。さだすは定すにて、その掟てしたるなり。もきすは裝着すにて、又成人の例なり。裝とは女子のはく袴なり。帳の中よりも出さず、いつきかしづき養ふ程に、此のちごのかたち、けうらなること、よになく、やのうちはくらき處なく、光満ちたり。翁こゝちあしく苦しき時も、此の子を見れば、苦しき事も止みぬ。はらたゝしき事もなぐさみけり。翁、竹を取ることに久しくなりぬ。いきほひまうのものになりけり。

大意 此の子美麗に成人しければ、屋外にも出さず、荒き風にもあてず、いと大切に養育すれば、此の子容貌、美に、皮膚清らなること非常にて、それが爲め家内暗きどころもなきまでに光り遍ねし。翁の喜び愛づること此の上なし。故に翁は心地あしき時又腹立たしき事ある時も、此の子をだに見れば、あしき心地も癒え、又腹立つことも慰むばかりなり。翁はその後、竹を取ることにいと久しくなり、勢もまた強く健かに成りしとなり。

帳の中とは几帳の中のことにて、絹を垂れて坐の仕切となすものなり。

いつきかしづきのいつきは、齋イハヒの義、かしづくは畏オソ付の義にて、ともに尊敬することなり。こゝにては、大切に養育すといはゞ事足るべし。

けうらはきよらの音便、きよらは清の字なれど、こゝには唯カレイのことなり。やのうち屋の内、まうのものゝまうは字音にて猛なり、強く健かなることをいふ。

此の子、いどおほきに成りぬれば、名をば、御室戸齋部の秋田をよびてつけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫、とつけつ。此の程三日うちあげあそぶ。萬の遊びをぞしける。男女きはらず、呼びつどへて、いどかしこくあそぶ。

大意 此の子、かく成人したれば、御室戸といふ所なる齋部、秋田といふものを召して命名せしめられたれば、此の者なよ竹のかぐや姫と名付けたり。されば、此の二三日間は、男女隔てなく呼び集へ、酒宴をし、又種々の遊戯をなして祝へりとなり。

三室戸なる齋部秋田は、當時の陰陽師などなるべし。なよ竹は、藝カしくしたるやさしき竹にて、女竹のことなり。かぐや姫は、光り輝く姫のこゝろにて、必竟、此の

女の優にやさしく、清らかに艶ある姿を賞めて、かくは名づけたるなり。

うちわけは酒宴のことなり。もと酔うて手を打ちあぐる形容より、遂に酒宴の代名詞とはなりたるものなり。あそぶは狭き意味にて、多く管絃を鳴らす音楽の事をいへり。そはこの頃音楽を以て遊戯の上乗としたる故なり。かしこくあそぶとは、甚しく遊ぶことなり。

さて此の一文、中これまでは、此の女子の發見せられてより、よきに成長せしませる有様をくはしく叙したる一段落なり。

世界のをのこ、あてなるも、賤しきも、いかで此のかぐや姫を得てしがな。見てしがな。と音に聞き、めでまどふ。其のあたりの垣にも、家のだにも、をる人だに、たはやすく見るまじきものを、よるは、やすきいもねず、やみの夜に出で、も、穴をくむり、こゝかしこよりのぞき、かいまみまどひあへり。さる時よりなむよばひとは云ひける。

大意 世間の男子ども、貴きも賤しきも皆かぐや姫の事を聞きて、恍惚とし、何ぞぞ妻に得たしとねがひ、一目見たしと願ふもありて、さわぎなり。姫と同居する人だに、奥深く住めば、容易く見も得ざるに、皆、焦らだちて安眠もしやらす、暗

の夜にいでも垣押分け、穴を抉じりあけなどして、我も人も覗き合へり。かゝるところより、今いふよばひといふ事は、いひはじめたりとなり。あてなるものは、うはて(上人)なるもの約音にて、貴人のことなり。いかでは何卒といふに同じ。其のあたりの垣にも家のとにもは句を隔て、下のこゝかしこより覗き云々にかゝる文理なり。注意せざれば少し解し難し。いもねずは寝にも就かずとの意なり。かいまみは、垣間見の音便にて、垣の間より覗き見ることなり。まどひあへりとは、感ふものゝ大勢なる故にかくいへり。よばひとは昔は婚姻のことを云ひて、呼ビの義なるを、こゝには滑稽に、わざと、夜這の意にいひしなり。人のものどもせぬ處に、まどひありけども、何のしるしあるべくも見えず。家の人どもに物をだにいはむとて、云ひけれども、ことゝもせず。あたりを離れぬ公達、よをあかし日をくらす人あほばかり。おろかなる人は、やうなきありきは、よしなかりけりて、こずなりにけり。

大意 人のとりかまひもせぬところにかほど感ひありきたりとして何の詮かあらん。心を盡くして家の人に物だにといひ掛くれど何の功もなし。其のあたりに感ひある貴人等、覺えず長き夜を明かし、あたら日を暮すもの多し。中に、姫を慕ふことのみぎり切ならざる人は、無益のことをなすも功なき事なりとて、遂には思ひ切りて來らぬやうなりきとなり。ものどもせずは、下なることゝもせずと同じく、物の數ども思はぬといふがごとし。おろかなるは愚なるにあらず。おろそかなる意にて、姫を戀ふことのみで切ならざるものをいふなり。やうなきは益なきの音便にて無益のことなり。よしなきは功なしといはむがごとし。其の中に猶いひけるは、色好みといはるゝかぎり五人、おもひやむ時なく、よるひる來けり。其の名ひとり石作の皇子、一人は車持の親王、一人は右大臣阿倍のみうし、一人は大納言大伴のみゆき、一人は中納言石上の麿、只此人々なりけり。(中略) 大意 其の中、世に好色家といはるゝだけ五人残りて、猶いろくくに云ひ、想ひ

戀ふることやむ時なくて、晝夜そのあたりに詰かけたりとなり。
 その中とは、上の暮ふ心の切ならざるは、大かた來ずなりたるその中といふこ
 ろなり。石作、車持も姓なり。此れら五人の姓名も、皆こゝろのまゝに作りたる
 名なり。

日も暮るゝほどに例のあつまりぬ。人々或は笛を吹き、或は歌をうたひ、或はしやう
 かをし、或はうそをふき、扇をならし、などするに、翁出で、云はく、かたじけなくも、き
 たなげなるところに年月をへて、物し給ふこと、極りたるかしこまりをまうす。翁の
 いのち、けふあすでもしらぬを、かくの給ふ君達にも、よく思ひ定めてつかうまつれ
 と申せば、ことわりなり。いづれも、劣りまさりおはしまさねば、ゆかしき物、見せ給へ
 らむに御心ざしの程は見ゆべし。つかうまつらむことは、それになむ定むべきとい
 ふ。これよき事なり。人の恨もあるまじといへば、五人の人々もよき事なりといへば、
 翁入りて云ふ。

大意 日暮頃、例の五人集り來て、笛を吹き、歌をうたひ、琴笛の譜を謠ひ、口笛を
 吹き、扇をならし、など、おのゝ思ひの藝をなしてあるところへ、翁出で、

勿躰なくも、此のきたなげなるところへ、年月をかさねて來通ひ給ふこと、至極
 有りがたく御禮を申すなり。此の翁の命數も最早さし迫りて、今明と知れぬに、
 かく親切にの給ふ君達にも、よく心を定めて仕ふべしと、姫に申せば、姫も尤の
 ことなり。五人何れも優劣なくて、撰びがたければ、此の上はゆかしきもの見せ
 給はんには、其の御志のほどは見らるべし。事ふまつらむことは、其の結果によ
 りて定むべしといふ。是れ實にさる事にて、これには何づれの御恨もあるまじ
 といへば、五人の人々も、それよきことなりといへば、翁は入りてその承諾の由
 を、姫にいふとなり。

志やうかをうたふは、たゞ歌を唱ふにあらず、琴笛の譜を謠ふことなり。
 うそをふくは、囁のことにて、口をつぼめて、笛を吹く、謂はゆる口笛のことなり。
 扇をならすは、笏拍子などうつをいふ。かたじけなきは、今いふ恭にはあらで恐
 れ多き事といはむがごとし。物すとは、凡て爲す業に就いていふ辭なれば、こゝ
 にては來給ふといふに同じ。まらぬは、知られぬの意。かくの給ふは、かく親切に
 の給ふの意なり。ことわりより定むべきまでは、姫の詞を翁のいへるなり。

かぐや姫石作のみこには天竺に佛の御石の鉢といふものあり。それを取りてたまへど云ふ。車持の皇子には東の海に蓬萊と云ふ山あり。それに白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實として、たてる木あり。それ一枝をりてたまはらむといふ。今一人には唐土コロンにある火鼠の裘をたまへ。大伴の大納言には龍の首に五色にひかる玉あり。それをとりて給へ。石上の中納言には燕のもたる子安貝、ひとつとりて給へど云ふ。

大意 かぐや姫は前にゆかしき物見せ給へらんに、御心ざしのほどは見ゆべし。つかうまつらんことはそれになむさだむべき。といふに、五人の承諾したるまゝ、其の何れも得難きこといもをあのくへあつらへたるなり。

天竺なる佛の御石の鉢、蓬萊にある異木の枝、唐土なるひねずみの裘、龍の首の五色の玉、燕の子安貝の事などは、本書なる其の條々のもとに、委しければ、こゝに細かに解説せず。

天竺は今の前印度、古は天外の國の如く思ひしもの多かりき。唐土は今の支那國全幹をいひき。蓬萊は東海のはてなる仙境なりといひ傳へき。あなりはある

なりを略したる音なり。今一人とは前に云ふ右大臣阿部のみうしの事なり。もたるは持ちてあるの約言なり。子安貝は、子を産むときに出だす貝なりといふ。翁、かたき事どもにこそあなれ。此の國にあるものにもあらず。かくかたき事をば、いかに申さんと云ふ。かぐや姫、何かしたからむといへば、翁とまれ。かくまれ。もうさむとて、出で、かくなむ聞ゆるやうに、見せ給へといへば、皇子たち、かむたちべきして、あいらかに、あたりよりだになありき。そとやはのたまはぬ。といひて、うんじて皆かへりぬ。

大意 かぐや姫の難きあつらへに、翁は驚きて、其の物を取るは實に難きことなり。此の國にあるものにもあらざるを、如何にして、此の難きことを申すべきぞといへば、かぐや姫は何程の事かあらむと、いと心安くいふゆゑ、止むを得ず、翁は左も右も申さむとて出で、斯様に申しあぐるやうに、あのく、此の品物どもを持ち來て見せ給へといへば、さしもの五人も、之れを聞きて大に驚き、かばかり難題を申しかくる程ならんには、なぞ尋常に此の邊りをも通行するなかれといはぬぞといひて、快鬱として歸りぬとなり。

とまれかくまれば左もあれ右もあれの約にて、俗にどうあらう、といふ程の語
 なり。かくなん聞ゆるやうにとは、かやうに申しあぐるやうにといふに同じ。
 かんたちべは上達部と書きて、公卿の事、三位以上の人をいふ稱なり、ちいらか
 は老いらかにて、大人しやかと譯するもよし、又尋常にといふもよくあたりか
 あたりよりだには、かやや姫の近邊をもといふに同じ。なありきそのなど、そと
 は禁止的にてはにて、あるくなといふことなり。上のあいらかに、あたりよりだ
 に、なありきそとやはのたまはぬ、といふころは、かやうの難題をいひかけん
 より、いつその事に、此の近寄をも通行するなど、云ひ切りてもくるべきに、さ
 はいはずして、なぜかやうの事をいふぞと、實にあきれば、てたる詞なり。重複す
 るごとくなれど老婆心もてかく更に解説す。うんじては、倦みすの音便にて、困
 却して歸りし由なり。みなかへりぬの詞には、断念して歸りぬる意味ありと知
 るべし。

さて、本文は、またこゝにて一段落をなせり、即ち是れまで五人のまどひ暮へ
 るまゝ、姫より難題をいひかけられしことを叙したるなり。是より五人のいか
 に其の心を遂げんとして、身心をつくせるかは、次の段落においてあつから
 見るべし。

石上中納言子安貝を索むる條

中納言石上の麻呂は家につかはるゝをのこどもの許に、つばくらめ集くひたらば、
 告げよとのたまふを、うけ給はりて、何のれうにかあらむと申す、答へての給ふやう、
 燕のもたる子安貝とらむれうなりとの給ふ。

大意 中納言石上の麻呂召し仕ひの男どもに命じて、燕の集くひたることを
 告げしむるに、男どもうけたまはりて、何のためになし給ふぞと問へば、燕のも
 ちたる子安貝てふものを取らんためなりとなり。

是れ難題中の燕の段なり。燕といふ鳥のさる、貝生むやうあらむや。但しその以
 前世に云ひならはし、例は、西京雜記といふものに、元后在家、嘗有白燕、食白石
 大如指、墜后續篋中、后取之、自剖爲二、其中有文云々とありと。

をのこども答へ申す。燕を數多殺して見るだにも、腹になきものなり。但し子生むと
 きなむ、いかでか出すらむ。はらくと人だに見ればうせぬと申す。又人の申すやう、

あほひつかさのいひかしぐ屋のむねの、つくのあなごどに、燕はすくひ侍り。それに
まめならむをのこどもを、あてまかりて、あぐらをゆひて、あけてうかゞはせん、そ
こらの燕子をうまさらむやは、さてこそとらしめ給はめと申す。

大意 男ども答へて子安貝などいふものは、燕を殺して見ても腹にもなきも
のなるが、但し子を生む時にでも腹より出すことあるか、さるにてもいかにし
て出すならん、人をさへ見れば直に飛び去るものをと申す。又、人の申すには、大
炊寮なる屋の棟の穴に、燕の巢あり、それに、正直に丁寧なる男どもを率ゐ、高く
あぐらを結はせ、其の巢を覗かせ見れば、子を生まぬこともあるまじ、かくして其
の物を取らしめ給へどまうすとなり。

あほひは禁中なり。大炊寮にて即ち主上、及び、臣下にたまはる饗膳等を司とる
ところなり。

つくの穴はいろく説あれど、思ふに、棟の突出したるところなどに穴などあ
るをいふならむか。

まめならむは忠實、又は丁寧のこと、いふころは、高き危きところにて難きこ

とを行ふなれば、心落ちつきたる人ならでは、能はぬ故、かくはいふなり。あてま
かりては率ゐて行きてといふことなり。あぐらは揚坐にて足代の事なり。子う
まさらんやとは、多くの燕の中には、必ず子をうまぬといふことはあらむと
いふに同じ。

中納言喜び給ひて、をかしき事にもあるかな。もどもを知らざりけり。きようあるこ
とまうしたりとの給ひて、まめなるをのこども、二十人ばかりつかはして、あなゝひ
に、あげすゑられたり。

大意 中納言喜びて、如何にも興ある事なり。我は其の様な事も一向に心附か
ざりしとて、男ども二十人ばかりつかはして、あぐらにあげて坐はらせたりと
なり。

もどもは、もつどもの略言なり。きようは興あなゝひは足荷ひにて、今の足場と
いふもの、あぐらの事。あげすゑはあげてすわらしむるなり。

殿よりつかひ、ひまなくたまはせて、子安貝とりたるか。問はせ給ふ。つばくらめも、
人のあまたのぼり居たるにあぢて、巢にのぼりこず、かゝるよしの御返事を申しけ

れば、聞き給ひて、いかゞすべきとおぼしめしわづらふに、かのつかさの官人、くらつまろと申す翁、まうすやう、子安貝をどらむとおぼしめさば、たばかり申さむとて、御前にまゐりたれば、中納言、額をあはせてむかひ給へり。

大意 中納言より、直に子安貝取り得たるかと問はしめ給ひしに、男ども、あまり多人数の参りのぼりたる故、却りて燕は恐れて巢に入らず、従ひて取らむやうもなかりし返事、申しあげれば、中納言は、さらば如何にして得べしと思案にくれて居給ひしに、彼の大炊寮の官人、くらつまろと申す翁いで、子安貝とらむと思し召さば、私によき工夫あれば、直接に御相談申さんとて、殿の御前に参りたれば、中納言、其の下賤も厭はず、近く呼びよせて、相談せられたりとなり。かのつかさとは大炊寮の司をいへるなり。たばかり申さんは、思慮を廻らさむといふに同じ。額をあはすは、近寄りて相談するありさまをいひたるなり、くらつまろが申すやう、此の燕の子安貝は、あしくたばかりと、どらせ給ふなり。さては、えとらせ給はじ、あな、ひに、おどろくしく廿人のひとの、昇りて侍れば、あれてよりまうでこずなむ、せさせ給ふべきやうは、此のあな、ひをこぼちて、人皆しりぞ

きて、まめならむ人ひとり、を、あらこにのせすゑて、つなをかまへて、鳥の子うむ間に、網をつりあげさせて、ふと子安貝をどらせ給はむなむよかるべきと申す。中納言の給ふやう、いとよき事なりとて、おななひをこぼちて、人皆歸りまうできぬ。

大意 くらつまろ申すやう、子安貝は、はじめよりの御はからひが、悪しきゆゑ、其のやうな事にては、とてもどり給ふことはならむ、仰山にも二十人といふ人の上ぼりたる事なれば、燕は遠ざかりて來らぬ、眞に取り給ふはからひには、此の足揚を取り除け、多くの人を去り、只静かなる人一人を籠に坐わらせて、籠に網をつけ、燕の子を産む時に引きあげて、急に子安貝を取らせ給ふこそよけれといへば、中納言、いとよき事なりと申せば、男ども、其の足揚を毀ちて、皆歸り來ぬとなり。

たばかりは、はからひといふに同じ。おどろくは、驚々にて、仰山らしきこと、あれては荒れてにあらず、散り遠ざかるの意なり。あらこは、目のあらしき籠、ふとは、急に又は一寸といふがごとし。

中納言、くらつまろにのたまはく、燕はいかなる時にか、子をうむとしりて、人をばあ

ぐべきとの給ふ。くらつまる申すやう、つばくらめは、子をうむとする時は、尾をさへ
 げて、七たびめぐりてなむうみおとすめる。さて、七たびめぐらむ折、引きあげて、其の
 をり子安貝はとらせ給へと申す。

大意 中納言、燕はいかなる時子を生むことを知りて人をあぐべきやと問へ
 ば、くらつまる燕は子を生まむ前は尾をさしあげて、七回回りて生むといふこ
 となれば、其の時籠の綱を引きあげて子安貝をとらせ給へとなり。

中納言よろこび給ひて、萬の人にもしらせ給はで、ひそかに、つかさにいまして、をの
 こどものうちにまじりて、よるをひるになして、どらしめ給ふ。くらつ麻呂がかく申
 すをいどいたくよろこび給ひての給ふ。こゝにつかはるゝ人にもなきに、ねがひを
 かなふることのうれしさ、といひて、御衣ぬぎてかづけ給ひつ。さらに、よさり此のつ
 かさに、まうでこ、との給ひてつかはしつ。

大意 中納言喜び、密に男どもの中に交り、晝夜の差別なく、其事に従ふ。而して、
 くらつ鷹は、當家に奉公する人にもあらぬに、かく我がねがひをかなへ呉れる
 ことこのうれしさとして、衣を脱きて與へ、又更に夜に入つて、此のつかさに参り來

れ、とて家に歸し遣はしたりとなり。
 みそかはひそかの古言、つかさは大炊察なり、よるをひるになしては夜をも晝
 と同様といふに同じ。かく申すは、はからひをまうすをいふ、御衣ぬぎてかづ
 け給ひつは、賞として着たるどころの着物をきて與へしとなり。かづけは、肩に
 被くるにて、古は人に賞を與ふるに、衣を肩にかつかせやる例なりき。まうでこ
 は詣で來のこと。

日くれぬれば、かのつかさにおはして、見給ふに、まことにつばくらの巢つくれり。く
 らつまるが申すやうに、尾をさへげてめぐるに、あらこに人をのせてつりあげさせ
 て、つばくらめの巢に手さしいれさせてさぐるに、物もなしと申すに、中納言、あしく
 さぐればなきなりと、はらたちて、誰ればかりおぼえむに、とて、われのぼりて、さぐら
 むどのたまひて、こにのりて、つられのぼりて、うかひ給へるに、燕尾をさへげて、い
 たくめぐるにあはせて、手をさへげてさぐり給ふに、手にひらめなるものさはる。時
 に、われ物にぎりたり。今はあろしてよ翁しえたりとの給ひて、あつまりてとくあろ
 さんどて、綱をひきすくして、綱絶ゆる。すなはち、八島のかなへの上に、のけさまに落

大意 日暮れて後例の大炊寮に行きて見給ふに果して燕、巢を作り、しかも翁がいひたる如く尾をさしあげて回れる故、かねて用意しおける荒籠に男をのせて釣りあげ巢の中を探ぐらせつるに、何ものもなしといへば、中納言氣を焦ち、そは探りやうのあしければなり。さてこれは誰れに命じて取らせばよからんと思案すれど、格別適當のものも思ひ當らねば、我れみづからのぼりてさぐらむとて籠に入り、釣られ上げりて、燕の巢を窺ふに、燕尾をさしあげていたく回りあるより、手を入れ、其の回るまに、探りみるに、何物か扁たきもの手にさはりぬれば、我れ物を握りたり、直に下ろしてよ、翁よ、事しとげたりとよろこび呼びてければ、皆々あつまりて疾く下ろさんと狼狽して緩ぶべき綱を却りて強く引き過ぐしたれば、綱切れて中納言は同時に、下にありし釜の上に仰向に墜落したりとなり。

誰ればかりおぼえむにどてどは、誰れぐらゐに命してとらすることよからんと考ふれど、格別誰れがよからむとも思ひ當らねばといふがごとし。

めぐるにあはせては燕のめぐるにしたがひて手を入れさぐるをいふ。しえたりは爲得たりにて喜び叫びたる形容なり。

八島のかなへは、大炊寮に上古より、忌火底火の釜とて古き釜あり、それを八島のかなへといふ。八島とは籠所の異名なり。其の故は下野の國に室の八島といふところあり、煙の地中より出づるより名づくといふ。かまどは煙の出づるより又八島とは名づけたるなりと、のけざまは仰向のことなり。

人々あさましがりて、よりかへ奉れり。御目はしらめにてふし給へり。人々御口に水をすくひ入れ奉る。からうしていき出で給へるに、またかなへの上より、手とり足どりして、さげおろし奉る。

大意 人々驚きあきれて、介抱するに、白眼になり、氣絶して打臥し給へれば、人々口に水を入れなすれば、漸く辛うじて、息を吹きかへし正氣になり給ふ。由りて又、其の高き釜の上より、或は手をとり、或は足を持ちなどして、漸く地上に下ろしたりとなり。

あさましがるは驚きあきれることなり。

からうじて、御心ちいかがおぼさるゝと問へば、息のしたにて物は少し覺ゆれど、腰なむ動かれぬされど、子安貝をふとにぎりもたれば、うれしく覺ゆるなり。まづしそくさしてこ。此の貝かほ見むと、御ぐしもたげて、御手をひろげ給へるに、燕のまりおける、古くそを握りたまへるなりけり。

大意 漸くにして御心地は、いかゞと問へば、微かなる息の中に、少し物心はつきたれど、腰の部を打ちて少しも動かれず。然れども目的の子安貝を一寸握り持ちたれば、何より嬉し、早く手ともしを持ち來れ。此の子安貝を見んと、頭もちあけて其の握りたる手をひろげて見るに、こはいかに子安貝にはあらで、燕の古くしおける糞を握り給ひけりとなり。

志そくは紙燭にて手燈のことなり、即ち紙をよめて油にえめし火を燈し、蠟燭にも代用することあるものなり。

御ぐしは御頭のことをいふ。そは、もと、頭は櫛をさすところなるより出でたる詞なり。

まりおけるは出しおけるといふに同じ、神代紀、古事記などには、送糞の字を、く

そまると訓めり。

それを見給ひて、あなかひなのわざや、どの給ひけるよりぞ、思ふにたがふことをば、かひなしとはいひける。かひにもあらずと見給ひけるに、御心もたがひて、から櫃のふたに入れられ給ふべくもあらず。御腰はをれにけり。

大意 其の握りたる燕の糞を見給ひて、あゝかひなきわざやと、甚く歎き給へるより、後世、案に相違せる事をかひなしとはいふとて、貝無カヒナを加ねて歎かれたる文なり。さて握りたるは糞にて目的の子安貝にもあらずとて、又俄に御心地もたがひ、人に見られ給ふべくもあらず、腰は其のまゝ折れたりとなり。

から櫃のふたに入れられ云々は、見らるべくもあらずの意なり。古は物を見るに、總て物のふたの上に据え置きて見たり。故にかくはいへるなり。

中納言は、いはけたるわざしてやむことを、人にきかせじとし給ひけれど、それを病にて、いとよわくなり給ひにけり。

大意 中納言は心をさなきしわざして、かく病につきしことを人に聞かせまじとすれど、それを病としていとますく、衰弱したまひしとなり。

いはけたるわざとは兒童などの物のきゝわけもなきわざすることはいふ。貝をまどらざなりにけるよりも、人の聞きわらはん事を、日に添へて思ひ給ひければ、たゞに痛み死ぬるよりも、人聞き耻しくおぼえ給ふなりけり。

大意 かのづから明らかなり。たゞに痛み死ぬる云々は尋常の病死はせんかたもなけれど、この事にて死なむはいと外聞恥しどのいひなり。

これをかぐや姫聞きて、どぶらひにやる歌、

としを経て、浪立ちよらぬ住の江の

まつかひなしと、聞くはまことか。

とあるをよみてきかす。

大意 かぐや姫、中納言が、かく子安貝は得で、却りて大病に罹りたる由を聞き、て、久しく中納言のやみて、姫が家に立ちより來らぬを待てど、其のかひなしといふが、そはまことにや、さてはいとほしきことなりとて、病を吊ひ、且誂へたる子安貝の待遠きをいひて遣はしたるなり。

歌の上の句は、住の江に浪の立ちよらぬとて、中納言の久しく來らざるにあて

いひひたるなり。其の下の句は、松を待つに、かけて誂へたる貝を待てど、そのかひなしとて、うらには待つ子安貝のなきを、かけていひたるなり。とあるをよみてきかすとは上にいふ歌の云々と書きてあるを、傍なる人が中納言によみてきかすなり。

いとよわき心地に、頭もたげて、人に紙をもたせて、くるしき心地に、からうして書き給ふ。

かひはかく、有りけるものを、わびはて、死ぬるいのちを、すくひやはせぬ。

と書きはて、たえいり給ひぬ。

大意 中納言頭をもちあげ、苦痛を堪へ、人に紙を持たせて、漸くに返歌を認め、て、直に絶命したりとなり。

歌の意は、姫はかひなしとの給へど、かひはかくあるものを、斯くの如く難義して死ぬる我が命を、なせ助けては下されぬとなり。さて、其のかひといふは、物をすくひあぐる匙のことにて、今吊ひ來る姫が懸なる詞の中納言の爲めに、か

ひあるにかけ、すくひやはせぬは、悪の縁語にて、姫はなぜに此の命をすくひくれぬぞといふにかけたるなり。是れを聞き、かぐや姫、すこしあはれとおぼしけり。それよりなむ、すこしうれしきことをば、かひありとはいひける。

大意 かぐや姫これを聞いて少し不憫に思ひ給ふ。さきにすこしあはれをかけたるを中納言のうれしと思ひて死にけるより、うれしきことをばかひありといふ語は出来たりとなり。さて、此の中納言のことは難題かけられし五人の最後なれば、こゝにて文意大段落をなせり。以下は更に其の趣向を異にせるものと知るべし。

伊勢物語

伊勢物語は、竹取物語につぎて古きものなり。其の組織よりいへば彼れは、既にも云へりし如く、漢籍佛典中にありし説話どもを翻案し、且は我が邦人の口碑に傳はる昔語りをも取り合はして、組織したる構想的小説にして、此れは、基を外國に取らず、只和歌より趣向を案出して、人の一代記やうに綴り成したる一

種の物語なり。其の轉載より見れば、記事的又は記録的のものといはゞいふべし。而して其の記する事は、概むね男女間の情交を旨としたれば、動もすれば、社會の風儀に影響せんずるもの多し。一家團樂の間にありては讀むだに憚るべきこと少からず。嚴肅なる家庭には禁じて此の書を入れざるも宜なり。されど、其の文辭に至りては、極めて飽麗にして、而かも簡潔遒強なり。其の詞少うして、意餘れるところなど、中々にめでたく、恐らくは古文中稀に見るところならむ。されば此の書を繙かむものは、其の詞章の雅致なるを愛し、美文學上の標本としてこそ見ゆ。必ずしも、性質上の淫猥痴情的なるを見習ふべきにあらず。さて、此の物語の題號及び作者に就きて古來諸説紛々として、たしかにそれと定かならず。古來多くの説は伊勢の御の作なるゆゑ、伊勢物語といふといふにあり。然れども、その非は既に加茂眞淵翁も、伊勢物語古意に辨へり。即ち「此の物語は女の書けるさまならず、男の而も文に巧なる人のかけるにて、文の體いと老いたり。且、伊勢の御の若き程ならば、宇多天皇の御代にてあるべきを延喜承平、天曆の比の人の歌さへ載せたり云々。」又「伊勢が書かずば、伊勢物語とはい

はむてふもいかにぞや、おほよそ物語に竹取より初めて、落窪の君、うつば、光源氏の君、其外にも、皆、中に專とする人の上をこそ書の名とはしたれ、記者の名を題とせし物は見ず、其上、かゝる文は、記者の名をあらはすまじきをや」と、此説は、近世學者の多く従ふところとなりぬ。在原業平朝臣の作なりと傳ふるも、先輩既に説破して其非なるを云へり。要するに伊勢は僻事多く云ふと傳ふるより、此の文、男女の痴情的僻事のみ挙げたれば、やがて移して此の書の題號とはしたるならんか、又其の作者は、平田篤胤翁も云へりし如く、前に業平朝臣の歌集やうの書ありけむを基として、後人の他事をも取りまじへ、歌のはしがきをも敷衍潤飾し、且つ種々附會をもして一冊子となしたるものならむ。總て竹取物語の如く始終連続したるものならず、謂はゞ歌の序文のやゝ長きを、あまた集めて順序よく排列したる如きさまあり、其の後人は誰なるか知るべからず。此の書の記事に於ける是非はともかく、詞章の優に美なるより、さすがに世のもてはやすところとなり、正文も、註釋文もいと多く世に出で來ぬ、其中、正文には、六條宮御撰といふ、眞字伊勢物語、後小松天皇の御宸翰なる、伊勢物語朱雀

院の塗籠本、屋代弘賢の、参考伊勢物語、其他二三のものあり、註釋文に至りては、殆んど數十の多きありて、枚舉に追あらず、就中、圓珠庵契沖の、勢語臆斷、五冊なると、加茂眞淵の、伊勢物語古意、六冊なると、藤井高尙の、伊勢物語新釋、六冊なるとを合せて、伊勢物語註釋中のよろしきものと稱す。なほ新釋は最も後に出でたれば、よく諸註の粹華を採萃し、且新説をも加へたれば、最も後學參考には便ならんか。

本書は全篇百二十五段より成れど、こゝには第八段なる東下りの條と六十六段なる生駒山を見たる條、第七十七段なる右大將の奉られる石に歌そへたる條と、第八十二段なる惟喬親王を訪ひ奉る條との四段を抜きて講すべし。

東下りの條

昔、男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京には居らじ、東の方に、住むべき所、求めにとて往きけり。

大意 ある時一人の男ありしが、其の人、自身を世に益なきものゝ如く思ひて、京の都には居住まず、東の方へ住居を求めんとて出で行きしとなり。

昔男ありけりは本書毎段の冒頭に掲ぐる主語なり。此の東下りの條は本書の八段目なるが、又例によりて、かくいへり、さて昔とは、闕疑抄に『太古をいひ、又近古をいひ、遠近によらず、過ぎぬるを昔といふなり。今日は明日の昔、昨日は今日の昔になる。今日のことをいふべし。云々』とあるが如く必ずしも古きこととのみ思ふべからず。後世今は昔などいふも此の文勢なることを知るべし。こゝに、昔男とのみいひて、其の時代其人名を明示せざるは、實をも虚の如くいひなせる古き物語の體なり。

信濃國淺間の嶽に、烟の立つを見て

信濃なる、あさまのたけに、たつけふり

をちかたびとの見やはどがめぬ。

大意 東の方に往きける男道すがら信濃の國にある淺間がたけに煙の立つを見て歌を讀みたりとなり。歌の意は、信濃にある淺間嶽の煙をば遠方の人はいかに見咎むるとの心なり。をちかたは遠方なり。

もとより友とする人、一人二人して、諸共に往きけり。道知れる人もなくて、感ひ行き

けり。

大意 おのづから明らかなり。もとよりは上の段に於て友とする人一人ふたりといへるによりてかけり。それら、皆道知らざりし故、感ひ往きけりとなり。三河の國、八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といふことは、水の珠手に流れ別れて、木、八つ渡せるによりなん、八橋とはいへる。

大意 おのづから明らかなり。八橋の説明もまた不足なきがごとし。その澤の邊の木蔭にあり居て、がれいひくひけり。その澤にかきつばたいとあもしろく咲きたり。それを見てある人のいはく、かきつばたい五文字を句の上に据ゑて旅の心をよめど、いひければよめる。

大意 其の八橋を架せる澤の邊の木蔭に、馬より下りて、餉かき即ち今の辨當を食ひたり。其の澤に多くのかきつばた、美事に咲きたれば、其の五文字入れて歌よめど、傍人のすゝむとなり。その歌は次のごとし。
 からころも、きつくなれにし、つましあれば、
 はるくきぬる、たびをしぞおもふ。

歌意 普通の旅行なりとも悲しきに、况して思ふ我が妻を残り置きて、都を出でたれば、一しほかなしく思ふとなり。きつゝなれ、つまし等は皆ころもの縁語より、おもしろし。かきつばたの五文字は黒印の字なること知るべし。

とよめりければ、皆人、かれいひの上に、なみだ落してほどびにけり。

大意 此のかなしき歌聞きて、皆人、悲哀を催はし。かれいひの上に涙落したれば、餉爲めにほどびたりとなり。

ほどぶとは堅きものゝやわらかになる事にて、今俗にいふフヤケルことなり。ゆきくゝて、駿河の國に至りぬ。宇津の山に至りて、我がいらんとする道は、いと暗う細きに、葛葛はしげりて、物心細く、すゝろなるめを見ることゝ思ふに、修行者逢ひたり。

大意 それより進みて、駿河の國に到着し、宇都の山に入らんとして見れば、其いと暗くしてまた狹隘なるに、葛かつらの茂りたるさへあれば、物凄く、思ひもかけぬからき目見る事よと思ふ折しも、はからず一人の修行者に出あひたりとなり。

かゝる道には、いかでかおはするといふに、見れば見し人なりけり。京にその人の許にどて、ふみかきてつく。

大意 其の修行者は斯かる所には如何にしてか居給ふといふを見れば、これは如何に、兼て京にて見知りし人なり。よりにて京にある思ふ人の許へどて文書きて托すとたり。つくはことつくなり。其の文は次の歌なり。

駿河なる、うつゝの山邊の、うつゝにも

夢にも人に逢はぬなりけり。

歌意 旅行する身には、京なる思ふ人の、夢にも見えぬによりて、其のつれなきを恨みいひたることばなり。蓋し昔は人の思ふ心の通ひ來りて夢に見るものどしたりしなり。

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降りたり。

時しらぬ、山は富士の嶺、いつとてか

かのこまだらに、雪のふるらん、

大意 五月のつごもりに富士の山を見れば、雪いと白う降りたるゆゑ、時も知

らぬ富士の嶺なるかな此の五月の末といふ時になるをいつと思つて、かく雪の白う降ることならんとなり。

かのこまだらは此處彼處に鹿の毛色の如く、白く斑なるをいふ。此の歌の題には雪いと白うとありて、こゝにかのこまだらといふはいかゞしけれど、こは題よりも細かに讀みたる歌なりと思ひ知るべし。古例も少からざることなり。

その山は、こゝに譬へば、比叡の山を、二十ばかり重ぬあげたらんほどして、なりは、鹽尻の様になんありける。

大意 其の富士の山は、京近邊に譬へていはゞ、比叡山を二十ばかり重ぬあげたる高さにて、丁度潮汲む蟹等が潮水をかけたる砂を日に曝さん爲に積みあげたる山の様なりとなり。

なほ、ゆきくゝて、武藏の國と下總の國との中に、いと大なる河あり。隅田川といふ。その河の邊に群れ居て思ひやれば、限りなく、遠くも來にけるかなどわびあへるに渡守はや船に乗れ日暮れなむといふに。

大意 次第に進みて、武藏下總の間なる隅田川の邊りに來て群りて乗り合を

待ち合しつゝ、故郷なる京を思ひやれば、存外にも遠く來れるものかななど、いろくゞと悲しきことなど、いひあへるに、やがて乗り合も満ちたれば、舟子はいざ乗り給へ、日も將に暮れんとするといふゆゑとなり。

わが思ふ人は、ありやなしやと

と詠めりければ、船こぞりて泣きにけり。

大意 一同舟子に促がされて船に乗らんとするにつれの人々皆物わびしく心細うなりて京に戀しき人なきにもあらず、折しも京にて日比見覺えぬ鳥の水上にありて、魚をあさり食ふを見て、これは何といふ鳥ぞと問へば、舟子答へてこれは都鳥なりといふを聞きて、都といふがなつかしくて一首の歌を詠みたりとなり。歌の意は鳥に向ひて其の方都鳥といふ名の如くに、定めて都の事

を知りつらんには、いざことを尋ねん。即ち我が思ひこがるゝ京の人は恙なく
てありや否やとてとなり。此の歌よみければ、船中のもの大に同情を催はして
皆泣きたりとなり。

名にし負ははとは、名に負かず内包の意あれば、即ち其の名の如く實あらばど
いはんがごとし。いふ心は、都鳥といふと同時に都の事を知らばといふに同じ。
都鳥は一説に鷓鴣なりともいひ、又一種の鳥なりともいふ。確なること知りがた
し。

生駒山を見たる條

昔をどこ、逍遙しに思ふどちかいつらねて、和泉の國へきさらぎばかりにいきけり。

大意 ちのづから明かなり、思ふどちは親しき友だちなり。かいつらねては、か
きつらねての音便、かいは只添辭、きさらぎは二月のことなり。

今もなほ陰曆にてはいふことなり。

河内の國生駒山を見れば、曇りみ晴れみ、立ちゐる雲やまず、あしたより曇りて、晝晴
れたり、雪いと白う、こずゑにふりたり。

大意 和泉の國へ行く途中にて河内の國なる生駒山を見れば、晴曇定めなく
朝より曇りて、晝晴れ、いつの間にか、雪白くふりて、木末にかゝりたりとなり。
曇りみ晴れみは、俗にいふ曇りてみたり晴れてみたりなり。

それを見て、彼のゆく人の中に、唯ひとりよみける。

きのふ、けふ、雲のたちまひ、かくさふは、

花のはやしを、うしとなりけり。

大意 生駒山の景色、雲の有様等を見て、多き連れ合中の一人、此の歌をよみた
りとなり。

歌の意は、昨今黒雲の立ちまひて、頻りに生駒山を蔽ひ隠くさんとせしは、彼の
花の林の美事なるを嫉みてなりけるよとなり。

かくさふは、隠くすの延音なれば、只隠くすといふと異なることなし。

花の林とは、雪白くふりて、木末にかゝりたるを花にとりなして、かくはいひた
るなり。

うしは、憂しなり、嫉ましう思ひてのこゝろなり。雪のいと面白きは、千方縁の開

きて、花の林の如きを、昨今の雲はこの美景を吾人に見せむと思ひたる嫉妬の
心ありけるなり、只雲の晴れて一しほをもしろきところ、只これをこそをしみ
つらめとよみたるなり。

惟喬親王を訪ひ奉る條

むかし水無瀬にかよひ給ひし惟喬の親王、例のかりしにおはします。とも、右馬の
かみなるおきな、つかうまつれり。

大意 水無瀬といふところに通ひ給ひし惟喬親王、例の如く獵りしにおはし

ますその御供に右馬の頭なる翁、即ち業平朝臣従ひ仕へ奉れりとなり。

日ごろへて宮に歸り給ひけり、御あくりして、とくいなんと思ふに、おほみきたまひ、
祿たまはんとて、つかはさやりけり。この右馬の頭、心もとながりて、

枕とて、くさひきむすぶこともせじ。

秋の夜とだにたのまれなくに

とよみけり

大意 や、日數たちて、親王、京の都に歸り給ひける時、此の翁、御供して、都まで

送りまゐらせ、とく歸り來んと思ひしに、親王は御供してまゐりたるを喜びた
まひ、かつは御別申うして歸り來るを本意なく思し召して、頻りに引きとめ
御酒や引出物など、下し賜はんとて、暇をつかはさず、その時此の馬の頭、心おぼ

つかなく思ふほどに、此の歌、よみたりとなり。

歌の意は、その詞足らずして意餘れる故にか、古來いろ／＼に解釋せられたれ
ど、要するに秋の夜の如く長き夜ならで、短かきこのごろの夜なれば、枕もどら
ずして仕へ明かし申さんとの意をよめるなり。蓋し親王に出家遁世の御心あ
りもやせんと疑へる跡あるゆゑ、長くは仕へられまじと思ひて、かくはよみた
るものならむ。されば加茂真淵の「伊勢物語古意」中にも云へり、即ち「此の大兄の
皇子(惟喬親王)を措きて、四の皇子(惟仁親王)を太子に立てられしかば、さる事、さ
して恨み給はぬ御心とはいへど、なか、世の中物うくおぼさしらん。されば、さ
る御けしきありて、斯く殊更に名残りをしげにしたまふを、馬の頭の疑ひて、出
家し給はんにや」と思ふ心もとなきに、今夜はどけて、寝ぬべからず。未ながく、斯
くて見奉らん事とも頼まれねばてふ意を含みて、表は、春のみじか夜なれば枕

もどらで仕うまつり明してんどよめるなり、短き事の裏にて秋の夜とだにどはいへり』

草ひきむすぶ事もせじとは、枕をとることもせじといふことを、旅のことなれば、草枕に思ひ寄せて、いひたる詞なり、即ち枕を取ることもせずして明かさんどの心なり。

秋の夜とだに頼まれなくにとは、秋の長夜ならむには、悠々と枕につくべき時間もありなんに、春の短夜はしか頼まれもせぬにどの詞、即ち長く仕へまつらるべしと頼まれもせぬ此の夜を枕になどつく暇あるべきかはの意をいひたるなりけり。

心もどながるはいそがはしきところにも用ふれど、こゝにては、重に、おぼつなく思ふ意に用ひたるなり。

時は、やよひのつごもりなりけり、親王おほどのごもらで、あかし給ひてけり、かくしつゝ、まうでつかうまつりけるを、思ひの外に、みぐしおろさせ給ひて小野といふところに、住み給ひけり。

大意 時恰も彌生の晦日なりき、親王も寝給はで明し給ひけり、右馬の頭は其の後もかくの如くに時々伺候して仕へ申しけるを、意外にも御髪下ろさせ出家して小野といふところに住み給ひきとなり、

彌生は三月のこと、大どのごもらでは大殿に籠るの意にてこゝは寝給はでといはむがごとし、蓋し酒など飲み明かしてなり、世を忘れんとし給ふ跡見るべし、まうでは詣にて伺候することなり、

思ひの外には、鬮疑抄に下の如く云へり、即ち「惟喬は文徳第一の御子なれば儲君になり給ふべしと、世こぞりて思ひしに、清和にひきたがへられ給へること、を、思ひの外とはいふなり。」と或はしからん、

惟喬親王の出家し給ひしは貞觀十四年七月にて、御年二十九の時とぞ聞えし、小野といふところは、山城の國愛宕郡中なる一地名なりといふ、

むつきに、をがみたてまつらんとて、小野にまうでたるに、ひえ山のふもとなれば雪いとたかし、強ひて、御室にまうでて、をがみまつるに、つれづれといと物かなしくて、おはしましければ、やゝ久しく、さぶらひて、古の事など思ひ出で、聞こえけり、

大意 明くる年の正月、右馬の頭、例のごとく親王にま見え奉らんとて、小野に参りたるに、其の邊りは名高き比叡山の麓なれば、折ふし、雪高く積りたるを、推して親王の御所なる御室に到り、ま見え奉るに、いつもながら親王は、淋しく何となく悲しげにおはしますゆゑ、やゝ久しく御側に侍り奉りて、過去のごとも思ひ出づるまゝに御話し申し奉りきとなり。

むつきは正月の異名なり、御室とは貴族の出家して修行し給ふ御所をいひ來れり。
つれづれといと物がなしくの詞、最もかなしく、今より追想するもあはれいはいんかたなし。當時此の親王の御境界、業平朝臣の感情、いかゞありしか、思ひやるに餘りあり。
古への事などとは彼の水無瀬に居給ひて右馬の頭も度々伺候したることより、今は引かへて山居して雪中にひきこもりおはします等の事など、數々思ひつけたるなるべし。

實に此の一節の如きは語句簡にして悲哀いと深し、右馬の頭が忠實の胸の懐

舊の涙に濕ひしことさも見ることがとし。
さても、さぶらひてしがなとおもへど、おほやけごともありければ、えさぶらはで、夕暮にかへるとて、

忘れては、夢かどぞおもふ、思ひきや。

雪ふみ分けて、君を見んとは、

とてなむなくく來にける

大意 此のまゝにして、幾久しく仕へ侍りたくは思へど、右馬の頭も公事を荷ひて身も心に任かせねば、残念ながらも長く侍らひがたく、日暮れに歸るとて此の歌よみてなくく歸り來りたりとなり。

おほやけごとは業平朝臣の清和天皇へ仕へ奉れるをいひたるなり。
歌の意は現世にあることを忘れては實に夢かと思ふ、決して雪ふみわけてかゝる御室にて見奉らんことなどは思ひもそめざりきとなり。いふ心は、既にもしいへりし如く、天皇の御位につき、天下をもしろしめすべき儲君の、此の如く雪中に閑居して、しかも世を日に物うく過ぐし給ふことあらんとは思はざりき

となり、

(一六二)

惟喬親王の御返歌(本書にはなけれど)とて、左の歌を申し傳へたり。即ち「夢かども里の名のみや残るらん。雪も跡なきをのゝかよひち」夢かども何か思はむ。うき世をば、そむかざりけん、ほどぞくやしき。」と、關疑抄には此の返歌を、此の物語中に入れざりしは、業平の歌別けてあはれ深き故にてさしおくかどあり。

實に此の一段の悲哀に堪へざることは、古人も既に云へり。「堯孝法印は此の段を讀みては必ず落涙せしとなり。片岡近江の守が堯孝をなかせんとては、わざと此の段をよみたりといひ傳へたり」と御物語なり。」と關疑抄に見ゆ。

右大將の奉れる石に歌そへたる條

昔たかい子と申す女御、おはしましけり。失せ給ひて七七日のみわざ、安祥寺にてしけり。右大將藤原の常行といふ人、いまそかりけり。

大意 たかい子と云ふ女御の逝去し給ひて四十九日の法事を、安祥寺に於て營みし時、右大將藤原の常行といふ人、行きて列席したりとなり。

みわざは法事のことを、ねんごろにいひたる言葉、いまそがりは、居るといふこ

とを、いと敬みていひたる詞なり。

其の御わざにまうで給ひて、かへさに、山科の禪師の親王おはします。其の山科の宮に、瀧落し水奔らせなどして、おもしろく作られたるに、詣で給ひて、年ごろよそにはつかうまつれど、近くはいまだ仕うまつらす。今宵は、こゝに候はむと申し給ふ。

大意 藤原常行右大將、たかい子女御の法事より歸りの途中、山科法親王の宮に寄りて、法親王にいふやう、年久しく、よそながらには仕へ奉れど、未だ近く御側には仕へ奉ること能はず。残念に思ひしが、今宵は幸に御側に侍りて仕へまつらんとなり。

かへさには歸るさにといふに異らず、瀧落し水奔らせは庭前の仕構へなり。親王喜び給ひて、よるのおましの設けさせ給ふ、さるに、此の大將出で、人にたばかり給ふやう、宮仕への始めに、唯なほやは有るべき。三條のおほみゆきせし時、紀の國の千里の濱にありけるいと面白き石たてまつれりき。おほみゆきの後、奉れりしかば、ある人の御曹司の前の溝にすゑたりしを、島このみ給ふ君なり。此石を奉らむとの給ひて、御隨身舍人して取りにつかはす。

(一六三)

大意 法親王右大將の今宵宿りて、御側に仕へ侍らんといふを喜び給ひて、夜の御坐など設け調へ給ふ。然るに彼の大將は出で、人に相談しけるやう、宮仕への最初に只黙して止むべきにあらねば、さきに三條の大御幸せし時、紀州千里の濱にありきといふ見事なる石奉りしを、其の甲斐なくて空しく或る曹司の前の溝に居えたりしに、此の親王は庭好み給へば此の石を奉らんとて、自身の隨身どもを石取りに遣はしたりとなり。
よるのおましは、夜の御坐のことなり。なほやはやむべきは、俗にいふ、唯では居られぬの意なり。

三條は西三條良相公、即ち父君の邸、島このみは、泉水築山等を好み給ふといふに同じ。即ち庭好みのことなりと知るべし。

幾ばくもなく持て來ぬ。此の石、聞きしより、見るはまされり。これをたゞに奉らば、すゝろなるべしとて、人々にうたよませ給ふ。

大意 やがて其の石を持參しぬ。此の石はもと話よりは見榮えあり。右大將は之れを此のまゝ奉るも興なきわざなるべしとて、人々に歌をよませ、さて、其の

歌をつけて奉らんとすとなり。
すゝろは、漫にて不興のこゝろなり。
右の馬の頭なりける人なん、青き苔をきざみて、詩繪のかたに、この歌をつけて奉りける。

あかねども、岩にぞかふる、色見えぬ

こゝろを見せんよしのなければ、

とよめりけり、

大意 右の馬の頭、青き苔を刻みて其の石に、詩繪の如くに讀みし歌をつけて奉りきとなり。

歌の意は、不足にはあれど、岩に代へ表はして色をば見せ奉るよ、これまでは親王を思ふことの切なる心も見せ奉るべきよすがもなかりきとなり。なほ此の歌は、下の如く上下の句を轉倒して解すれば、容易に會得するを得べし。即ち、予が平素親王を思ひ奉る心は、よほど切なれども、其の心は色も香もなきものなれば、見せ奉らんよすがもなかりければ、不足ながら、今、この岩に代へ心を表は

して見せ奉るとなり、
右の馬の頭は、業平朝臣のことなり、
あかねどもは、飽かねどもにて、不足ながらといはんがごとし、岩にぞ代ふるは、
岩に我が心を代へ表はせるの意なり。

源氏物語

源氏物語は、古は更なり、今も我が邦文壇の第一位に置かれ、國文學の華として
愛賞せらる。今如何に其の文辭のめでたきかといふ一端を紹介せむに、紫家七
論中に批評せる詞あり、即ち『此の物語のうち、和歌并びに、詞どもに、萬葉、古今、伊
勢物語、宇津保、竹取などの古跡を離れて、しかもおほどかに、易らかに、優しく、凡
そ、我が國の風流を盡したれば、見る人をして、倦むことを知らざらしむ。誠に日
本文の上なきものなり。全篇は、富貴温潤の氣象にして、宮様の文章なれども、中
には、山林出世あり、市井、田家あり、貧困、哀傷あり、園情風景は、卷毎に見えて、情を
寫し、景を語ること、まのあたり其の人にむかひ、其の所に遊ぶがごとし。全體は
傳にして、又、おのづから序の轉あり、跋あり、記あり、書ありて、諸跡備はり、……

論破あり、論承あり、論腹あり、論尾あり、塵より細に入り、俗より雅に趨き、繁より
簡に歸し、波瀾、頓挫、照應、伏案などいふ、もろこしの文法、おのづから具はれり、其
の氣脈は、悠暢として、寛裕に、其の文勢は、圓活にして、婉曲なり、之れを漢文にて
見ば、史記、莊子、韓、柳、歐、蘇にひとしかるべしと、『最も肯綮を得たる評論のごとし。
既に之れを以て公平の批評なりとせば、本書の外延、即ち轉載の如何に調ひ、如
何にめでたきかは知るに足らむ、さらば其内包、即ち本書の性質、趣向はいか
んといふに、光源氏の君を主人と置きて、これに四圍より種々の原象を纏綿して、
人情風俗上の事を論叙したる一大小説なることは、世既に熟知するところな
り、今こゝに委しくいふを須たず、然るに本書の成れる由來に就きては、案外に
異説あり、或は著者が世の風俗に慨する所ありて、勸善の爲め、懲惡の爲めに物
したりといひ、或は諷刺的事實小説なりといひ、其外何にかと牽強附會して、其
の由來を説明すれども、いつれもひがごととなり、本居翁の『大かた物語は、世の中
にありとある善き事、惡しき事、珍らしき事、をかしき事、面白き事、哀れなる事、の
さま／＼をかきあらはして、其の様を繪にも書き交へなどして、徒然なる程の

玩びにし、又は心の結ばれて、物思はしき折などの、慰めにもし、世の中のある様を心得て物の哀れをも知るものなり。』といはれしこそ、貴き説明なれ。實にも小説は其の目的、専ら人の感情に訴ふること、古今も動かす、東西も異ならず、讀者が感情の上にかも判断悟了するところあらば、それは勸善とも懲惡ともなり、亦諷刺の効力をもあらはすべし。最初より、しかとばかり、附會するは正しき論にはあらざらむ。されば本書の如きも、物の哀れのいと切なる戀情を主として寫し出でたれば、淫猥、讀むに堪へざる記事もなきにあらざ。蓋しこは當時上下の風情の此の小説上に寫し出だされたるものなりといふに過ぎずして、故らに風俗紊亂の罪を作りたるものとは見るべからざるなり。さて、此の源氏物語の紫式部の手に成れることは、誰れ知らぬものもなからん。然れども、其の人物を評するに於ては、往々毀譽、偏に過ぐるごとあり。或は、此の小説の淫猥なる記事をもてるより、著者は淫奔なる女子なりといひ、又は不貞の女性などいふ。そは輕忽の評にして、人を誣ひ世を誤るものなり。今一言、その人となり、及び經歷の一斑を紹介せんに、其の傳の委はしき事はわからざれ

ど、紫家七論によれば、式部は左衛門、權佐、藤原、宣孝朝臣に嫁して、大貳二位、狹衣物語の作者なりといふ。と辨、局とを生みて、後、長保三年四月に、夫宣孝みまかりしかば、四五年ばかり寡居してありしが、寛弘二三年の比より、上東門院へ宮仕へに出でられし様なりと記し、又此の物語、作られたるは、其寡居の程の事なる由、並びに万壽二年の比までながらへて上東門院へ仕へたる由も委しく記せり。元來式部は、夫宣孝に別れてよりは、其が菩提の爲に尼にならんの本意なりしが、さては二人の女子の生先も覺束なくて、二女の生長を待ちつゝ、心ならずも上東門院に宮仕へしたりしものなり。其の他式部が人となりは、其の歌にも文にもあらはれて、婦徳高き貞操のものなりしことは、誣ふべくもあらず。かばかり才學あるも人に誇らず、寧ろ深く其の能を隠して、人に謙りたる等は、紫式部日記等に明らかなり。誰れか紫式部を評して淫奔、不貞の婦女などいふものぞ、彼の枕草紙を物したる清少納言と比すべからず。同じく超世的文學の才能ある清少納言の紫式部に及ばぬところは、蓋し此の女徳の點にあり。源氏物語の註釋にては、萩原廣道の物したる「源氏物語評釋」及、北村季吟の著は

したる源氏湖月抄を以て第一とす。讀者此の二書によりて研究せば蓋し不足あらざらむ。

こゝにても該二書を参考して、歷代文學に採載したる前二條、即ち桐壺の更衣のなきあとの條と、何某院の變化の條とを講ずることゝすべし。

桐壺の更衣のなきあとの條

野分たちて俄に膚寒き夕暮のほど、常よりもおぼしいづること多くて、鞞負の命婦といふをつかはす。

大意 御門は更衣の失せて後は、御悲み遣らん方なく、唯、涙にのみ咽び給へば、此の有様を見奉る人の袖も、げに露けき秋なり。雨の朝、風の夕には、必ず親しき女房を故更衣の里へつかはし給ひて、若宮の消息、及、北の方の起居を問はせ給へり。さればある日秋風立ちて俄に肌寒く覺ゆる夕、常よりも一しほ戀しく思し召して、一人の命婦を遣はし給ふとなり。

桐壺 は御殿中なる一局の名、即、此の巻にいへる更衣の住みたりし所なれば、やがて此の巻を桐壺といふ。

更衣 はもと、天子の御衣をめし更へ給ふ女官の名なり。更衣の資格は女御の次、女御といふは皇后の次に立つ女官なり。

野分 は秋季に至りて強く吹く風のこと、たちては野分の風の吹き立つこと。膚寒き夕暮のほど は野分の風吹き立ち、衣を通して、俄に肌に寒冷を覺ゆるにて、俄に秋風立ちて、肌寒く覺ゆる夕暮なれば、一しほ人戀しく思し召すことをいひあらはしたるところなり。

鞞負 は、ゆげひと讀み、ゆぎをよふ人、即ち衛門の官なり。鞞負の官人の女を、父の官を呼びてしかいふ也。

命婦 は、位ある女官をいふ。而して五位の女官を内命婦といひ、又五位以上の人の妻を外命婦といふ。評釋に今の世に内侍の外織物を着せぬ中臈を共に命婦と號せりとあり。

夕月夜のをかしきほどに、いだしたてさせ給ひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせ給ひしに、こゝろことなる物のねをかきならし、はかなくきこえ出づる言の葉も、人よりはことなりしけはいかたちの、おもかげにつと

そひておぼさるゝも、やみのうつゝには、なほ劣りけり。

大意 夕方の月夜のいと面白きに、命婦を故更衣をかたへ出しやりて、其の儘御門は、いどり、欄干に倚り、あちこちの景色を眺め給ふに、昔かゝる折に、故更衣の管絃など巧にかきならして、和歌さへさも面白く詠みしおもかげのツト見え給ふも、げに夢のこゝちせらるゝとなり。

夕月夜 は、ゆぶづくよと讀みて、夕方の月夜、こゝには八月十日ごろのさまをいへるものなり。

やがてながめおはします は、命婦を出し遣り給ひても、なほそのまゝ打ながめおはしますとなり、物戀しき心のさま寫し得たる詞なり。

かうやうのをり は、かくやうの音便にて、かゝる夕月夜のめでたくおはれなる時はの意、昔更衣の居たりし時のことなり。

こゝろことなる物のねは、特別に巧妙なる管絃の音をいへるなり。

はかなく聞え出づる言の葉 は、ツレ何となく詠み出づる和歌といふに同じ。

けはひ は、物の氣にて、心に其様子の見え聞こえ、又は感ぜらるゝをいふなり。

おもかげ は、面影なり、俯ともかく、即かほのかたち、又は何となく其の物のほのかに、そこに見ゆるやうに覺ゆるをいふ。

やみのうつゝ は、古歌の「うばたまの、やみのうつゝは、さだかなる、夢にいくらも、まさらざりけり」といへるを引用し、こゝには、なほその歌の眞の如く夢にも劣る境遇ぞとなり。

命婦かしこにまかでつきて、かどひきいるゝより、けはひおはれなり、やもめずみなれど、人ひとりの御かしづきに、どかくつくろひたてゝ、めやすきほどにて、すぐし給ひつるを、やみにくれて、ふししづみ給へるほどに、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月かげばかりぞ、やへむぐらにも障らずさしいりたる。

大意 御使なる命婦は彼の故更衣の里に到りて、其あたりを見るに物の景色いと凄まじし、北の方は後家住みなれど、始めのほどは、故更衣の爲にとて、普通可なりの造作にて、見苦しからぬ躰裁なりしを、更衣世を去りて後は、母は實に親心のやみぢに暮れまどひて、庭に雜草もあひしげり、ことに、野分に一層荒れまさりたり。たゞ月影のみ八重葎にもさはらずさしいりていとあはれなりと

り。
かどひきいるゝより は乗り來たる車を門よりひきいるゝのいひなり。
やもめずみ は寡居をいふ。此の母君の夫中納言殿といふは、早く世を去りし
由なり。

かしづき はもと頭衝にて頭を地につきて敬ふ意より出でたるなるが、限り
ては大切に養育することにいへり。こゝにもそのとに用ひたるなり。

どかくつくろひたてゝ は、何かと修覆を加へてと謂ふに同じ。

めやすきほどにて は、見ぐるしからぬ位にといふと異ならず。

やみにくくて は、古歌の「人のおやのこゝろは、やみにあらぬども、子を思ふみ
ちに、まどひぬるかな」といへる詞をほのめかしていひたるものなり。即母の故
更衣を悲み慕へる歎きにくれまどひて臥し沈みたるを、一しほふかく形容し
たるなり。

草も高くなり は住居をとりつくろはず、且人の出入のまれなるさまをいひ
たるものなり。

やへむぐらにもさはらず 古歌の「どふ人も、なき宿なれど、くる春は、やへむぐ
らにも、さはらざりけり」とあるを、春と月とをかへて引用したるものなりと、草
高ければ人の入るには障れども、人ならぬ月の入るには障らずとなり。

月ばかりは障らず入るといふさびしさを形容せし詞いとおもしろし。

南おもてにあらして、母君とみに、え物の給はず
大意 命婦車より南面に下りて更衣の母に對面するには、はじめのほどは、互に
顔見合はすばかりにて、母君、急には、詞も口に出でざりしとなり、なつかしく、且
悲しき情、思ふべし。

南面とは家の正面をいふ。そは普通の家は皆南向に作りたるより、家の正面の
事をかくいふ。

今までとまり侍るが、いと憂きをかゝる御使の、よもぎふの露分け入り給ふにつけ
ても、いと耻しうなん

大意 今日まで生き残りしさへ憂きことなるに、剩へ貴きあたりよりありが
たき御使の此のむさくるしき家に、分け入り給ふにつけても、尙ほ耻しさまさ

るとなり、これ母の詞なり。

よもぎふは、蓬生にて、むさくるしきところと卑下していふ詞なり。

とて、げに堪ふまじくない給ふ。

大意　おのづから明らかなりない給ふはなき給ふの音便なり。

参りては、いと心苦しう、心肝ココロもつくるやうに、なんと内侍のすけの奏し給ひしと、物思ひたまへ知らぬ、こゝちにも、げにこそいとしのびがたう侍りけれ、とて、やゝためらひておほせごと傳へ聞こゆ。

國　文　學

大意　曩に内侍のすけなる女房を御使に遣はされしとき歸りまゐりて、人傳にきゝしよりは一入こゝろや、きもゝつぶるゝばかり悲しうこそ覺ゆれと奏上したりしを、只今我が身参りて見奉れば何も知らぬ心地にもげに堪へがたう覺ゆと命婦のいへる詞なり。

いと心苦しう心肝もつくるやうに、なんは、さきに御使にたちたる内侍のすけの詞なるを先づ知らざるべからず。

奏し　は天皇へ申上るとなり、物思ひ給へ知らぬとは物思ひ知り奉らぬとい

ふに同じ給へとは今の詞に奉るといふべき所につかふ、當時の敬語なり、やゝためらひて　は、しばらく猶豫してといはんがごとし。

おほせごと聞こゆ　は、御門の仰を傳へ云ふことなり、その仰言は次にあり。

しばしは夢かとのみたどられしを、やう／＼思ひしづまるにしも、覺むべきかたなく、堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひ合はすべき人だになきを、しのびては参り給ひなんや、わかみやのいとおぼつかなく、露けき中に、すべし給ふも、心苦しうおぼさるゝを、とく参り給へなど、はか／＼しうものたまはせやらす、こせかへらせ給ひつゝ、且は人も心よわく見奉るならんとおぼしつゝ、まぬにしもあらぬ、御けしきの心苦しさにうけたまはりもはてぬやうにて、なん、まかり侍りぬる。とて御文たてまつる。

大意　あまりのことに暫時は、夢かど疑はれしを、やう／＼思ひ鎮まるにも、尙醒むる方なく、忍びかたきは、如何にすべきと問合すべき人さへなければ、それを推量して、母人参内あるべし、若宮の露けき所に在はするも亦心若しく覺ゆるほどに、疾く参内あれよ云々との仰言ありけれど、御門は、そも明らかなには宣ひ

國　文　學

兼て痛く涙に咽せかへり給ひつゝ、且は人の心に如何に見下けられんどの御様子なりければ、猶ほ承り残すやうにて参りたりと口上に述べて御文をたてまつりたりとなり。

露けき中 折から秋なれば露けきといへるが、その意は涙がちなる憂の中といふことなり。

はがくしう はたしかなることをいへり、こゝにては明かにいひてもきこゆるなり。

月も見え侍らぬに、かくかしこきおほせごとを光にてなんどて見給ふ。

大意 母、御文を拜受して目も見えぬに、忝き仰言なれば九重の光にて見奉らんとて見給となり。御文の詞は次にあり。

ほどへば、少しうちまざるゝこともやと、待ち過ぐす月日にそへて、いとしのびがたきは、わりなきわざになん、いはけなき人も、いかにと思ひやりつゝ、もろどもにはぐまぬおほつかなさを、今は猶昔の形見になづらへて、ものし給へなど細かに書かせ給へり。

宮城野の露ふきむすぶ風の音に、

こはぎがもとを、思ひこそすれ。

とあれば、え見給ひはてず。

ほどへばより、なずらへてものし給へまでは御文の詞なり。これを俗譯すれば月日移りゆかば、せめては思ひもうすらぐらんと、過ぎ行くを待てば、却ていよゝ忍びがたくなるも、かなしきことなり。われも、其許と共に、養育せざるが、覺束なければ、今は若宮を故更衣の形見と思ひて具して参内せよとの心なり。かくと御文認めさせられて、尙ほ文末に宮城野云々の歌あれど母は其處までは悲しさに堪へて得讀み行かずとなり。

わりなく は、無道理なることなりといはんがことし。

もろどもにはぐまぬ は、若宮里におはしまして、祖母一人の手にて養育せられて、帝が若宮の祖母と諸共に得養育し給はぬをいふなり。

はぐむ は養ひ育つること。

むかしのかたみになぞらへて 若宮を更衣の形見ぞと思ひて、具し奉りて参

り給へわれもそこもろともにはぐしまんどの心なり。
 歌の意は秋風立ちて、禁中にもそらるゝに涙の催はさるゝにつけて若宮の上を
 もいかにと思ふとの意なり。

宮城野 は陸奥の名所なり。一方よりは宮中に縁をどり、一方よりはと露風と
 いはんために縁を求めたるなり。

こはき は小萩にて兒に縁をどり、又一方より野と露と風とにちなみて用ひ
 たることばなり。

命長さのいとつらう思ひ給へしらるゝに、松の思はんことだに、恥かしう思ひ給へ
 侍れば、もしきに、ゆきかひ侍らんことは、まして、いと憚り多くなん。かしこき仰せ
 ごとをたびくうけ給はりながら、みづからはえなん思ひ給へたつまじき。若宮は、
 いかにおもほしけるにか、参り給はんことをのみなん、おほし急ぐれば、ことわり
 に悲しう見奉り侍りなごうちうち思ひ給ふるさまを、奏し給へ。ゆゝしき身に侍れ
 ば、かくておはしますも、いまくしう、かたじけなくなどの給ふ。

大意 命長ければ則辱め多きを人に交はらんは、恥しきことなれば、禁中に参

内せんも、あまり憚り多きことなり。これよりさきにも幾度も御使はありけれ
 ど、吾心には参内思ひ立たず。若宮には何如に思し召し給ふか、禁中へ参らんこ
 とを思召す様なるも御道理と見奉り思ふさまを御門へ奏上し給へ。若宮は大
 切なる御身なれば、この蓬生のむさきところに、とめおき奉るも恐れ多きこと
 なりとなり。

松の思はんことだに は、古歌の『いかにして、ありとしられし、高砂の、松の思は
 んことものはづかし』を引用したるものなり。その意は、つれなくながらへて、高砂
 の松とひとしく人に知られんも恥かしこのころなり。

もしき はもと大宮の祝詞なりしが、やがて大宮の事に用ふるに至りたり。
 ことわり は俗に云ふ御尤に同じ。

宮は大どの籠りにけり、見たてまつりし、委しく御有様も奏し侍らまつしきを、待ち
 おはしますらんを夜更け侍りぬべしとて急ぐ。

大意 宮様はもはや御寝入り遊ばしたるな、御目ざめならば若宮を見奉りて
 委細なる御様子を申上げんと思へど、禁中にては、御門御返事待ち給ふなるへ

しはや夜もふけぬとて歸り仕たくを急ぐとなり。宮は大どのごもりにけりよ
り夜更け侍りぬべしまでは命婦のことばなり。
くれまどふ心のやみも堪へがたき片端をだにはるくばかりに聞こえまほしう
侍るを私にも心のどかにまかで給へどしごろうれしくおもたゞしきついでにの
みたちより給ひしものをかゝる御せうそこにて見奉るかへすくつれなき命に
も侍るかな。

大意 子を思ふ道に暮れ迷ふ心の闇の少しにても物語り申して慰のなきを、
いそぎの御事なれば又御用の際に來給へかし。更衣が存生の時は面目なる事
時にのみ立寄り給ひしものを此の度はかなしきことにての御出とはげにつ
れなき吾が命なりとて母の詞より尙ほつゞきて次にあり。

はるく は晴れかすの約言にて晴らす意なり。

私にも とは此度は公のつかひなれど時々私にも來給へるなり。

まかで給へ 罷り出で給へ即、宮中を退出してこゝに來たまへの意なり。

おもたゞしき は面起たしきにて面を起こすの意なり。

生れし時より思ふこゝろありし人にて故大納言いまはとなるまで唯この人の宮
仕へのほい必らず遂げさせ奉れ我れなくなりぬとてくちをしう思ひくづほるな
どかへすくゝいさめあかれ侍りしかばはかくしう後見思ふ人なきまじらひは
なかくなるべき事と思ひ給へながらたゞ彼の遺言をたがへどばかりにいた
したて侍りしを。

大意 更衣事生れて幼少の時より宮仕への心ありしものにて父大納言今は
の際まで吾が子の宮仕へ本意の通り遂げよ我れ死なばとて中擡するなかれ
ど度々くりかへして遺言せられしかば確かなる後見の人なきを知りながら
も遺言に違ふまじとて宮に入れしにとなり母の詞尙ほ次につゞけり。

思ふこゝろありし は更衣の宮仕へして御寵愛を蒙る事もあらばいみじき
家の榮譽と思ひしをいふ。

いまは は命旦夕にせまりたる時即死にきはのことをいふ。

宮仕へのほい 上に思ふこゝろありしといへるも即此の本意なりほいは本
意の略音と心得べし。

くづほる は頼るの意にて志の頼るゝこと、又は中止の意なるべし。
 身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつゝ、ま
 じらひ給ふめりつるを、人のそねみ深くつもりやすからぬこと多くなりそひ侍る
 に、よこさまなるやうにて、遂にかくなり侍りぬれば、かへりては、つらくなんかしこ
 き御志を思ひ給へ侍る。これもわりなき心のやみになん。どいひもやらず、むせかへ
 り給ふほどに、夜もふけぬ。

大意 更衣、宮に入りてより、過分の御寵愛蒙りて、御心用ゐるの何事にまれ、畏れ
 多く忝むけなきに、人には人とも思はれざる耻を意とせずして、過ぐしゝを、遂
 に人の嫉妬深く積りて、病も重くなりゆき、唯ならぬ様子にて、此の世を去りぬ
 れば御寵愛の甚しきは、却りて更衣の煩となりたりと、今より思ふも、亦無理な
 る親心の闇なり云々といひも終らず、疾く涙に咽せ返へるほどに夜はやうや
 く更け行きたりとなり。

ひとげなき は人氣なきにて、いと輕蔑せられて、人らしくももてなされぬを
 いへるなり。

よこさまなるやうにて は、あまり御寵愛のすぎて人のそねみつもりて、そが
 爲めに死に失せられたれば、横死の如く思はるゝとなり。
 上もしかなん、わか御心ながら、あながちに人目驚くばかり、おほされしも、ながゝる
 まじきなりけり。どいまはつらかりける人のちぎりになん。世にいさゝかも、人の心
 を曲げたることあらじ、と思ふを、たいこの人故にて、あまたさるまじき人の、うちみ
 をおひしはて、は、かううちすてられて、心をさめん方なきにいと人わろく、か
 たくなになりはつるも、さきの世ゆかしうなん。どうちかへしつゝ、御しはたれがち
 にのみおはしますとかたりて、つきせずなく、夜いたう更けぬれば、こよひすぐ
 さず御返り奏せんとていそきまゐる。

大意 御門の仰言も只今の御物語りと同じことなり、あながちに人の彼れ此
 れいふほど、わが心に入りしも、契りの短かゝるべき前表なり。世に少しにても、
 人の心など曲げたることなきを、唯々故更衣ゆゑ、人よりも怨みを受けてその
 へては、更衣にはかく打ち捨てられ、今の悲しみ遣らん方なく、人に笑はるゝ頑
 愚の闇路に陥りたるも、前世の約束は、いかにありけんなど、かへすゝ御袖う

るほさるゝなりとて泣きつ語りつする程に、夜もますます／＼更けぬれば、命婦は、かやうに、互に種々語り盡さんとせば、夜も明けぬべし。今宵のうちに、御返事奏上せんとて別れ歸らんとするなり。

世にいさゝかも、とは、他に捻曲げたることは少しもなしとなり。そのうちには更衣故には、みだれたまへるとなり。

しほたれがち、涙がちといふにおなじ。

かたりてつきせず、は、物語して盡きぬことなり。

月は入りかたの空清う澄みわたれるに、風いとすゞしく吹きて、草むらの虫のこゑもよほしがほなるも、立ち離れにくき草のもとなり。

大意 月は入り方の影細く、空いと清らかにさえ渡り、野分の風肌に涼しく、覺え叢の虫も聲々になきて、悲しさ催うすれば、其の住居を俄に見捨て、去り難しとなり。

月は入りかたの、の云々は上の、夕月夜のをかしき、月かけばかりぞ等に照應して物淋びしき景色を形容したるものなり。

風いとすゞしく、云々は、上の、野風立ちて、野分にいとゞあれたる等を受けて、こゝにては荒かりし風のやう／＼吹きしづまりたるをいへるにて、淋しさを垣さむ下心なり。

草むら は、叢にて、上の、草もたかくなり、やへむぐら、よもぎふなどに應じて更に虫の聲を添へたるなり。

もよほしがほなる は、顔に涙を催うすさまをいへるなり。

草のもとなり は、蓬生のうちといはんが如し、そのあはれなる、風情をいへるなり。

すゞむしの聲のかきりをつくしても、

ながき夜、あかずふるなみだかな。

えものりやらず。

大意 命婦去り難く、此の歌を讀み、車に上る力もなき有様なり、歌の意は叢なるすゞ虫の如く、聲のかきりを盡くして歎きても、此の比の秋夜の長きにもあきたらで、涙の出でくるとなり。

すゝむし を特に草むらの虫の中より取り出でたるは、後に「ふる」といひ出でんためなり。

ふるなみだ とは、涙の出ることを雨のふるに似ひたるものなり。いとしく、虫のねしげき、あさぢふに、

つゆあき添ふる雲のうへ人。

大意 これ母の歌にて、悲しきが上に命婦の哀れを添へしをかこちたるなり。

歌の意は悲歎することしげき宿に涙を流し添ふる人よとの意なり。

雲のうへ人 は、勅使たる命婦をさしていへるものなり。

かごどもきこえつべくなん。といはせ給ふ。

大意 かこちごどもいふべきとて、既に車に乗りなどする命婦に向ひて、此の返歌を傳へしめしとなり。

をかしき御送り物など、あるべきをりにもあらねば、たゞかの御形見にとて、かゝる用もやどのこしあき給へりける。御さうぞくひとくだり御ぐしあげのてうどめく物そへ給ふ。

大意 愁歎の折節、風流の贈り物をなすべきにあらねば、夏衣の記念なりとて、かやうの事もやと思ひ、兼ねて用意のありし裝束一領、及髮揚の道具どもを添へて贈りぬるなり。

送り物 は、普通の贈り物と異り、客の歸るを送る時に贈るものをいへるなり。てうど は、調度にて、今、俗に云ふ道具なり。御くしあげのてうどは、即髮揚の道具にて、鉄劔の類をいへるなるべし。

わかき人々かなしきことは更にもいはず、内わたりを朝夕にならひて、いとさうしく、うへの御ありさまなど、思ひいできこゆれば、どくまり給はんことを、そゝのかし聞こゆれど、かくいましくしき身のそひ奉らんも、いと人ぎうかるべし。又見奉らで、しばしもあらんは、いとうしろめたう思ひ聞え給ひて、すがすがどもえまゐらせ奉り給はぬなりけり。

大意 若宮につきそふ若き女房たちは、更衣のことにつきての悲歎はいふまでもなく、禁中の人、あまたなるあもしろき所に、住みなれし故蓬生の門は、殊に寂しく御門の御有様など常に思ひがちなれば、母北方にすゝめてとく參らん

と誘ひそゝのかせども、母は、かく老い萎れたる身の、若宮に添はりて、参内するも人の聞えもよろしからざらん。母さればとて又若宮のみ、ひとり参内せられんも、心もどなしと思ひて、速に若宮をば遣はし奉らざりしとなり。

さうくしくは、寂寞なるをいふ。

うしろめたきは、心もどなきこと、

すがくは、俗にサツパリといはん程なり。

命婦は、まだおほどのごもらせ給はさりけるを、あはれに見たてまつる。是より命婦がかへりたることをかたるが、その歸へるところは省きて、命婦が思ふこゝろより書きいでたるなり。

大意 命婦は御門の未だ寝に就き給はざるを見奉りて、その御心のほど察しまゐらせられ、ますくあはれを催しぬとなり。
おほどのごもらすは、寝に就かせ給ふことを云ふ。

あまくのつばせんざいのいとあもしろきさかりなるを、御らんずるやうにて、しんびやかに心にくきかぎりの女房四五人、さぶらはせ給ひて、御物がたりせさせ給ふ

なりけり。

大意 御門は前庭のいと面白く盛りなるを御覽するさまにて、忍びやかに四五人の侍女を御相手に種々の御物かたりをなし給ふとなり。

御らんずるやうとは、心には命婦の歸りを待ち給へども、表面には前栽の草花を御らんずるさまなりとのこゝろなり。

心にくきかぎりとは、數多女房中の奥ゆかしき分どもをの意なり。

このころあけくれ御覽する長恨歌の御繪、亭子院のかゝせ給ひて、伊勢貫之によませ給へる、大和言葉をも、もろこしのうたをも、唯そのすぢをぞまくらごどにせさせ給ふ。

大意 御門は此の頃朝夕に御覽する、長恨歌の繪に、亭子院や、伊勢貫之等の賛したる歌をも、同じ唐土の詩をも、皆その妻に別れし條を常に暗誦し給ふとなり。

いとこまやかに有様を問はせ給ふ。あはれなりつることしのびやかに奏す。

大意 時に待ち詫ひ給ひし命婦歸り來りたれば、母の有様を細かに尋ね給ふ。

よりに命婦は、物語りの次第などを、又忍びやかに申しあげしとなり。御返り御覽すれば、いともかしこきは、おきどころも侍らず。かゝる仰せ言につけても、かきくらすみだりごゝちになん。

これ母より返事の詞なり。俗譯すれば、忝き勅書給はりしは、誠に恐れ多きと、なり、かゝるみことのりにつけても、老のこゝろは、いよゝますゝ關路に迷ひぬどなん。

あらし風、ふせぎしかげの、かれしより、

小萩かうへぞ、しつこゝろなき。

これは返事のふみに添へたる、母の歌にて、其の大意は、大切に養育し奉るべき母更衣はうせて、御子のうへ、まこと心もどなしとなり。

小萩 は子をかねたる詞にて源氏の君をいへるなり。しづこゝろなき は静心なきにても心もどなく安心ならぬをいふ。

などやうに、みだりかはしきを、心をさめざりけるほど、御覽しゆるすべし。いどかうしも見えじとおぼししづむれど、更にえしのびあへさせ給はず。御覽じ始めし年月

國 文 學

の事さへかきあつめ、よろづにおぼしつけられて、時の間もおぼつかなかりしを、かくても月日はへにけりど、あまましうおぼしめさる。

大意 御門はこの亂れがましき歌をも此の程のこととて許し給ふなるべし。さて御門は、かく心弱き御愁歎の容子を、人には覺られまじと思ひとゞめ給へども、なかゝに忍びがたき御有様にて、更衣の參内せし初めより、今までの事ども彼れ此れと思ひつゝけられて、更衣の世にありし時は、暫時分るゝだに尙ほ慕はしかりしに、亡せて後は見もせぬに月日はたつものかなと常に御心細う思し暮らし給ふとなり。

時の間 は、暫時のことをいふ。

故大納の遺言あやまたず宮つかへのほい、ふかく物したりしよろこびは、かひあるさまにどこそ思ひわたりつれいふかひなしやど、打の給はせて、いどあはれにをばしやる、かくてもをのづから若宮などおひいで給はゞ、さるべきついでもありなん。命ながくてこそ思ひねんぜよなどのたまはず。

大意 なほ命婦より、故更衣の父、故大納言の遺言とて母の物語りしたること